

人類の育てた果実

(自分探しの旅の果てに)



マッキー & 徳永真亜基

もくじ

はじめに	3
自1・自己紹介から	3
世1・愛の正体	4
自2・自分探しのための方法論	4
世2・愛の一般的定義	6
自3・宇宙で一番小さい単位	7
世3・土居氏の日本人論と甘え	8
自4・宇宙の始まり	9
世4・日本人は本当に甘えているの？	11
自5・そして あらゆる元素が作られた	12
世5・欧米人は本当に甘えないの？	13
自6・ビリヤードってやったことありますか？	14
世6・甘えの結論	15
自7・僕たちの前にルールはない！	16
世7・愛の分類	17
自8・レゴで風車を作ると	19
世8・美しいイメージを持たされた愛	20
自9・刺激に対する反応 それが全て	21
世9・不覚にも涙が	23
自10・君の筋肉を動かすのは誰？	24
世10・幼児虐待と愛	25
自11・脳の中の細胞	27
世11・離婚率世界一を誇るアメリカの名言	28
自12・ワニの脳、ウマの脳、ヒトの脳	29
世12・あなたへの一つの質問	31
自13・どこが感じているの？	32
世13・犬と人間の良い関係	34
自14・至福感の受容体	35
世14・マザー・テレサの愛	37
自15・不確かな脳	38
世15・悪が生まれた理由	39
自16・何をどのように記憶するの？	41
世16・それでも本能は必要？	43
自17・意識・思考	44
世17・子育てよりも助け合い	46
自18・脳が見ている現実	48
世18・科学者は本能なんて言葉使わない	50
自19・正常？ or 異常？	52
世19・実践・本能分類表	54
自20・科学者の非科学的解釈	56
世20・ネガティブ・シンキングのすすめ	58
自21・現代科学の限界	59
世21・自分を嫌いになった時	62
自22・人類最大の言い訳	63
世22・僕を書く理由	65
自23・(最終号) 不思議な樹	69
世23・世界を平和にする愛	71
世24・(最終号) どんな味がしますか？	73

注：先頭に自1、世1などとあるのは、それぞれ『自分探しの旅with マーキー NO.1』、
『世界を平和にしない愛 NO.1』の略です。

はじめに。

これは、2002年6月18日から2002年11月26日にわたって、計24回発行させていただきましたメルマガジン『自分探しの旅 with マーキー』と『世界を平和にしない愛』を合体させて、加筆修正して再編集したものです。僕は、そのメルマガの発行人、徳永真亜基です。

『自分探しの旅 with マーキー』（青色で表示）の執筆者はマーキー君ということになっていますが、実は、彼は僕の書いた物語『アラスカの風に乗せて』の中の主人公で、その中でしか実在しないのですが、みなさんの案内役として登場してもらいました。『世界を平和にしない愛』（緑色で表示）の執筆者は、僕自身ということになっています。この二つの「自分探し」は別々のところから出発しますが、最後には同じ頂上に到着します。

幸福とは？ 平和とは？ 愛とは？ 人間とは？ 生命とは？ 死とは？ この宇宙とは？
あなたはそれらの疑問を、解決しないままでも不安ではないですか？
何を信じたいのかかわからないこんな時代だから、自分でその答えを探す旅に出ませんか？

%%%

自分探しの旅 with マーキー NO.1 自己紹介から

%%%

これからの僕たちの 本当の幸福は 一人一人
が自分を見つめる ところから始まる
大人だって 自分を知らないってことにしちゃう
全く子供と同じだったんだ それは
世界中の人が学校で足し算を習うよりも
もっともっと 大切なことなのに

マーキーから一言

始めまして、僕は『アラスカの風に乗せて』という物語の中の主人公、マーキーです。『アラスカの風に乗せて』というのは、ある女性に「自分探し」をテーマとした手紙を送り続けるという物語なんだけど、ついに主人公のこの僕がある思想に到達するんです。作者は、徳永真亜基という偉い？先生ですが（と言うか彼は21年前に静岡県の美術の先生に採用が決定していながら、結局は先生にはならなかった変人なんです）本当は、彼は僕がそんな思想に到達することなんて、初めはこれっぽっちも予想していなかったんです。

ある思想というのは、僕が「唯向論」と名づけるんだけど、僕がいなければ、実際、彼には何にも考え出せなかったと思うよ。
このメルマガは、僕がその物語の中で、いろいろ考えたことを元にして作成していきます。だから、こちらのメルマガの著者は徳永真亜基ではなく、僕、マーキーです。自慢するわけじゃないけど、絶対僕の方が説明がうまいしわかりやすく書けると思うからです。著作権もこちらはマーキーに帰属します（エヘン）、決してあいつ、いや、あの先生には著作権なんてありません。彼はそれを泣いて主張するかもしれないけど。でも、せめて彼の名前は、発行人として残しておいてあげることにはします。

このメルマガを最後まで読んでくださった方は、きっと最後には、不思議な体験をされるはずですよ。（*^_^*）

それは、最後まで読んでくださった君に、僕からのプレゼントです。

マーキーから二言

今日は、記念すべき創刊号ということなんで、もう少し僕の紹介をさせていただきます。
と、あらたまると、何を話したらいいかわかんないや。僕は自己紹介が大の苦手です。自分のことを話そうとすると凄く緊張しちゃうんです。こんなのが、僕の自己紹介です。（笑）

マーキーから三言

最後に、僕の産みの親、徳永真亜基先生のことをちょっとだけ書いておきます。ちなみに、彼は先生という言葉が大嫌いなので、わざとそう呼んでやるのです。彼は自分が考え出した思想でもないのに、有頂天になってこれこそ世界を平和にする思想だ、などと騒いで、みなさんに大変ご迷惑をおかけしています。でも、まんざら嘘でもない、僕も思っています。

世界が平和になるとはどういうことでしょうか？ 世界中のみんなが裕福な暮らしをするようになることでしょうか？ 全然違います。世界中のみんなが病気もしい健康な身体になり、長生きすることでしょうか？ 絶対違います。戦争がなくなることでしょうか？ 半分は正解ですが、半分は違います。戦争がなくなっても、本当の意味で平和とは言えません。僕は、平和とは、世界が仲良しの人間関係でつながることだと考えます。貧しくたって、健康じゃなくなると、そんなものどうでもいんです。人間の本当の幸せは、人間同士の「共感」、それにつきて思うんだ。唯向論は、ある面、仲良しの人間関係を築く思想とも言えますから、その意味から言うと確かに世界を平和にする思想と言うことができます。でも、このメルマガは、唯向論のことを書くために作成しているのではないから、唯向論については、また機会があったらお話をさせていただきます。

ああ、真亜基先生のことは何にも書かずに終わってしまいましたね。まあ、いいか。彼のことは、ホームページ『アラスカの風に乗せて』<http://www.epm-hassin.net/>の「始めまして」を読んでください。自己紹介のようなものが書かれています。それでは、僕と一緒に自分探しの旅に出発しましょう！ 次回のテーマは「自分探しのための方法論」です。（つづく）

この世は 世界を平和にしない愛 であふれています
 世界を平和にしない愛 はあなた自身を そして周囲の人を無意識で
 深く傷つけています
 傷ついた心たちを癒すことのできる愛 だけが世界を平和へと導いて
 くれる愛です
 深い安心感に包まれ 癒されていく愛を
 最後に感じとってください

発行者の自己紹介

始めまして、僕はこのメルマガの発行者、徳永真亜基です。このメルマガは、僕が書いた『アラスカの風に乗せて』という物語の中の主人公が、たどり着いた思想を元にして作成します。それは、ある女性に「自分探し」をテーマとした手紙を送り続けるという構成で書き始めたのですが、書き進めていくうちに、彼は作者である僕の手を離れて、予想もしていなかった場所に導いてくれました。僕は、その体験をあなたにもしていただきたいと思い、このメルマガを発行することに決めました。

愛の正体

愛という言葉聞いて皆さんがイメージされるものは何でしょうか？

優しさ、清らかさ、笑顔、ハートマーク、いい感じのもの、癒されそうな感じ、優しい気持ちになれそう、タンポポの綿毛のようにふんわりしたもので、暖かく包んでくれそう、みんなの心が一つになれそう、世界を救ってくれそう。

何だか、愛という言葉は万能薬のようなもので、それさえ付け加えておけば何事も丸く収まるもののように。「愛は地球を救う」と言えば、それだけで何かを救ったような気になってしまうから不思議です(笑) それとも「愛」という言葉を聞くと反吐が出そうになる人もいるかも!?

でも、この愛に翻弄されて、あるいは、この美しいイメージに縛られ、僕たちは無意識で自分自身を深く傷つけ、周囲の人間を傷つけ、世界から平和を遠ざけています。

まず最初に、「愛」の正体は何？ という問いを投げかけたいと思います。結論から言います。僕は「愛」の正体は、「差別」ではないかと思えます。

ゾウアザラシという動物がいます。以前テレビで見たのですが、この動物は、たくさんの群れの中で生活しているにもかかわらず、母親は自分の子供をちゃんと見分けられる(嗅ぎ分けるだったかもしれませんが)のだそうです。それで我が子に愛を注いで子育てをすることができます。もし自分の子供以外の子供が側にきても、知らん振りなので、場合によっては彼女の重い体重で踏み潰してしまうこともあるそうです。この時、母親が自分の子供を見分けられなかったら、大切な我が子であっても踏み潰してしまうことになりかねません。そうしたら、とっくにゾウアザラシは絶滅していたでしょう。僕は動物本来に備わっている、この「差別化する能力」こそ、愛の本質ではないかと考えています。差別という言葉からイメージされるものは、愛とは全く逆のものでしょう。でも本来、「愛」とは、「差別」と親類関係の言葉だったので。

今、世界のいたるところで平和が叫ばれていますよね。でも、平和にはなりません。何故でしょうか？

それは、平和にするためには「愛」が必要だと考えているからです。でも、愛とは平和のために必要なものではなく、むしろ戦争を引き起こしかねないものです。何故なら、愛を守り、愛を貫き通すために、場合によっては「他者」に攻撃をしかけなければならないからです。雄々しく戦う必要が起きてくることもあります。時には凶暴な獣と化すこともあります。

それは、愛の本質が「差別」であり、「自と他との差別化」をした上で生まれてくる感情であるということの証明でもあると思います。そして、いくら僕たち人間には理性があると言っても、この「自と他との差別化」は、自分の中から排除することはできません。差別とは生きることの本質でもあるからです。もし差別ができなければ、人間は何事にも優柔不断で、永遠に迷い続けなければならないからです。

(つづく)

今回のテーマは、「愛の一般的な定義」です。

%%%

自分探しの旅 with マーキー

NO.2 自分探しのための方法論

%%%

自分探しのための方法論

人間が自分探しをする理由を、「結局は、自分の生きている価値を見つけるためじゃないかなあ」と、僕の友達が言ったんだ。「確かにそれも当たっているね」と僕は答えておきました。自分の生きている価値を見つけるとは、なかなかうまいことを言う奴です。いろいろ

な解釈があるでしょう。でも、理由はどうであれ、人間は「自分は誰？」と考えてしまう動物であることも事実です。そしてまた、考えなければいけない動物でもあります。本当は、脳の構造がそのようになっているだけ というのが正解なのかもしれませんね。(*^_^*)
自分を知らぬ方法は、大きく二つに分けられると思います。

1、非合理的思考方法

2、合理的思考方法

非合理的思考方法は、人間ととても相性がよく、その代表的なものは、宗教とか占いとか、くだけた心理テストなどです。なぜ人間と相性がいいかというと、自然を解釈する上で、いくらでも自分に都合のよい、心地よい解釈が可能だからです。例えば、人間は実際には見たこともない神様の姿を自分たち人間に似せて作ったし、占いや心理テストに関しては、都合のいいことだけ当たってる、って信じるじゃない(笑)。ところで、今日から出発するこの旅は、合理的思考方法による自分探しの旅なんです。合理的思考方法とは、科学的思考方法のことです。

まず初めに、君に覚えておいていただきたい言葉があります。それは、「言葉は偏見を記述したものに過ぎない」という言葉です。これはとても大事なことなので、絶対に忘れちゃだめだよ。じゃあ、その言葉も偏見の一つじゃないか、って？ そう、その通りなんです。(笑) このことも最後にはちゃんと解決させることを約束しておきます。

この意味から言うと、科学とは、自然界を人間の偏見でもって解釈、あるいは説明しようとする一つの方法論に過ぎないということです。もっと簡単に言い換えると、月にいるのが 兎^{うさぎ}であるかクレーターであるか、それは自然を解釈する方法が違うだけで、どちらも偏見に過ぎないということです。

僕は、自然界を解釈する方法論として、宗教より科学が上だと考えているわけではありません。決して科学万能論を説くつもりはありません。それは宗教が一つの偉大なる？偏見であることと全く同じように、科学も一つの偉大なる？偏見に過ぎないのですから。それに、宗教には科学にない良い面もたくさんあります。その一つは、「無邪気な思い込み」です。それは、かつて、良い人間関係を築くために大変役に立ちました。ただ、良い悪いは別にして、今は科学が宗教を凌駕^{りょうが}しています。そしてこれからも、ますますその方向性を感じさせます。ということは、古い解釈法にしがみついている生きづらくなっていくということです。世界が狭くなってきている現在、もう、宗教では、良い人間関係を築きにくい時代になってしまっているんだ。

この自分探しの旅で、科学的思考方法を選択する最大の理由は、科学は実証^{じっしょう}の学問だからです。観察と実験を繰り返し、それが実証できるまでは安易に信じることをしません。そして、誰が見ても同じ納得がいく客観的な答えを導き出してくれます。例えば、人類がロケットを作って、実際に月の表面に立って、その映像を僕たちに送ってきたら、誰もが「月にいるのは兎ではなくクレーターだった」と認めなきゃならないわけですね。誰でも同じ一つの偏見にたどり着ける可能性を秘めています。

このことはとても重要です。なぜって、例えば、今まで宗教間の対立は、様々な宗教の偏見の違いによって起こっていたわけだけど、これをなくして世界が一つになれる可能性も秘めています。つまり、本当の世界平和は、合理的思考方法によってなされた自分探しから始まるのです。本当の世界平和とは、そこに住む全ての人々が幸福感や満足感を持って生きられる世界になることです。それが実現しなきゃ、君が真の意味で幸福を感じることはできません。真の意味の幸福とは、君一人が恵まれた生活をするのではなく、人間同士の「共感」につけるからです。それは決して不可能な、夢物語なんかではありませんよ。何故なら、君が本当の意味で、幸福や満足を感じる時というのは、財物をたくさん手に入れるとか有名になってちやほやされるとかいう、ものすごく努力と運を要求される実現困難なことなんかじゃないからです。それに、もし財物や名声を得ても、君の心は根本的には何一つ救われてはいないはずですよ。それらの根本には人間の欲望があるけど、欲望というのはキリがないものだからね。

そんなこと言ったらって、世界中にはまだまだ不幸な人がたくさんいる、彼らを一気に救うことなんてできっこない、だったら、本当の意味の幸福も手に入れないじゃない！ 一体、何百年先の話をしてるの？

と、君がお考えになるのも無理はないと思います。富める者は貧しき者を蔑^{さげす}み、貧しき者は富める者を妬^{ねた}み、この世から永遠に憎しみは消えないかのように見えます。

でも、世界中の不幸な人を一気に救うことが可能だとしたら？ いいえ、世界中の人は、実はもう救われていたんですよ。後はそのことに気づきさえすればいいんです。そうすれば、すぐにでも共感し合うことができる。つまり、何百年も先の話ではなく、君は、生きているこの瞬間に本当の幸福や満足を体験できるのです。

僕が自分探しの旅でたどり着いた時に発見した不思議な樹には、見たこともない果実がなっていました。僕がこれから君をお導きできるのは、その場所までです。後は、君自身の手でもぎ取って味わってみて欲しいのです。不思議な果実の味を。(つづく)

次回のテーマは「宇宙で一番小さい単位」です。

編集後記

前回の記念すべき創刊号を見てくれた発行人は、僕の方が説明がうまいわかりやすいということは素直に認めてくれたけど、でも、先生と言われたのがよほど腹が立ったらしく「僕のことは金輪際、先生とは呼ばない！」と怒鳴るんだ。頭にきちゃうよ。

わかりました、先生。もう二度と先生のことは先生と呼ばないようにします。ねっ、せんせい。

ああ、すっきりした。

愛の一般的定義

愛って何？ と聞くと、愛は理屈じゃないわよ！ って答えが返ってきそう。

ねえ、そんなに難しく考えないで！

どうして難しく考える必要があるの？

もっと、ロマンチックに愛をとらえられないのかしら？

僕には人々が、愛を考えることを避けているように思えてなりません。まるで、寝ている子を起こさないように、愛をそーっとしておこうとしているみたいです。愛を考えることを避けるというより、愛を考えることで、その先にあるものを見てしまうことを恐がっているのかもしれない。

でも、僕がこれからメルマガでやろうとしていることは、愛という魔法の言葉で封印された箱をこじ開けて、その中身を覗き見るようなことです。そんなのって、ちっともロマンチックじゃない。詩的じゃない。でも、やらなければいけないことだとも思うのです。世界を平和にする愛を知るために。

今、虐待に苦しんでいる子供たちがたくさんいます。虐待をしてしまう、その親も苦しんでいます。一人の人を愛してしまったことで、苦しんでいる人たちがいます。自分の愛する国を守るために苦しんでいる人たちがいます。大人も子供もみんな苦しんでいます。でも、その苦しみの原因は誰にもわかりません。わからないからよけいにイライラします。それはきっと、誰かが、その原因を箱の中に押し込み、そして愛という魔法の呪文で蓋をしてしまったからなのではないでしょうか。その箱は、愛という魔法の言葉のせいで、まるで宝飾品が入っている箱でもあるかのように綺麗です。僕はその綺麗な箱の中身を知りたかったのです。愛という魔法の言葉でごまかされなくなかったからです。そして、その箱の中身を知った今、何故、誰かが封印しなければならなかったのかわかりました。

今、その中身は、数千年の眠りから覚めて僕たちの前に姿を現します。数千年経った僕たちがやらなければいけないことは、愛という魔法の呪文で、もう一度封印することでしょうか？ 違います!! 数千年の間に、僕たちはその中身とうまくやっていけるだけの知恵を身につけました。もう、ごまかす必要はない、僕はそう感じているのです。

愛という魔法の言葉はやっかいなもので、箱の中身を美化することができるだけでなく、愛という言葉そのものまでをも美化する力があります。それは、一般の社員だった人がある日課長に任命され、課長になったことで一般の社員ではなく課長な人間になっていくのと同じようなことかもしれません。愛は確かに愛であることを求められ、そのことによって愛的な愛になっていったのです。愛という言葉は、世界中の美しいものの代名詞でもあるかのような愛になっていったということです。

僕たちが「世界を平和にしない愛」に気づかないのは、そのせいなんだと思います。だから、愛を考えることにまで蓋をしちゃうと、永遠に救われなと思いませんか?!

そこで、まず、一般的な愛の定義から始めます。

愛とは「甘えたい欲求と甘えを許すことができる心が出会った時に起こる感情である」と考えます。

たとえば、ある暴走族の少年がいて、テレビの取材で「君たちは社会の迷惑というものを考えないのか？」と聞かれた時、「自分が楽しげりゃいいんじゃないかねえの？」と答えたりしているのを見た視聴者は「ふざけんな甘えやがって！」と憤るわけですが、その時、暴走族の甘えを許せない視聴者は、彼に対して愛がないのです。

ところが、その少年には真面目な彼女がいて、彼の行為に対しては批判的な言葉も吐くのですが、それでもどこか放っておけない、つまり、彼をその容認されない行為もひっくるめて広い心で包んでいるとします。

そこに愛が存在すると思うのです。

ここから「愛とは、甘えたい欲求と甘えを許すことができる心が出会った時に起こる感情である」という結論を導きました。

「愛とは、甘えたい欲求と甘えを許すことができる心が出会った時に起こる感情である」と書きちゃったので、愛よりも前に、甘えについて書かなければならなくなりました。僕が土居氏の『甘えの構造』という本に出会ったのは、10年以上も前のことです。その頃僕は、先ほど書いたように、

* 愛とは 甘えたい欲求と甘えを許すことができる心が出会った時に起こる感情である。

* 甘えとは 本能の求める欲求を押し通そうとすること、あるいは本能が最も居心地がよく感じる状態を維持しようとするものである。

という自分の考えを検討中でした。そんな最中に図書館で偶然見つけたのが、この『甘えの構造』だったのです。

もしあなたが、精神医学者、土居健郎という人の「甘え」に関するたくさんの書物の中の一つでも読んだことがある人なら、これから僕が書こうとしていることは、全く彼の見解と逆であることに違和感を持たれるでしょうか？

最初に土居健郎氏のことをご紹介します。1920年生まれ、精神医学者で、30歳の時アメリカに留学したのですが、その際に受けたカル

チャーショックがあまりにも強烈で、その経験から、ルース・ベネディクトの『菊と刀』のような日本人論を書こうと思ったそうです。そして日本にあって欧米にはない言葉「甘え」を発見し、それを研究することで日本人が理解できるのではないかと考えました。

甘えという言葉は無理やり英語に訳すと、wheedle (ねだる) とか、dependence (依存) などとなり、アメリカ人が最も恐怖する状態だそうです。つまり、自立を標榜するアメリカ人には、年を取って他人に依存しなければならない状態というものが、恐怖にも値するということです。それに引き替え、日本は「甘え」というものに寛容な(持ちつ持たれつといった)文化だと主張します。彼に言わせれば、例えば、「義理」、「人情」、「遠慮」などが古くからの支配的なモラルであるということは、日本がいかにも甘えの瀰漫した社会であるかということの証明でもあるということです。

僕は彼の「甘え」に対する洞察力の鋭さに、ただただ感心し、全てを肯きながらため息をつきつ読みだしたものでした。ところが、何でも読んでいたうちに、彼の見解「日本は甘えの瀰漫した国。欧米は甘えを恐怖する国」というのは全く逆だったと、ハタと気づくことになるのです。(つづく)

次回のテーマは「土居氏の日本人論と甘え論」です。

編集後記

創刊号を読んで、メールをくださった方ありがとうございました。みなさんのご意見は、僕の思想およびこのメルマガに必ず反映させていただきます。

%%%

自分探しの旅 with マーキー

NO.3 宇宙で一番小さい単位

%%%

宇宙で一番小さい単位

今日はちょっと難しい話をするけど、とっても大事なことでよく聞いてくださいな。

現代科学が解明している最も小さい単位を知ってますか？ 例えば、残酷のようだけど、僕たちの身体の手や足や頭をどんどんバラしていったら、その手や足や、それに髪の毛なんかをもっともっと細かく切り刻んでいくと、ついには細胞というものに分解され、細胞もどんどんバラしていきと分子というものになり、その分子もバラしていきと原子になり、原子もバラしていきと原子核と電子に分かれます。そして、その原子核は陽子と中性子からできています。この辺りまでが、僕が学校で習って知っていた知識でした。

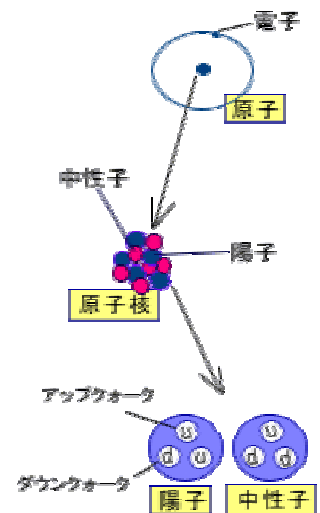
電子はマイナスの電荷を持ち、原子核の周りを動き回っています。この電子が動き回っている範囲が山手線くらいの広さだとすると、原子核はリンゴの大きさくらいだと考えられています。このリングをもっと小さくして直径1ミリの砂粒だと考えたら、電子は直径100メートルのグラウンドの中を動き回っている計算になるのです。もっと驚くべきことは、太陽をこの1ミリの砂粒だとすると、一番遠い冥王星までの太陽系は、直径わずか9メートルの円しか描けないのです。ミクロの原子の中で、この太陽系よりも隙間だらけなんです！ しかも、100メートルのグラウンドの中を動き回っている電子の質量といたら、陽子や中性子の2000分の1くらいしかありません。人間はそんなものを発見しちゃうんだから、凄いとえば凄いな。

原子核は陽子と中性子からなり、陽子が電子と同数のプラスの電荷を持っているので、互いに引きつけています。でも、陽子と中性子はそれぞれもっと小さなクォークという素粒子で構成されていることがわかってきました。それまで陽子にプラス1という最小の単位をつけていたのに、クォークが出現しちゃったため、クォークにはマイナス3分の1とかプラス3分の2などという半端な数をつけなければならなくなりました。だから、今後もっと小さな粒子が発見されれば、もっと半端な単位が出てきてしまうことになります。あーあ、だんだん計算が難しくなっちゃうなあ。って僕が計算するわけではありませんでした。

現在最も小さい単位、つまり、素粒子(それ以上分割できない、内部に構造を持たない点状粒子をイメージしたもの)と言われるものは、このクォーク(6種類あると言われてます)と、電子を含むレプトン(これも6種類あると言われてます)と、このクォークやレプトンの間に働く力を媒介するゲージ粒子たちです。

僕たちの身体や地球、そして宇宙に存在する全ての物質が、元はと言えば、これらを組み合わせただけでできあがっているわけなんだ。しかも、全ての物質を構成するために使われている力は、今のところたった4つだと考えられています。ちなみに、その4つの力とは、クォーク同士を結びつける「強い力」、電子と原子核を結びつける「電磁気力」、原子核の崩壊などに働く「弱い力」、全ての物質に引力として働く「重力」、この4つだよ。宇宙の始まりは、一つの力だったものが4つに枝分かれしたのではないかと考えられているため、現在、この4つを統一する大元の力を科学者たちは探しているところです。

物質が宇宙を作っているという言い方もできるけど、この4つの相互作用が宇宙を作っていると言い変えることもできます。何故かと言うと、物が存在するには相互に働く力があるからで、僕たちが物を見ることだって実は物と相互作用をしているのです。物から飛び出した光子、あるいは物の表面で反射された光子が、人間の目の中の細胞を構成する分子と相互作用をしているわけだよな。



さて、現代科学は、陽子、中性子、などを構成しているもっと小さい単位、クォークやレプトンという素粒子にまでたどり着いているという所までお話ししました。難しい名前やその分類は別にして、僕たちの身体や地球、そして宇宙に存在する全ての物質を作っている最も小さい単位を突き止めているという所までお話ししました。

古代の哲学者デモクリトスは、驚くことに、現代の原子論にも通じる理論（アトム論）を打ち立てていました。アトム（原子）というのは、もうそれ以上分割が不可能なものという意味で、モノだけでなく色や味や魂なども目に見えないほど小さなアトムの組み合わせによる変化に過ぎないと考えたのです。これは、現代科学が到達している考え方と同じです。しかも、アトムが渦巻きのように集まって、そこから球形の組織ができてくるという、^{せいじゆんせつ}星雲説の元祖^{がんそ}のような世界生成論^{せいせいじゆん}さえ唱えていました。

だけど、万人を説得する根拠はどこにもなかったんだ。実証できなければ単なる信念に過ぎないのです。現代科学と古代哲学の最も大きな違いはこの点でした。彼ら（古代哲学者たち）は、頭の中であれこれと考えるだけで、自然を観察したり実験したりして実証しようとしなかったんです。実験するための大掛かりな装置がなかったし、自然を観察するには時間が足りなかったということもあるけど、それよりも何よりも純粹に、考えることが楽しくてしょうがなかったのかも知れないね。

ところで、僕たちは高性能の電子顕微鏡を使っても、やっと原子の配列を見ることができるくらいで、誰もその内部を見たことがないのに、どうして真中に原子核があって、その周りを電子が回っているという構造がわかるのでしょうか？ それは、たくさんの実験から得たデータを元にすると、そのような構造であることが予測できるのです。また、分子の構造を図で説明する時、よく陽子や中性子や電子^{つぶ}を丸い粒として描くけど、誰一人としてそんな形を実際に見た者もいないんです。例えば、電子は実験から得たデータを元にすると、粒状であると考えられるけれども、波の性質も兼ね備えているということもわかっています。確かにそれは存在するのですが、実体は未だにはっきりしない、というのが本当のところじゃないでしょうか。

素粒子の世界は、常識では考えられないことがたくさんあります。そこから不確定性原理とか、確率解釈という考え方も生まれました。これは、実に興味深い話題だし、僕たちが自分を知るためにはどうしても乗り越えなければならない壁でもあります。でも、そこを通過する前に、僕たちは一旦、宇宙の始まりにまで^{さかのぼ}遡^{さかのぼ}って、この旅を順序よくたどってみることにしましょう。（つづく）

次回のテーマは「宇宙の始まり」です。

編集後記

今回は難しい名前がいっぱい出てきたけど、このメルマガは別に物理学の講義じゃないから、みんな忘れちゃってもかまわないよ。僕たちは、その中から、自分探しの旅に大切なエキスだけを抽出すればいいのです。今日のテーマでの大切なエキスは「ええーっ、現代科学は、ついに宇宙を支配していた究極の単位を発見しちゃってるんだ、すごいなあ！」ってことでもいいです。（笑）

全ての物質やあらゆる現象を作っている根本を発見しちゃっているんです。でも、もっと大切なことを見落とさないで下さい。

ここに到るまでの道は、決して平坦なものではありませんでした。同じ科学者同士の疑い、からかい、妬み、中傷、そういったもの乗り越えてきたからこそ、万人を納得させるだけの「偏見」を打ち立てることができているのです。疑い、からかい、妬み、中傷、それらを悪いと言っているわけではありません。今、僕たちが自分探しの旅で一番学ばべきものは、安易に他人のいうことを鵜呑みにしない、その科学者たちの疑い深い態度なのです。

創刊号で宗教の良い面を「無邪気な思い込み」と書きましたね。でも、今日はそれが宗教の悪い面だと言っています。一体どっちなんじゃー！ なんて怒らないでくださいね。僕たちの科学はもう始めてしまったということです。疑うことから。以前は信ずるものは救われると言われていました。今では、疑うことこそ、僕たちを真理へと導いてくれる最短距離となってしまったのです。なぜなら、科学的自然解釈方法を推し進めている昨今、真理とはその結論のことだからです。

今では、宗教は科学に力量の差を見せ付けられてしまいました。宗教は、まるで赤子^{あかこ}が手をひねられてあがいているかのように見受けられます。でも、初めに言ったように、科学も一つの偏見であることを決して忘れないで下さいね。つまり自然を解釈するための一つの方法、一つの思い込みに過ぎないのです。思い込みには正しい思い込みも間違った思い込みもありません。思い込みは、ある目標を設定したときだけ、良いか悪いかの判断ができるのです。例えば、世界平和という目標を掲げると、その思い込みは良いか悪いか判断できます。

どうやら、宗教は世界平和には向かない思い込みであったようです。

万人を納得させるだけの客観性に乏しかったのですね。（v_v）

~ 世界を平和にしない愛 ~

NO.3 土居氏の日本人論と甘え論

土居氏の日本人論と甘え論

土居氏は、^{せいおう}西欧にはない言葉「甘え」を使って日本人が理解できるかもしれないと直感したわけですが、その直感を支えていたものは次のような考え方だと思います。

「日本的思惟の特徴については諸家がいろいろな説を述べているが、畢竟^{ひっきよう}するに西洋的思惟に比較して非論理的直感的であることをいうものが多きようである」（『甘えの構造』P.38）

土居氏は、日本的甘えの世界を批判的否定的に見れば「非論理的、閉鎖的、私的」であり、肯定的に見れば「無差別平等を尊び、極めて寛容」であると考えているようです。この日本的な思惟、「難しいことを言わずにみんな仲良く許しましょう」って感じのものに「甘え」を直感的に重ね合わせてしまったのでしょうか。うーん、その直感、わかるような気もしますよね。何か、なあなあで、甘え合っているように

も見えなくはないですから。

ところで、精神医学者というのはなかなかの文学者でもあります。というより、言葉というのは人間の心理を直接表すものだから、言葉に敏感でなければ精神医学者は務まらないでしょう。言葉の中には人間の心理が刻み込まれているからです。

土居氏の着眼点は、僕のようなものが言うのも何ですが、確かになかなか鋭いものでした。「甘え」というのは、人間の心理を知る上でまったく魔法の言葉のようなものです。僕たちはこんなに簡単な言葉で人間のほとんどすべての心理を説明できるのです。例えば、僕ならあまり深く考えもせず次のように書くと思います。

「和夫は、小学二年生になるとすっかりひねくれてしまった。原因は、大好きだった渡辺先生とのその一件だった。そのせいで、学校に行かなくなったのである」

もし、これを土居氏なら次のように書いたかもしれません。

「和夫は、小学二年生になるとすっかりひねくれてしまった。原因は、大好きだった渡辺先生とのその一件だった。学校にも行かず、彼女にまったく背を向けてしまったかに見える和夫ではあるが、ひねくれるというのは、根本に彼女に対する甘えがあったのである」

僕は、土居氏の「甘え」に関する他の本も読んでみました。いたる所で、その洞察力の深さに驚嘆させられ、全てに関して肯かされました。例えば、土居氏の著書の中から僕が読書ノートに抜き書きしていたものをいくつか列記します。

- * 甘えという言葉には、甘美で何でも許せるような雰囲気が付いているが、英語で相当する言葉 dependence (依存) などにはそういう感じが無い。
- * 甘えとは、愛されたい大切にされたいという人間の欲求であり、他人の善意 (好意) をあてにして、それによりかかる (依存する) ことのできる特権 (あるいは個人の能力) である。
- * 「とりいる」は、「甘える」ことへの渴望が、他人に満足を与えて恩義を感じさせることによって、偽られている。
- * 「ひがむ」は、自分の甘えの当てが外れたことに起因する。
- * 「すねる」は、素直に甘えられないからそうなる。しかもすねながら甘えている。その結果、「ふてくされる」「やけくそになる」。
- * 「うらむ」は、甘えが拒絶されたことで相手に敵意を向けること。憎むよりも纏綿としている。
- * 「人を食った態度」「相手を呑んでかかる」「相手をなめてかかる」は、甘えの欠損をカバーするために現れる態度。人を呑んだり、食ったりしている者は、表面的には威勢がよさそうに見えるが、内心は孤立無援なのである。彼らは、「甘えの欠損」をカバーするためにこのような行動に出ると考えられる。

ここに挙げたものだけでなく、精神医学用語で使われているたくさんの難しい言葉も、甘えという簡単な言葉をちょっと応用させるだけで、十分説明できるものがたくさんあります。僕はこの「甘え」自体に対する彼の洞察は、優れたものであると認めます。しかし、ある日を堺に、彼の見解「日本は甘えの瀾漫した国。欧米は甘えを恐怖する国」というのは全く逆だったと気づくことになったのです。(つづく)

次回のテーマは「日本人は本当に甘えているの？」です。

編集後記

ちょっと難しい内容になってきました。こんなメルマガとは思わなかった、などとすぐに登録解除しないで下さいね (v_v)。甘えを考えることは、なぜ、愛が世界を平和にしてくれないのかを考えるために必要な通過点なのですから。

ところで、僕が書いた物語の主人公マーキー君が執筆しているメルマガ「自分探しの旅 with マーキー」で、彼は、前回なかなかうまい表現を使っていました。

- >僕が自分探しの旅でたどり着いた時に発見した不思議な木には、見たこともない果実がなっていました。
- >僕がこれから君をお導きできるのは、その場所までです。後は、君自身の手でもぎ取って味わってみて欲しいのです。
- >不思議な果実の味を。

悔しいけれど、僕の書きたいことをうまく書かれてしまいました。やっぱり僕の方が、クソ真面目で文章が下手なんだと思い知らされました。僕と彼とは、結局は同じ山の頂上に違うルートで登ろうとしているようなものなのです。だから、僕たちはきっと、最後には彼と同じ場所で落ち合うことになるでしょう。それが彼の見つけた不思議な木が立っている場所です。あなたが途中ではぐれずに、ちゃんとその場所に辿り着けることを願っています。

%%%

自分探しの旅 with マーキー

NO.4 宇宙の始まり

%%%

宇宙の始まり

夜空に輝く満天の星空を眺め、僕たちの遠い祖先は何を思ったんでしょう？ 神話として語り継がれる神々の姿を見たのかもしれませんが、僕たちの運命を自在に操る神の存在に畏怖と畏敬の念をこめて祈らずにはいられなかったかもしれません。だけど、現代の科学者たちは、

そういった見方とは全然違う見方をしたんだ。高倍率の望遠鏡の開発により、エドウィン・ハッブルという人が緻密な観測の結果、近い銀河より遠くの銀河ほど、早いスピードで我々の地球から遠ざかっていることを突き止めたのは、1929年のこと。それは、宇宙は膨張しているということを物語っています。

そうすると、この宇宙は以前はもっと小さかったということになります。はるか昔には、もっと密度が高く、気の遠くなるほどの高い温度の火の玉だったんじゃないだろうか、それが大爆発することによって宇宙は始まったに違いないと考えた人がいました。その仮説が原子物理学者ジョージ・ガモフの、有名な「ビッグバン理論」と言われるものです。彼は、もしこの仮説が本当なら、宇宙には火の玉の名残のエネルギー、宇宙背景輻射があるはずだと言いました。でも、その理論はあまりにも画期的で証拠もなかったので、なかなか受け入れられませんでした。ビッグバンという言葉も、そもそも反対派の学者から、からかひの意味で付けられた名前だったんだよ。

ところが、その仮説から16年後(1965年)、全くの偶然なんだけど、宇宙のあらゆる方向から24時間休むことなく送られ続けてくる謎の電波が、電波望遠鏡で捕らえられ、それが宇宙背景輻射に他ならないことがわかり、「ビッグバン理論」は証明されたのです。その後も、このビッグバン理論を証明する観測結果がたくさん報告されています。

科学は安易に仮説を信じ込むような愚かな真似をしない、という好例でした。そして、誰が見ても同じ納得がいく客観的な答えを導き出してきて、誰でもが同じ一つの見解にたどり着ける可能性を秘めている、という例でもありました。

ビッグバン以前の宇宙には、無からの宇宙創生論とか、無境界仮説とか、インフレーション理論とか、超ひも理論とか、膜宇宙論とかの仮説がありますが、これらはまだ仮説の段階なのでここでは話題にしません。でも、とてもスリリングで面白いですよ。興味があったらいろいろ本を読んで見たらいかがでしょうか。わかりやすく書かれた本がたくさん出ています。(つづく)

今回のテーマは、「そして あらゆる元素が作られた」です。

偏見とは

NO.2 のメルマガで、「言葉は偏見を記述したものに過ぎない」と、僕は言ったけど、偏見という言葉が辞書で引くと「かたよった見方。ゆがめられた考え方や知識にもとづき、客観的根拠がないのに、特定の個人・集団などに対して抱く非好意的な意見や判断、またそれにともなう感情」とあります。要するに、「不適切なものの見方を指す言葉」という意味合いもありますが、僕は不適切なものの見方という意味で使っているわけじゃないので、誤解ないようにしてくださいね。単なる「かたよった見方」という意味です。しかも、それは自然界の宿命であると捉えています。

どの偏見が適切なのかは、その偏見を主張する人が単に適切と思っただけだから、あんまり合理的ではありません。宿命と捉える理由は、人間はみんな偏りの中で生きていて考えるからです。というより、偏りがあるから生きていけると言い換えた方がいいかもしれません。「偏り」がない状態というのは、それはまるっきり「無」の状態のことです。「偏り」は生物の本質、生きることの本質でもあります。動物が右足をちょっと動かす動作だって、それは、自然界に常に生じているちょっとした偏りに反応したわけです。あるいは、自然界の偏りに反応した脳に、ある種の化学的偏りが生じ、それによって右足が動かされた、と言ってもいいと思います。

そもそも、この宇宙さえも「偏り」があって生まれてきたわけです。何らかの偏りがなければ、プラスとマイナスが打ち消しあっているゼロの状態のものが二つに分かれることはありえないからです。これは、宗教や哲学なんかじゃなく、現代科学が解明しているものです。(もっともこの現代科学も一つの偏見なんだけども)

そして、「言葉は偏見を記述したものに過ぎない」と僕が言う場合、生きているから生じる偏り(あるいは偏りから生じた生)を人間が認識して、それを言葉という記号に置き換えたものに過ぎないという意味です。下記の編集後記を読んでいただければもっとよくわかっていただけたと思います。

編集後記

今日の自分探しは宇宙の始まりのビッグバンにまで遡ったけれども、ビッグバンが宇宙の始まりなんかじゃないことは、みなさんだっ
て気づいているはず。そんなものでごまかされないぞ！ って感じですよ。僕たちが知りたいのは、始まりの始まりのその始まりは何なのか、ということです。でも、もしそれを説明できたら今度はその始まりの始まりは何？ ということになっちゃうので永久に疑問は解けないこととなります。もしかしたら、科学的自然解釈方法ではどうしても解けない問題なのかもしれません。科学的自然解釈方法の限界なのかもしれません。科学的自然解釈方法とは、自然そのものではなく、自然を言葉や数字に置き換えているに過ぎないわけです。すでにそこで誤差が生じているわけです。

ジェームス・マクスウェルという科学者がいました。1831年エジンバラで生まれた人で、電磁気の研究などで有名です。彼の残した言葉です。

「科学こそ学問の真実に到る王道である。どこかで間違っても自然がその誤りを指摘するからだ」

皆さんは、彼の科学に対するこの信奉をどう思いますか？ 正しい言葉です。学問の真実、と言っているところがミソです。つまり科学が真実を解き明かすとしても、それは学問的真実でしかないのです。

僕はいつも、自然を解釈する方法はたくさんあるけど、科学はたくさんある一つの方法論に過ぎないと言っています。どんなにたくさんの言葉や数字を並べても、それは決して自然そのものにはなり得ません。君を説明するのにたくさんの言葉や数字を用いても、それは君自身ではないのと同じことです。それに君を説明する方法だって、無数にあるということです。ところで、その科学が解き明かしてくれた真実をご紹介します。エヘン。

それは、「全ての現象には原因がある」ということです。たとえ、この先ビッグバン理論がくつがえされようと、宇宙の始まりがいつに解明されようと、それが科学的思考方法を元にしてしている限りは、この言葉だけは真理と言えるに違いありません。

科学が僕たちに与えてくれた最大の功績、それが「全ての現象には原因がある」という真実なんだ。これがどんなに凄い気づきであるか、後でわかってきますよ。

日本人は本当に甘えているの？

「持ちつ持たれつ」という言葉が典型的な日本人のイメージです。当の日本人は、その言葉に対してどんなイメージを持っているでしょうか？日本人だって、決していいイメージを持っていないし、誇りを持って使っているとも思えません。

土居氏は「甘え」という言葉は欧米人にとって悪いイメージを持っているようなことを書いていますが、考えてみれば、日本人も「甘え」という言葉をいい意味で使うことはあまりありません。母親が自分の子供のことを「この子は六歳にもなるのに、まだ甘えん坊なんですよ」と他人に言う場合、決して自慢しているわけではないはず。日本こそ、本当は甘えを容認しない社会だったのです。実は、「義理」「人情」などという言葉も、むしろ「甘え」を容認されない社会にできた言葉だと思います。例えば、「義理の柵」などという使われ方をしますが、これは、人を束縛する義理の柵に見立てたものです。義理などという言葉が存在する日本は、甘えが容認されている国とは言いがたいと思うのですが、いかがなものでしょう。それと、「困っている人を助けるのが人としての人情だ」という使われ方をしますが、これはむしろ「甘え」ようとしている人を見過ごす社会に歯止めをかけているのではないかという気がするのです。

「人情」という言葉には、「人」という字が入る分、安心して心を通わせられないような、ほんの少し距離を置いた感があります。その証拠に、親子や兄弟の間柄では、ただ「情」というだけで、「人情」などと大仰に言う必要もありません。

人情とは辞書によると「人がもともと持っている思いやり・情(なまけ)などの感情」とありますが、僕に言わせると、「人がもともと持っている血縁者に対する情を、他人にまで拡大しようとする無意識の善意から、もともと持っていると思われている感情」となります。実はありもしない感情を、社会生活を円滑ならしめるために、人がもともと持っているかのように使われ出ただけではないでしょうか？辞書における意味は、その表層的な事象だけをとらえた解釈だと思います。人情の薄い国民性、などどこかの国民性をたとえる場合もありますが、それこそが素のままの人間の姿であって、人情味がある人というのは、そのようなしつけを受けて育ったのではないかと考えるのです。

人情とは「甘え」に対して手を差し伸べる思いやりの心です。日本という国は、この言葉でもって、それを見過ごすようにする人に対して罰する意味合いを持たせたり、また手を差し伸べた人を褒める意味合いを持たせて、社会を円滑にするための不文律の規範を作らねばならない国だったんじゃないでしょうか。

日本が甘えに対して厳しい社会であったことは、僕たち日本人が一番よく知っています。「武士たるもの甘えるわけにはまいらぬ」とか、「男子たるもの甘えてなるものか」といった倫理観が日本にはありますが、自分に非常に厳しくする社会です。戦国時代には肉親であろうといつ殺されるかわからない社会だったし、政治や商売のため家と家の政略結婚(愛のない結婚)を強いられた社会、家においても厳しい縦の戒律があった社会、そういった歴史を経過してきた日本でした。日本人特有に見られる「遠慮」も、後天的なしつけに負うところが大きい意識です。つまり日本人が遠慮深い国民性であると言うより、遠慮しなければいけないような風潮の中で育てられているわけです。日本は自分の甘えに対して、自分自身で厳しく律するようにしつけられる社会だったわけです。

でも、他人に甘えないということは、逆に言えば他人を避けているとか、他人を信用していないということにもなり、それが過度になると社会全体がギスギスした関係になり過ぎるので、駆け引きとしてある程度他人に甘えることが社会を丸く納めるコツだよ、みたいなバランス感覚が生じてきたのでしょう。「まあ一つよろしくお願いします」と頭を下げて甘えてみて、甘えられた方はちょっといい気持ちになり、「よっしゃ、よっしゃ」などと言って、これによってお互いの関係が丸くなり、交渉もうまくいくといった感覚です。そのことだけを見て、土居氏は「日本の社会構造は甘えの心理を許容するようにできあがっている」と見たのでしょうか。まさに、日本人の甘えは、社会的に作り出された「甘え」ということができると思います。人間に本来備わっている甘えを、社会的に抑制し過ぎたせいで、人間関係にも摩擦が生まれてしまい、その摩擦を緩和するために生まれた甘えなのでしょう。

あからさまな論争は避け、あるいは覆い隠して、公私において社会的な調和を重んじるこのような日本人の態度は、フランクな対人関係を好む欧米人と違い、そのようにしなければ調和を保てないほどギスギスした(あるいは自分を厳しく律した)対人関係を結んでいる社会だったからです。

僕がそう考える理由は、欧米人が理解に苦しむ商売上の「持ちつ持たれつ」といったバランス感覚も、我々日本人が生来持ち合わせているものではなく、また決して潔い気持ちからでもなく、心のどこかで自分の「持ちつ持たれつ」の行為を恥ながらも、生きる知恵として用いていると感じているからです。その証拠に、日本人である我々だって、子供の頃は、大人たちの「持ちつ持たれつ」が理解できなかったのではないのでしょうか!?(つづく)

次回のテーマは「欧米人は本当に甘えないの？」です。

編集後記

愛についてのメルマガですが、なかなか愛という言葉が出てきません。もう少し甘えについて書かなければならないのです。愛という魔法の言葉で封印された、箱の中身を覗き込む必要があるからです。我慢してくださいね。(v_v)

そして あらゆる^{げんそ}元素が作られた

もう少し宇宙の話をしてください。ここでは証明された理論、ビッグバン理論以降のことを考えていきます。ビッグバンの最初、つまり今から百数十億年前には、NO.3 のメルマガでお話した素粒子、つまりクォークとか電子とか光子などしか存在しませんでした。その後、計算では1000分の1秒後ということだけど、このクォークが三つずつ結びついて、陽子や中性子ができました。

クォークには性質の異なる二種類のクォークがありますが、それをアップクォークとダウンクォークと呼んでいます。ちょっと細くなるけど、アップクォークはプラス3分の2の電荷を持ち、ダウンクォークはマイナス3分の1の電荷を持っています。アップクォーク2個とダウンクォーク1個で陽子ができ、アップクォーク1個とダウンクォーク2個がくっついて中性子ができます。それぞれ計算すると、陽子はプラス1の電荷、中性子は0になることがわかるでしょう!? 計算が得意な人はやってみてください。要するに、陽子とか中性子とか言ってるけど、その中身を詰め替えただけのものなんだ。

このようにしてできた陽子は水素の原子核そのものだし、陽子二つと中性子二つがくっつくとヘリウムの原子核ができます。

さて、宇宙の温度は空間の^{ぼうちよう}膨張とともに下がります。ある程度下がると、それまでプラスの電化を帯びていた原子核とマイナスの電荷を帯びていた電子が結びつき、電気的に中性の「原子」が作られます。それが、ビッグバンから30万年後と考えられています。つまり、宇宙最初の原子、水素やヘリウムの原子ができたのは、ビッグバンから30万年後ということなんだ。中性の「原子」ができることで、それまで原子核や電子に散乱されていた光の^{りゅうし}粒子は直進できるようになり、宇宙は「晴れ上がり」という状態を迎えることになります。これが、ビッグバンの終わりです。この時点で、宇宙は現在の1000分の1くらいの大きさにまで膨張しています。

ところで、この宇宙の膨張と並行してどんどんと温度も下がっていくわけですが、ここに疑問点が出てきます。原子核はプラスの電荷を持っているので、本来はそれぞれ反発し合うはずなんです。この反発力に逆らって原子核同士をぶつけるには、温度を高くして原子核に速い速度を与えなければなりません。ビッグバン直後の超高温・超高密度の状態があったから^{ゆうごう}融合が可能だったわけで、宇宙が膨張とともに温度が下がるにつれて原子核は融合しなくなるはずなんです。だから理論的にはヘリウムより重いものはできないことになります。

では、実際に存在するたくさんの元素は、一体どこでできたのでしょうか？ それは、超高温・超高密度がほぼ一定に保たれている天体の中なのでした。天体は、今まで見てきた水素やヘリウムの原子が、宇宙に存在するダークマターという謎の領域に引きつけられてきたのではないかと考えられているんだ。さて、太陽のように自分自身で輝いている星を恒星と言うんだけど、これは水素の原子核が融合してヘリウムの原子核を作る「核融合反応」によるものです。太陽よりも8倍以上重い^{こうせい}恒星は、この反応が進んで中心部に重い元素がたまってきます。例えば、三つのヘリウム原子核が融合して炭素原子核（陽子6個、中性子6個）を作る。次に、この炭素の原子核とヘリウムの原子核が融合して酸素の原子核（陽子8個、中性子8個）を作る。というようにして、ネオン、マグネシウム、ケイ素、硫黄、カルシウム、鉄などと、鉄よりも軽いほとんどの元素が次々と作られるわけです。そして、鉄はもう核融合をしないので、やがて重力と圧力のバランスが崩れ爆発が起きます。この爆発を超新星爆発と言います。僕たちの目には今まで見えなかった星が急に輝き出すので、新しい星という意味で新星などと呼ばれるけど、本当は星の最後のことなんだ。この爆発によって、今度は鉄よりも重い元素が生まれます。君も見たことのある元素の^{しゅうきりつひょう}周期律表に載っている様々な元素が、こうしてできあがったのです。

爆発した星の中心には^{ちゆうせいしせい}中性子星かブラックホールができると言われているけど、爆発で飛び散った元素は、次の星ができるまでガスや塵などの^{せいもん}星間物質として待機しています。そして、お互いに重力によって寄り集まったりしながら、銀河ができたり新たな天体が生まれたりして、現在の宇宙の構造ができあがりました。（ってかなり^{かつあい}割愛しましたが、これは別に宇宙論のメルマガではないので）(汗)

太陽と地球は、この超新星爆発の時に飛ばされていた元素が^{のうしゆく}濃縮されたガスによって、今から46億年前に作られたと考えられています。そのように考えると、我々の骨の中のカルシウムも、血液中の鉄も、身体の組織の炭素も、^{びりょう}微量なあらゆる元素も、全てどこかの超新星が爆発して飛んできたものだと言えるのです。

宇宙にある原子の総数はビッグバン以来一定だという学者がいます。それが本当なら、我々が死んだら、宇宙はその原子をリサイクルしてくれているのでしょ。

^{だそく}蛇足ですが、今から約50億年程で、太陽は燃料が尽きて^{せきしよくきせい}赤色巨星となり爆発を起こしてしまうそうです。いずれにしろ人間は後40億年以上は地球にいられないのは確実のようです。（つづく）

次回のテーマは、「ピリヤードってやったことありますか？」です。

編集後記

今日も難しい名前がたくさん出てきたけど、興味がなくなったらそんなもの覚えなくてかまわないよ。なぜなら、そんなもの人間が勝手に名前をつけて呼んでいるだけなんだもの。僕たちはもっと簡単に考えればいゝんだ。もっと効率的に自分探しをしていなくなっちゃ時間がいくらあったって足りやしない。要するに、難しい名前も、見方を変えれば、クォークや電子の数が違うだけ、つまり中身を詰め替えただけ なのです。ねっ、簡単でしょ！（笑）

でも、単純化することって、本当は自分探しにはとっても大切な要素なんだ。

欧米人は本当に甘えないの？

土居氏が、なぜ「甘え」という言葉が英語にはなく日本語だけに存在するかと考へて、その結論として、「日本社会は依存が容認され助長されさえもするが、欧米社会は自立を強調する精神風土の中で、甘えのような感情は注目されず、したがってそれに相当する言葉も生まれる必要がなかったから」と書いていますが、僕にはむしろ欧米社会の方が、ずっと甘えの心理を許容するようにできあがっているように見えます。

日常の挨拶でも、親子や知人と平気で抱き合ったりキスしたり、会話をしながら相手の身体に接触したり、あるいは恋人と人前でもキスしたり、「愛してるよ」とうるさいくらいにささやいたり、それを常に口にするを要求したり 日本人であるあなたは、そんな振舞いが自然にできますか？ 僕は、それを自然にできる欧米人が羨ましいです。日本は、前述したように社会を円滑にするために獲得した「甘え」ですが、欧米は理屈抜きの「甘え」です。だからこそ、英語にはそれに見合う言葉も不必要だったのではないのでしょうか？

今ここに欧米人の人がいたら、次のように話して聞かせたいと思います。「日本人は、小学校に上がったなら、母親や父親に体温があることをもう忘れてしまいます。挨拶で親と抱き合うどころか、もう親の手に触れることさえためらわれるのです。そして、次のようにも言いたいです。「結婚しても『愛してる』 などという言葉、口が裂けても言ってはならない言葉でした。もし、それが言えないために別れることになっても、日本人はそちらを選択したでしょう。確かに僕の父ならそうしていたでしょう。

欧米人には僕たち日本人のこんな悲しい性を理解できないでしょう。欧米人の挨拶はすばらしいものです。世界平和に必要なものです。僕は日本人だから自分を厳しく律して、心に固い壁を作っているのだから、互いの心が溶け合うような挨拶が生涯できません。日本人は相手の手に触れる「握手」という挨拶でさえためらわれます。それは、僕たち日本人には「こだわり」という感情があるからです。

「こだわり」とは、土居氏に言わせると、「気難しく、近寄りたく、付き合いにくい態度をすることで、(心の中では甘えたくても)相互に甘える必要があることを否認しようとする感情」です。こんなにもひねくれた精神構造の社会で、我々日本人は健気に暮らしていたのです。(泣)

日本は甘えが瀰漫した社会だとか、欧米は甘えという言葉すら存在しないくらい甘えない社会だとか、そんなの大嘘です。土居さん、それはまったく逆だったのです！ 欧米人には甘えという言葉など不必要なくらい、甘え合うのは当たり前前の喜びだったのです。

英語では「ご自由にお召し上がりください」を "Please help yourself." と言い、それを日本語に直訳すると「ご自分で助けなさい」となり、それじゃあんまり思いやりのないじゃないか、人情が薄い国民だ、と感じるのは、我々日本人が「甘え」に飢えた人種だからです。甘えに対して過敏過ぎるわけです。貧しい国の人ほど「お金、お金」と言うのと同じです。

もう一度土居氏の言葉に着目してみます。「欧米社会は自立を強調する精神風土の中で、甘えのような感情は注目されず、したがってそれに相当する言葉も生まれる必要がなかった」として、この「自立」という言葉 実は、これこそ本当の意味の「甘え」ではないのでしょうか？

竹が何にも遮られずにくすぐりと伸びるように、ありのままの自分が欲する方向にまっすぐ向かおうとすることを、自分に対する「甘え」(が容認されている状態)と解釈すると、実は欧米人の「自立」とは、それこそ、ありのままの「甘え」であったことがわかります。

日本とアメリカの大学生の比較文化的研究を行なったパーランド氏は、「自分をどのように感じているか」という質問を彼ら自身に投げかけて、両者の間に次のような気持ちの持ち方の違いがあることを発見しました。ちょっと古い資料ですが、現在でもそれほど違っていないと思うので、ご紹介します。

- ・日本の学生 遠慮がち、堅苦しい、無口、慎重、回避的、生真面目、よそよそしい、依存的(甘えというより他人まかせ)
- ・アメリカの学生 自信家、率直、くだけている、自発的、話し好き、自己をよく表現する

このことから、アメリカの方が甘えが許容されている社会だと言えないのでしょうか。自分に自信を持ち、率直によく表現し、自立できるためには、社会にそのようなものを受け入れるムードがなければなりません。日本は、自信家や、自己主張をする人や、出しゃばりや、馴れ馴れしい人を罰する雰囲気があります。パーランド氏が書いています。「(日本では)ことば以外の方法による直感的なコミュニケーションが賞賛され、尊ばれる。ものをはっきり言う人、特におしゃべりな人は、愚かだと見られ、危険とすら見られる。雄弁であるがために、権威や影響力のある地位につけないことすらある。」つまり、竹がくすぐりと伸びようとする上から抑えつけられるような社会だったわけです。日本人の平均身長が低かったのがそれを証明しています ？？ (つづく)

今回のテーマは「甘えの結論」です。

編集後記

愛についての連載なのに、甘えのことばかり書いてきました。次回で「甘え」の話も終わり、その後はイヤになる程「愛」という言葉が出てきます。もう「愛」はいらない、なんてことにならなければいいのですが。と、今から心配してしまいます。

でも、世界を平和にしてくれない愛なんて、ない方がいいのでは？

ビリヤードってやったことありますか？

「ハスラー」って映画がありました。若かりし頃のポール・ニューマンさんが主演した、1961年に製作されたビリヤードの映画です。以前、僕の産みの親、真亜基さんがぼやいていました。ミーハーな彼は、『ハスラー』っていう映画の紹介に「煙草の煙の向こうから立ち現れるポール・ニューマンが、めちやくちゃカッコイイ」って何かに書いてあったのを読んで、これはもう観るっきゃないって思ったらしいんだ。『スティング』（1973年）で渋さを見せたポール・ニューマンさんに憧れていた彼は、イメージを膨らませつつ『ハスラー』を観てみたらいいんだけど、その部分があまりにも短かすぎてがっかりしたんだって。どこの部分？って感じだったそうだ。彼は、人喰いザメのジョーズが独特のテーマ曲に乗って現れるようなスリルを期待しすぎてたんじゃないかなあ？

「あれだったら、『第三の男』の中で、ビルに隠れているオーソン・ウェルズの顔に車のライトがあたるときの表情の方がずっと印象的だ」なんて力説してたけど、僕は残念ながらどっちも観たことがない。

それに、僕はビリヤードって一度もやったことがないんだけど、プロの妙技なら何度かテレビで見たことがあるよ。あれはきっと、玉を突く時の方向と力と、それによってもたらされる玉の回転にその後の全ての運命が決められる競技なんですね。ビリヤードは日本語で撞球とも書くので、本当は「球を撞く」と書くのが正しいのかもしれない。でも、難しい字なので、ここでは「玉を突く」と表示しますね。

なぜ今回はビリヤードの話かという、現在順調に膨張している宇宙が始まった瞬間をビリヤードの玉が突かれた瞬間だと想像してみたいからです。僕たちの住むこのビッグバン宇宙は、始めに玉が突かれた強さや回転数や方向性によって、ビッグバン宇宙としてのその後の性格の全てが決定づけられた、ということが言いたいのです。そして、そのたった一つの力が、今でも衰えることなく宇宙の膨張として続いているし、天体を作ったり消滅させたり、また生物を作ったり、僕たちを悩ませたり（つまり理性の脳が生まれたという意味です）とあちらこちらで悪さ？をする元になっていたわけです。

「現存する生物の全ては、過去のたった一時期にいくつかのRNAが作り出され、それが変化してきたものに過ぎないのではないだろうか」という仮説があります。RNAとは、DNAの遺伝情報（つまりタンパク質の設計図）に基づいて、タンパク質を組み立てる働きをしているものです。真偽はどうであれ、そのRNAも、超新星の爆発などによって飛ばされてきた元素を素材にしているに過ぎないわけです。もっと言えば、その素材を生んだのは、最初に突かれた時の玉の強さや回転数や方向性だったのです。

どこまでも過去へとたどっていけば、僕たちのビッグバン宇宙を支配している全ての法則、そして、それによってもたらされる全ての現象は、まさにその瞬間に決定づけられたのです。ある人々は、玉を突いたその人を神と呼んだのかもしれないね。

さて、過去から現代に渡る探究心旺盛な研究者たちによって、現在に到っては数々の自然界の法則を解明し、それを応用した様々なモノが作られています。君の目の前の驚くべきこのパソコン！でも、これは誰かが新しく一から作り出したものではなく、自然界の法則やそれに伴って起こる現象を利用しているだけのものです。そして、もっと言えば、誰かが作り出したものではなく、自然界の法則やそれに伴って起こる現象によって誰かが作らされただけなのです。この意味がわかりますか？今はまだ納得がいかななくてもいいでしょう。

今日までの難しい、あるいは君の興味を引かない話題も全て忘れてしまってもかまいませんよ。ただ一つ、これだけは覚えておいてください。「全ての現象には原因がある」。この定理こそ、科学が僕たちにもたらしてくれた、最大の功績です。

「全ての現象には原因がある」。当たり前のようなこの言葉ですが、これがどんなにすごい気づきだったか想像がつかますか？例えばビリヤードの台の上に、今、A～Eの五つの玉が置かれているとします。初めにも言ったけど、僕はビリヤードのことは全く知らないでルールは無視してくださいね。ある人がAの玉を突いて、それがBの玉に当たり、それがCの玉に当たり、それがDの玉に当たり、それがEの玉に当たってEの玉がポケットに落ちるとします。では、Eの玉がポケットに落ちた原因をさかのぼると、Dの玉が当たったからで、そのDの玉がEの玉に当たったのはCの玉が当たったからでと必ず原因があるはず。その原因をさかのぼると、ある人がAの玉を突いたから、ということが言えます。つまり、ある人がAの玉を突いたときの力と回転数と方向性が、Eの玉をポケットに落としたのです。

これは、現在このビッグバン宇宙で起こっている全ての原因をさかのぼっていくと、一つの原因に到ることを意味しています。例えば、君が僕の記述した文章を今読んでいるのは、僕がメールマガジンを配信したからで、僕がメールマガジンを配信したのはだからで、その原因はだからで、その原因はだからで、とさかのぼっていくと、ある一時点では、1856年の2月9日早朝に、ニュージャージー州のトーマスが眼目をこすりながら小屋の壁を修繕しようとして、誤って自分の指を金槌で打ちつけたからでなどという原因も通過するかもしれません。そして、ずーっと、ずーっとさかのぼっていけば、ついには、現在このビッグバン宇宙で起こっている全ての現象の根源（この宇宙ができる瞬間の力と回転数と方向性）に到着するはず。これは、現在このビッグバン宇宙で起こっている全ての原因をさかのぼっていくと、一つの原因に到ることを意味しています。

と言うことは、いいですか？つまり、この宇宙ができる瞬間の力と回転数と方向性が、君に僕の文章を読ませていたのです。

そんな話、信じられない！と君は言いますか？それではご自分でいろいろな物事の原因をさかのぼってみてください。どこかで途切れますか？（つづく）

今回のテーマは「僕たちの前にルールはない！」です。

「全ての現象には原因がある」ということから導かれる真実。これは、当の僕だつてにわかには信じられないものでした。だって、トーマスさんが指を怪我しなかつたら僕も存在していなかったなんて！ なんだか頭が混乱しちゃうね。それじゃあ、今までのことを全部整理してみよう。

宇宙は偏りによって始まり、その偏りがあらゆる現象を生み出している。そして、その偏りを人間が知覚したものが偏見（偏ったものの見方）であり、それを記述したものが言葉である。ここまではいいね。

偏りをどのように知覚するかは動物によっても違うし、人間だつて一人一人みんな違う。人はそれぞれの偏見で生きているんだ。だけど、その偏見を説明しようとする、何かの基準を作らなければ無理だね。その基準、というか約束事が言葉なんだ。言葉が生まれて、人間はいろいろな偏見を説明してきた。その説明に対しては正しい間違いもないんだ。例えば、僕が尊敬する誇り高き狩人時代のイヌイト（エスキモー）には、厳しい自然の中を生き延びるためのたくさんの知恵があった。彼らは彼らなりに自然を解釈し、そしてそれは彼らが生きる上では正しい信念だった。だけど、彼らの偏見ではパソコンやロケットは作れない。科学という頭でかちの偏見には、いきなり厳しい自然の中に放り出されても生き延びるだけの知恵はないかもしれないけど、少なくともパソコンやロケットを作れる。要するに、科学は、自然界の法則を利用して何かを作るためには適した偏見だったということなんだ。

それと、科学は物騒な兵器をたくさん作りはしたけれど、実は、平和に貢献する「ものの考え方」を示してくれてもいたわけなんだ。僕たちのこの旅は、それを知る旅でもあるんだよ。

～世界を平和にしない愛～

NO.6 甘えの結論

甘えの結論

土居氏は、甘えという言葉は欧米社会には存在していなくて、もしそれを無理やり英語に訳すと、wheedle（ねだる）とか、dependence（依存）などとなる、と言っています。しかし、甘えを dependence（依存）と訳すから、アメリカ人の恐怖する状態になってしまうわけで、依存とは他人に頼ることだから、他人に頼らず自分でやりたい人には、依存はむしろ甘え（自立）ができなくなった状態だったのです。

フランク・A・ジョンソンは、「欧米では依存が満たされるのはもっぱら幼い子供時代のことであって、その後は隠され抑圧されるようになる」と言っています。「幼児がスプーンで食事を食べさせて貰うような行為」を依存と呼ぶのかもしれませんが、ある程度年齢が進むと、子供というのは自分でやりたがるのではないのでしょうか？ だから、別に依存が抑圧されているわけではなく、本人が自分でやりたいこともあるのです。この場合は、自分の好きなようにさせて貰おうとする欲望を妨げられずに遂行できるという観点から見て、甘えが気持ちよく満たされている状態です。そして、自立できる社会というのは、むしろ甘えを許容している社会だったのです。

だから、自分の甘えが許容されなかった場合、日本人は引き下がってしまうのに対して、アメリカ人は激しく抗議するのです。抗議することが可能な社会だからです。欧米こそ、個人の甘えに対して寛容な社会だったということではないでしょうか。

このように見えてくると、土居氏が「日本は甘えに寛容な社会」と使う場合の「甘え」とは、処世術としての甘えであつたことがよくわかってきます。自分を厳しく律することを強制される厳しい社会環境の中で、そのせいで人間関係もギクシャクしてしまう弊害を緩和させるための処世術を、日本人は無意識で身につけていたということだったのです。それを土居氏は、日本にあつて欧米には存在しない「甘え」として捉えていたのです。

しかし、これまで見てきたように「甘え」にはもう一つの意味、つまり欧米には存在しない言葉であるけれども、むしろ欧米の方が持っている「甘え」がありました。その甘えこそ、この連載のNO.2に記述した「甘えとは、本能の求める欲求を押し通そうとすること、あるいは本能が最も居心地がよく感じる状態を維持しようとすることである」という定義につながっていくわけです。

さて、ここまで読んでいただいて日本人であるあなたはどんな感想を持たれましたか？ どちらの社会がいいか、一概には言えません。日本のように、人目を気にして他人との関わりの中で自己の行動を決定していく社会には、大きな犯罪は起こりにくいかもしれませんが、精神的に健全だとも思えません。アメリカのように精神的に健全にすくすくと育てようとする社会は、対人関係の摩擦を生み、また、ナルシズムの問題も持ち上がってきたり、そこから特殊な犯罪が起こったりします。

でも、そんな論議を待たずに、今や日本は確実に欧米的な甘えに向かって進んでいます。子供の中で、「注目される人間になって、お金を儲けて、お城のような家に住みたい」とか、「私のチャームポイントは目です」などとはっきり自己主張する人も増えていきます。僕が子供の頃は、ちょっとでも目立った行動をしようすると、無意識に身体がカチンカチンに凍りついてしまったものです。「君のチャームポイントを挙げてください」などと聞かれたら、「一つありません」と答えることで、深い自己満足を感じていたでしょう。今の子供たちは、そんな時代があつたことをきくと不思議がるでしょうね。（つづく）

次回のテーマは「愛の分類」です。いよいよ愛について始まります。様々な愛の形に、僕の定義する「愛とは、甘えたい欲求と甘えを許すことができる心が出会った時に起こる感情である」が成立するかどうか検証していきたいと思います。それによって、愛の本質がよく見えてきます。

編集後記

ところで、僕がこの連載を始めたのは、社会を傍観してただ嘆くためでも批判するためでもなく、学者のように文化的差異を研究してそ

れで満足するためでもありません。そんなことをしている暇は僕たちにはありません！ 僕たちは、この混沌こんとんの時代で迷子になりそうな自分の心を救い出さなければならないのです。そのためにするのが本当の勉強であり、本当の科学の研究であり、本当の哲学であり、本当の宗教ではないでしょうか？ 押し付けられてする勉強、科学者のための科学、知識としての哲学、金持ちと盲目を作るだけの宗教 そんなもの、僕たちにはもう必要ありません！

僕は、『アラスカの風に乗せて』という自分探しの物語を書き始めました。そして、ついにその中の主人公は、真っ暗な海で溺れおぼれそうになっている僕を救い出して、安定した船へと導いてくれました。その船は、今、うっすらと見え始めた希望の灯りに向かって進んでいます。この、愛についての連載で、あなたをその船にお導きできるかどうかはまだわかりませんが、少なくともそれを目指しています。

%%%

自分探しの旅 with マーキー

NO.7 僕たちの前にレールはない！

%%%

僕たちの前にレールはない！

前回、君が僕の文章を読んでいるということを遡さかのぼっていくと、「1856年の2月9日早朝に、ニュージャージー州のトーマスが眠い目をこすりながら小屋の壁を修繕しようとして、誤って自分の指を金槌で打ちつけたから、という原因も通過するかもしれない」と書きました。このことは、ある驚くべき事実を教えてください。もし、トーマスが誤って自分の指を金槌で打ちつけることがなかったら、君は僕の文章を読むこともなかったということになるのです。これは、何を言いたいかということ、この世の中で起こっていることは、ビリヤードの玉の行方のように、全てが自然界の法則に則って、結果的に見れば（この「結果的に見れば」という言葉、とても重要です）それ以外のことは起こり得ないほどの確率で、起こっていたし、全てがつながっていたということです。例えば、はるか過去に遠い異国で起こっていた戦争と、今の君とは決して無関係ではないということも言えるわけです。

いいですか？ とても重要なことなのでよく聞いてください。僕は決して運命論者（この世の現象は、あらかじめ運命によって決められていると信じている人間）ではありません。だけど、これまで見てきたように、結果的に見れば、この世は宇宙で最初に玉が突かれた時の、その瞬間の力と回転数と方向性によって決められていたということができのです。それによって、その後のあらゆる現象が、それ以外には起こりえないという決定的な確率で起こっているわけですから。

もちろん、この世で起こる現象は、すべて偶然がもたらす結果だと考えることもできるけど、結果から見るとすべて必然であったということです。「全ての現象には原因がある」ということは、言い方を換えれば、それが起こり得るべくして起こっているとと言えるわけですから。

素粒子の世界で使われる言葉ですが「トンネル効果」って聞いたことありますか？ 例えば、コップの中に小さなボールを一つ置いたとしても、コップを動かさない限りはボールはそのままで、電子という素粒子を一つ置いておくと、翌日見たらコップの外に飛び出しているかもしれないというのです。これをトンネル効果と言います。このことを利用して江崎玲於奈博士さんは、エサキダイオードを発明しました。

素粒子は、人間には予測ができない非常識な振る舞いをすると考えられています。素粒子の位置というのは、この場所にいる確率は20%、あの場所にいる確率は40%というような確率でしか言えないと考えられています。普通、物事には原因があって結果があるわけですが、素粒子の世界はそういう因果関係に支配されてはならず、あくまで確率的だと多くの学者さんは主張します。

アインシュタインさんという人は、後の量子力学のち りょうりきがくの考え方の基礎ともいえる、光量子こうりょうしなどという重要な考えを打ち出した人ですが、この確率的な考え方には納得できず、実は我々がまだ知らない隠れたパラメーター（変数）があるに違いないと考えました。そして、確率的に考える量子論を批判して「神は決してサイコロ遊びはなさらない！」と言いました。

皆さんはどのようにお考えになりますか？

量子論では、素粒子の位置や動きは無数の可能性が考えられると説明します。と言うことは、勘違いしないでほしいんだけど、無数のことが起こったことではないのです。起こったこと（結果）は、あくまでもその中の一つです。可能性はあくまでも可能性です。それは人間の想像力の範疇はんちゆうなのです。自然の法則によって支配されている方向性によってもたらされる結果は、あくまでたった一つです。人間の能力では、その方向性を正確に予測できないというだけのことだったのです。

このように考えていくと、未来はすでに何者かによって決められてもいた、と考えたくなくなってしまいますよね。でも、それは間違えています！ 僕たちは決められたレールの上を走らされているに過ぎないとは、決して考えないでください。レールは僕たちの前には存在しません。未来を想像することも架空のレールを敷くこともできるけど、神様であっても、僕たち人間であっても未来を決定することはできないのです。僕たちの前にはレールは存在しない、という意味をもう少し説明させてください。

前回、宇宙の始まりをビリヤードで説明しました。その時は、たった5つの玉だけしか登場しませんでした。その何億倍の何億倍のそのまた何億倍もの玉が、ひろーいビリヤードのテーブル上にばら撒まかれていると考えてみてください。それが僕たちのビッグバン宇宙だと想像してみてください。さて、誰かが初めの一つの玉をある力で、ある回転数で、ある方向性で、突いたとします。それが、テーブル上にばら撒かれている全ての玉の動きの今後を決定します。ここまでは、問題はないですよ。初めに突いた瞬間の作用が、全てを決定的に支配しています。

でも、でもですよ。我々の宇宙はこんなビリヤードの玉で説明できるほど単純ではないのです。なぜなら、Aという玉がBという玉にぶつかると、AとBという玉は、Mという玉になってしまったり、その性質までも変えてしまったりもするので(注意：ただし、自然界の法則自体を変えてしまうわけではありません。自然界の法則の中に、AがBにぶつかるとMに性質を変えてしまうという、仕組みが備わっていたということです)しかも、Aという玉が始動したとたん、その後、Aに他の玉が跳ね返ってくる可能性は無限に存在してしまうこととなります。これでは、ものすごく頭のいいコンピューターにも、その後の全ての玉の動きをシミュレーションしてもらうことは無理と言わざるを得ません。

つまり、我々の前にはルールは存在しません。なぜなら、もし、ルールがあったとしても、そのルールを作り替えながら宇宙は進行しているからです。ただし繰り返しますが、このビッグバン宇宙を支配している大元の法則は変わりませんよ。そして、その大元の法則とは、初めの玉の一突きの一瞬間の力と回転数と方向性によって、決定づけられたものです。このビッグバン宇宙の終末の時まで、ずっと支配していく大元の法則です。

それによって、今、君はここにいて、そして僕の文章を読んでくれているのです。(つづく)

今回のテーマは、「レゴで風車を作ると」です。

編集後記

もしも、この世に神様がいて、その神様が運命という名のサイコロを振ったとします。サイコロの出目は、全く同じ条件で振ったとしたら、全く同じ目が出ます。同じ条件なら、必ず同じ目が出るというほどの確率で同じ目が出るという意味です。もちろん、全く同じ条件で振るなどということは神様にもできないけど(笑)。それはむしろロボットの得意分野です。得意でも不可能です。

たとえ運命をサイコロで支配する遊び好きの神様がいたとしても、その神様にもサイコロの出目は予測することはできない。ここが重要です。神様や人間の能力では予測できないことを、僕たちは偶然の出来事と呼んでいます。だから、結果から見た時だけ必然としが言いようがないわけです。そして、運命はあらかじめ決められていると考えることは馬鹿げているということです。

~世界を平和にしない愛~

NO.7 愛の分類

愛の分類

愛を分類して、自分との距離が近いものから順番に並べると次のようになりました。

- 1、自分に対する愛
- 2、家族に対する愛
- 3、恋人に対する愛
- 4、物に対する愛
- 5、自分が所属する社会に対する愛(愛社精神や愛国心といったもの)
- 6、人類に対する愛
- 7、神に対する愛

これらは、同じ愛という言葉で表してはいますが、それぞれが微妙に異なっています。また、この順番は僕の主観的なものです。人によっては、僕にとって一番遠くにある神に対する愛が一番近くであったり、恋人に対する愛の方が家族に対する愛よりも身近に感じていたりするかもしれません。もちろん、同じ人であっても、その時の環境や価値観によって順位は変動するものでしょう。だからそれほど固定的に考えないで下さい。

これらの愛のすべてに、僕の定義した「愛とは、甘えたい欲求と甘えを許すことができる心が出会った時に起こる感情である」が成立するかどうか検証していきたいと思います。

その前に、前回で結論づけた次の言葉を復唱してしっかり覚えてください。「甘えとは、本能の求める欲求を押し通そうとすること、あるいは本能が最も居心地がよく感じる状態を維持しようとすること」。本能のイメージもできましたか？ そのうち、この連載で本能の体系化もするつもりです。では、始めてみます。

まず、一番遠くにある「7、神に対する愛」と「6、人類に対する愛」と「5、自分が所属する社会に対する愛」は、本能と切っても切れない関係にある「甘え」から出発した愛というよりも、むしろ理性的な(人間的な)愛、という感じがします。

だけど、よく考えると出発点は甘えであることがわかります。

- 7、神に対する愛 現世において甘えを許されない(満たされない)自分を、神を愛するという行為の見返りとして、慰めてもらおうとする感情。でも、本当は神様は自分の頭の中にいるので、言い換えると自分で自分を慰めているということです。
- 6、自分が所属する社会への愛 会社や地域社会や国に対する愛のこと。これは、自己を犠牲にして社会に尽くす行動をとる元になる愛だが、その裏には自分の甘えを受け入れてもらおうとする感情を隠し持っている。例えば、自分の存在を認められたいというもの、本能が最も居心地がよく感じる状態を維持しようとすることであるから、一種の甘え。その証拠に自分の存在が否定されたら一転して会

社や国を逆恨みする。

- 5、人類に対する愛 全人類の甘えを許してあげようような包み込むような感情。だが、そんな自分に至福を感じているのは、それは自分の甘え(全人類を自分の保護下に置いたような気分、父性本能のような感じかな)が叶っている状態、つまり甘えが許されている状態だから。

残りの四つの愛、について見ていきます。

- 1、自分に対する愛
- 2、家族に対する愛
- 3、恋人に対する愛
- 4、物に対する愛

話の都合上、4 2 1 3の順番で見えていきます。

- 4、物に対する愛 これほど端的に「愛とは、甘えたい欲求と甘えを許すことができる心が出会った時に起こる感情である」を表しているものはないと思われます。例えばウィンドウ・ショッピングをしていて、可愛らしい人形を見つけたり綺麗な花を見つけたりします。そして、あなたはそれが欲しくてたまらなくなるとします。その時、あなたの本能はうずいているのです。それらを獲得してその胸に抱きしめる時、あるいは花瓶に生けて眺める時、あなたの中の別の本能がうづいて幸福を感じます。あなたにとって大切な物は、なぜ大切かと言うと、あなたの本能を満たし、そして癒してくれるからです。

ペットに対する愛もこれに含まれます。人間は裏切るけどペットは裏切らない、とはよく言われる言葉です。ペットはあなたの望むように、あなたの本能を癒してくれます。後で書きますが、幼児虐待は自分の子供をペット化しているから起こる事態です。

- 2、家族に対する愛 ここでは家族の成員一人一人ではなく、家族という一つの単位で考えてみます。僕たちは愛する自分の家族を他からの危害から守ろうとします。それは、実は、家族が自分の甘えを許してくれ、場合によっては叶えてくれる最も信用できる砦だからです。その証拠に、もし、自分の甘えが許されなくなれば、親兄弟であろうとも憎み合うことになり、それは、信用が大きかった分、他人以上に憎み合うことになるかもしれません。

- 1、自分に対する愛 自分の「甘え」を自分で許してあげることができる感情。これはちょっと難しいです。自分の「甘え」を自分が許すというのは、自分の願望がちゃんと叶った時のことでしかありません。というのは、人間は自分に対してはシビアなので、ちょっとのことでは自分を許さないからです。

例えばちょっと質問をしてみます。あなたは自分を愛していますか？ もっと顔がよければ愛せるのに。もっとスマートだったら愛せるのに。もっと他人と気楽に話せば。嫉妬深い自分がすごく嫌だ。他人に嫌われてしまう性格が治ればいいのに。みんなに好かれる人気者だけど、本当は淋しがり屋だから辛い。自分を愛していないと答えたあなた！それは、これらの甘え(願望)を許してくれない(叶えてくれない)その不甲斐ない自分を許せないのです。だから、自分を愛することができないのです。その証拠に、これらの願望が叶ったら、あなたは「自分を愛している」と答えるはず。いや、その時はその時で、もっと上の願望がわき上がっちゃうかもしれませんね。(笑)

でも、人間は誰でも本質的には結構しぶとく自分を愛する能力を持っています。だから生きていられるわけです。

- 3、恋人に対する愛 恋人を愛していると答えるあなた、あなたは今、その人の悪い甘えもひっくるめて許せているのです。と言うか、他人には悪い甘えでも、あなたにとってはむしろ可愛く思える甘えかもしれません。もし、甘えが鼻につくようになったら別れる時かも。あなたが、恋人の甘えを許してあげられるのは、それは、自分の甘えをその人が許してくれているからでもあります。あなたが恋人に対して持っている甘えはたくさんあるでしょうけど、今まで見てきたものに対する甘えと一つだけ決定的に違うものがあります。甘えとは、「本能の求める欲求を押し通そうとすること、あるいは本能が最も居心地がよく感じる状態を維持しようとする」と書きましたが、その中の最も動物的部分、つまり性欲を満たしてくれる点です。

さて、見てきたように、愛は自己を滅して他人に尽くすことではなく、非常に利己的なものでした。非常に本能(自己中心的に働く力)に根差した感情だったのです。愛を与えるからには、必ず何かの見返りを期待しています。ただ、ほとんどがそのことには気づいていない状態で行なわれる交換です。

例えば、あなたが愛する人にささやかなプレゼントをするその時、あなたは同時に、愛する人の喜びをプレゼントされていることでしょう。あなたは、無意識で愛する人の喜びを期待していたのです。その証拠に、愛する人がそのプレゼントを拒否した場合、理由いかんによっては「世界一愛する人」が「世界一憎らしい人」に急変してしまいます。

例えば、母が子供に愛情を注ぐその時、母は子供から愛らしさや希望を与えられているでしょう。母親は無意識で子供に愛らしさや希望を期待していたのです。それが裏切られた時に、幼児虐待に走ってしまうのがその証拠です。

自分の中で愛のバランス(与えることと与えられることのバランス)がとれている状態の時には、喜びは何十倍にも膨らむけれど、そのバランスが少しでも崩れると、苦悩や憎しみや淋しさが何十倍にも深まるのが愛の特徴です。

このように、見返りを期待して与えているというふうには、まったく思考が働かない状態で、実に巧妙に無自覚にギブ・アンド・テイクを行なっているものが愛だったのです。

もしこんな言い方を許していただけるなら、この世で最も尊い愛 それは、自己を滅却した愛、要するに見返りを期待しない愛であるということもできます。これは最も人間的な、人間の理性だけが可能にする愛です。でも、実はそれは人間には不可能な愛です。何故なら、自己を滅却するとは死ぬこと以外にありません。人間は死んだらどこにも存在することはできません。存在せずに何かを愛することはできません。もし、あなたが、あなたの愛した人が死んでも、尚どこかに存在して自分を愛してくれていると感じるのは、それは、あなた

の想像力によって、あるように勘違いしている愛です。本当は ^{はりつけ} 磔で死んだ(実在人物としての)キリスト本人は、どこにも存在していません。あなたの心に存在しているとおっしゃるなら、それはあなた自身が創り上げたキリスト様を見ているのです。

わかっていただけますか？ 言い換えると、人間の想像力だけが最も尊い愛を想像することができるということでしょうか？ (つづく)

次回のテーマは「美しいイメージを持たされた愛」です。

編集後記

2001年9月11日の事件、もう、あなたの記憶から薄れてしまっていないですか？ テレビでツインタワーが爆破された映像を見た日から数日間、僕は今までの人生で最も寡黙な時を過ごしました。その話題を口にすることもできないどころか、何もする気になれない暗ーいど

ん底の精神状態で生きていました。愛を掲げて信念を持って行動をするからこそ、あんな事件は起こり、そして、もう一つの愛が新たな戦争を引き起こします。今、世界を本当に平和にするためにも、いろいろな問題を解決するためにも、僕たちは真剣に愛を考えなければならないと思います。愛を見つめる勇気を持たなくてはならないと思います。

%%%

自分探しの旅 with マーキー

NO.8 レゴで風車を作ると

%%%

レゴで風車を作ると

DNA が生物の遺伝情報、つまりタンパク質を作るための設計図であることは、今ではほとんどの人が知っています。DNA が何からできているかと言うと、塩基、糖、リン酸と呼ばれる三種類の化学物質です。この中の塩基というのが、遺伝情報の暗号を作っているものです。アデニン (A)、グアニン (G)、シトシン (C)、チミン (T) のたった四つです。

この塩基が三つ組み合わさって一つのアミノ酸を作る暗号になっています。例えばGAAと並べばグルタミン酸を作るように命令をしています。このアミノ酸がたんぱく質となつたものを、英語では protein、日本語ではタンパク質と呼んでいます。タンパク質というのは、生体内の化学反応の触媒となる各種の酵素や、生物体を構成するもの(コラーゲンなど)や、運動をつかさどるもの(アクチン・ミオシンなど)や、各種のホルモンや抗体などを作っているもので、あらゆる生命現象を演出している材料のようなものです。

DNA はあくまでも設計図で、また遺伝には不必要な部分もあるので、それを元にしてタンパク質が作られるためには、その設計図の必要な部分だけをコピーする RNA というものが必要になります。それが鋳型となってアミノ酸が集められ組み立てられます。

三つの塩基が意味する暗号は、実験の結果、全ての生物に共通語であると考えられています。つまり、GAAと並んだ暗号は、どの生物にとってもグルタミン酸を作るように命令をしているということです。これは驚くべきことで、地球上に現存する全ての生物は、それをさかのぼっていきくと、共通の祖先の鋳型を元にしていて考えられるわけです。違う暗号を使った生命体が誕生する可能性だって、十分考えられたわけなのに今までのところは、出現していないということです。もちろん、これから先のことは神様にもわからない でしたね。

ところで、この四つの塩基は一体、何からできているかと言うと、

- ・アデニン (A) は、4個の水素と、5個の炭素と、5個の窒素。
- ・グアニン (G) は、5個の水素と、5個の炭素と、5個の窒素、それと1個の酸素。
- ・シトシン (C) は、5個の水素と、4個の炭素と、3個の窒素、それと1個の酸素。
- ・チミン (T) は、6個の水素と、5個の炭素と、2個の窒素、それと2個の酸素。

で作られているのです。もっと細かくしてみますよ。

- ・水素は陽子1個、中性子0個だから、アップクォーク2個とダウンクォーク1個。
- ・炭素は陽子6個と中性子6個だから、アップクォーク18個とダウンクォーク18個。

ただし、中性子の数はそれほど厳密には規制されていません。それと、電子は普通、陽子の数と同じです。ということは、

- ・アデニン (A) は、通常、アップクォーク203個、ダウンクォーク199個、それと69個の電子という素粒子の組み合わせで、
 - ・グアニン (G) は、通常、アップクォーク229個、ダウンクォーク224個、それと78個の電子という素粒子の組み合わせでできている
- と言い換えることができます。

ほらねっ！ 前々回のメルマガで言ったように、中身が違うだけだったでしょう!? もちろん、中身の組み合わせ方はどうでもいいわけではないですけどね。(笑)

ビッグバン初期に存在したクォークや電子といった素粒子が、百億年ほどかかっているいろいろな組み合わせられてできてきたものが、DNA だったんだね。僕の身体は一体いくつのアップクォークとダウンクォークでできているのかなあ？ 誰か計算してくれないかな？ 少なくとも僕には不可能です。なぜなら、上の計算をするだけでも大変だったんです。何度も確かめたけど、計算が間違えていたらごめんなさい。

ところで、レゴというおもちゃご存知ですよね？ プラスチックでできたいろいろな形をした部品があって、それを組み合わせていろいろな物が作れます。例えばそれを組み合わせて風車を作ったとします。すると、そこに、風を受けて回るという新しい性質が生まれるわけです。前回書いた「Aという玉がBという玉にぶつくと、AとBという玉は、Mという玉になってしまったり、その性質までも変えてしまったりもする」ということのたとえです。だけど、風を受けて回るといふ、今までになかった性質を獲得しただけで、自然界に存在する

力学的法則そのものを変えてしまったわけではありません。

原子が組み合わされて分子になり、分子が組み合わされて生物の細胞や無生物になり、それが組み合わされて多細胞生物や巨大な天体などになる、我々の宇宙は、全てこのような構造で成り立っています。より小さなものがくっついてより大きくなり、そのたびに、性質を変化させていく。もちろん、時にはその逆で、より大きなものが分解され小さくなることもあります。そして、以前とは違う性質をもったものに化する。いずれにしても、これがこの宇宙の基本的な構造です。

生物を規定する最も大切な条件の一つに「自己触媒をする」というものがあります。触媒とは、辞書には「化学反応のとき、それ自体は化学変化をしないで、他の物質の化学変化の速度に影響を与える物質」とあります。わかりやすく言えば、仲人さんのようなものです。相手方を誉めそやして心を開かせ、もともとは他人だった者同士を結婚まで至らせる第三者的な存在です。最近話題の、血液をサラサラしてくれる酵素も触媒の一種です。この触媒も、素粒子がいろいろと組み合わされる段階で生まれてきた一つの性質に過ぎなかったということです。(つづく)

今回のテーマは「刺激に対する反応　それが全て」です。

編集後記

今日のところを要約すると、クォークとか電子とかの素粒子の組み合わせが、この宇宙の多様性を産み出しているということです。

僕たちは、この宇宙にある全てのものを、勝手に生物と無生物に分けているけど、本当は、単に組み合わされた過程で性質が異なってきた話で、それほど違いがあるわけではなかったのです。まして、その元となった成分は、全く同じです。

太陽も星も岩も土も海も川も草も人間も　みんなみんな同じ物　、みんなビッグバン宇宙の兄弟たち　、時にはこんなすてきな考え方をしてみませんか？　だんだん核心に迫ってきましたよ。

～世界を平和にしない愛～

NO.8　美しいイメージを持たされた愛

美しいイメージを持たされた愛

愛はもともとは美しいものなんかじゃなく、ただ人間が生きてするために必要なものだったのです。なぜ、その愛に、美しいというイメージが重なっていったのでしょうか？　今日は、そこを確か確認していこうと思います。

憎しみ、妬み、差別などといった醜い？感情は、もともとは動物の生命維持に必要なものであることを、僕たちは知っています。憎しみがなければ、自分(たち)の生命に危害が加えられてもなすがままで、生き残れません。妬みがなければ将来の伴侶を横取りされても知らんぷりで、子孫を作れません。差別がなければ大切な我が子を他の子と見分けられず、危機にさらされていても優先して助けることができず、種の繁栄は望めません。これらが、もともとは自己中心的に働く「本能」から生まれた感情であったことを、僕たちは知っています。もともとは醜いものなんかじゃなく、生きてするために必要なものだったわけです。それを社会的な動物である人間が、社会を維持していく上で良くないものとしてイメージしていくうちに、醜いものというイメージが重なってしまっただけなのです。

創刊号で、僕はみなさんに「愛という言葉聞いてイメージされるものは何でしょうか？」とお尋ねしました。優しさ、清らかさ、笑顔、ハートマーク　。いい感じのもの　、癒されそうな感じ　、優しい気持ちになれそう　、タンポポの綿毛のようにふんわりしたものの　、暖かく包んでくれそう　、みんなの心が一つになれそう　、世界を救ってくれそう　。でも、これらの美しいイメージは、みんなが愛の本性をよく見つめもせず、心が癒されそうな感じがするものに、愛という言葉当てはめて何となく使っているうちにできあがってしまった、「愛という言葉」に対するイメージだったのです。

前回見てきたように、愛は、決して美しいものなんかではなくて非常に利己的なものでした。では、なぜ愛には美しいイメージが重なっていったのでしょうか？　僕たちは人間として生きています。人間として生きているということは本能のおもむくまま生きる動物とは違って、ある程度、理性が本能を制御しています。理性は僕たちに、たとえやりたいことがあってもやっつけられないと禁止したり、やりたくないことがあってもやらなければいけないと命じてきます。でも、生きていくためには、時には幸福感や満足感を得なければ生きられません。いつもいつも禁止されたり命令されてばかりでは嫌になってしまいます。そうでしょう!?

幸福感や満足感を得るためには、どうしても自己中心的に働く本能を抑えつけずに素直に受け入れてくれる対象が必要になります。そこそが愛だったわけです。だから、それを美化して使う必要があったわけです。つまり、愛はもともとは美しいものなんかじゃなく、憎しみ、妬み、差別などと同じように、ただ生きるために必要なものだったわけです。人間が自分の生をより満足感を持ったものにしようとしていくうちに、愛に美しいというイメージが重なっていっただけなんです。

だから、僕たちが美化する「愛」と、「憎しみ、妬み、差別」などといった感情がどれだけ根深い関係にあるかを知ることができます。人は、憎しみ合い、妬み合い、差別し合うから、愛という美しいイメージを持った言葉で自分を正当化し、お互いに正当化し合い、慰める必要がありました。でも、また、愛という利己的に働く感情があるから、人はますます憎しみ合い、妬み合い、差別し合ってもいます。これは事実です。例えば、アメリカの愛国心は世界を平和にしますか？　日本の愛国心は、他者を攻撃する材料になりませんか？　事故で子供を失った親は、愛していた子供を殺した加害者を激しく憎みませんか？　あなたが一人の人の愛を独り占めした時、他の誰かに恨まれていないと言い切れますか？

愛は世界を平和にしません！
愛は時には他人を傷つけます！
愛は時にはあなた自身をも深く傷つけます！

何故、今まで多くの人が世界を平和にしようとしてできなかったのでしょうか？ 何故、今まで多くの人が幸福になりたいと願ってなれなかったのでしょうか？ それは、世界を平和にするためには愛が必要だと叫ばれていたからです。幸福になるためには愛が必要だと信じられていたからです。世界を平和にするのに必要だったのは、愛ではなかったのです。あなたを幸福にするのは愛ではなかったのです。

では、世界を平和にするのは、そしてあなたを幸福にするのは一体なんなのでしょう？ (つづく)

今回のテーマは「不覚にも涙が 」です。

編集後記

世界を平和にするのは、そしてあなたを幸福にするのは一体なんなのでしょう？ と、僕は尋ねました。世界が平和になるとは、そこに生きる全ての人々が満足感や幸福感を持って生きられるようになることです。つまり、あなたが真の意味で幸福になることと同じことではなはいけません。そのためには、本能を癒してくれるもの (=愛) がどうしても必要だと言うのなら、どこかに今まで誰も見たこともないような愛はないものなのでしょうか？

それが、僕が体験した いえ、体験させられた愛です。と言っても、決して宗教的な非科学的なものではありません。むしろ、現代科学が解明しているものを手がかりとした自分探しをしていくうちに、到達した愛でした。僕はあなたにそれを知っていただきたいのです。あなたにも体験していただきたいのです。あなたが、うやむやなままに美化されている愛に翻弄されてこれ以上キズつかないために、これ以上誰かをキズつけないために。そして、世界を平和にするために。

%%%

自分探しの旅 with マーキー

NO.09 刺激に対する反応 それが全て

%%%

刺激に対する反応 それが全て

宇宙の基本的な構造をもう一度確認しておきます。

この宇宙の始まりを、ビリヤードの初めの玉を突いた時というたとえで考えてきました。最初に突かれたAという玉がBとCに当たり、そのBの玉がDとEとFに当たり、DとEとFに当たったBがはね返ってまたAに当たり、Cの玉はGに当たり、GはBの玉にはじかれたDにはじかれてHとIとJに当たり、そのJに当たったGがまたDに当たったり (ああ、頭が混乱してきちゃった) しながらビリヤード上に絶えることなく連鎖が始まっていきます。そう、そう、時には性質を変化させながらでしたよね。

宇宙という名のこのビリヤードテーブルでは、玉とテーブルの間に存在するはずの摩擦もなく、永久的にエネルギーは伝わっていくと想像してください。どの玉もいったん力を受けたら永久に止まることはしません。この連鎖の状態を、簡単な一言で表現すると、宇宙の基本的な構造を言い当てられそうです。何かの作用を受けて何かの反応をしている状態、僕は、その状態を次のような一言で言い表せるような気がします。

「宇宙の基本的な構造は、全て刺激に対する反応である」

どうでしょうか、さっきの頭が混乱してしまいそうな複雑な動きも、こんなに簡単にまとめられます。前回、宇宙の基本的な構造を「より小さなものがくっついてより大きくなり、そのたびに、性質を変化させていく」と書きましたが、それも刺激に対する反応が引き起こす現象に過ぎなかったわけです。それを人間に当てはめてみます。

人間が刺激を取り込むのは身体の外側を覆っている皮膚だけでなく、目や耳もあります。それらを受容器 (視・聴・触・味・嗅などの知覚装置) と呼んでいます。例えば現代科学は我々が物を見るという現象をどのように捉えているのでしょうか？ 目の前のバナナを見るとすると、バナナそのものが目の中に飛び込んでくるわけではなく、バナナの表面で反射された光の粒子が、目の表面にある神経細胞にぶつかるのです。これが刺激です。目の表面の神経細胞は光の粒子がぶつかる物理・化学的なある種の反応をします。その反応に刺激された次の神経細胞がある種の反応をして、次の神経細胞に刺激を伝え、その刺激を受けた神経細胞が反応して次の神経細胞へ刺激を伝え、というようにして、その受けた刺激の性質を少しずつ変化させていき、最終的には脳に伝わり、脳の中に記憶されているものなどにも刺激が伝わり、それらが反応した結果を我々は「物を見た」と呼んでいるわけです。だからやっぱり「全て刺激に対する反応」なのです。

刺激に対して適切? な反応をするためには、受容器と効果器 (骨格筋・汗腺などの諸種の腺・血管など) との間を結びつけ統合する仕組みがあります。それが神経系です。この神経系というのは中枢神経と末梢神経に分けられます。中枢神経とは脳と脊髄のことで、全身から情報を集め、全身に指令を出す働きをするものです。身体各部と中枢神経をつなぐ配線にあたるのが末梢神経です。さて、目から入った刺激が脳に伝わり、よだれをたらしたり、目の前のバナナを食べるために手を伸ばすという動作を制御しているのが、この中枢神経の一部である脳ということです。やっとここにたどり着きました。それではいよいよ次回は脳の話か？

いいえ、その前にもう少しこれまでの復習をしておきたいのです。(つづく)

今回のテーマは「君の筋肉を動かすのは誰？」です。

=====

ところで、今回は短く収まったので、もう一つ大事なことを書きます。ある学者が、生命発生の確率の低さを強調するため、「例えば時計の部品をバラバラにして箱の中に入れ、それを何億年も振り続けて一つの時計が完成するくらいの偶然性がこの世に生命をもたらした」といったような比喩を用いています。また、ある学者は、「生命発生の確率は、100万ドルの宝くじが100万回連続して当たったような信じられない幸運が重なった結果だ」と言っています。そして、最後にこのように付け足す学者もいます。

「これほどのことが単なる偶然で起こるとは考えにくい。と言うことは、宇宙には人間を作ろうとする何らかの必然性、つまり目的(意思)のようなものが最初から存在していたと考えないわけにはいかない」

さらには、「宇宙は、自分の存在を認めてくれるものがいなければ、誰にもその存在意義を認知されることなく一生を終えてしまうことになるので、そのため自分に対して望遠鏡を向けてくれる人間という知的生命を必要とした」などと、驚くようなことを考えてしまう学者もいるほどです。

こんな馬鹿な理屈が成り立つなら、もし、星たちが言葉をしゃべることができれば、次のようにしゃべっているのと同じことなのです。「ねえ君、宇宙を支配している万有引力、電気的な相互作用の力、その他のありとあらゆる物理定数がほんの少しでも違っていたら、君も僕も生まれていなくて、きっと僕たち星々は現在とは全く違った姿をしていたに違いない。でも、実際には、宇宙は僕たち星々をこんなに完璧な姿にしてくれた。この幸運のことを考えれば考えるほど、この宇宙は初めから僕たち星々に完璧な姿になって欲しいと願う意思のようなものがあって、と考えないわけにはいかないと思わないかい？」

星たちがこんなことを言ったら、「どこが完璧な姿なの?」「どこが幸運なの?」って誰もが聞きたくはないはずだ。

人間だけが、宇宙で起こってしまっている現象に対して、いちいち「信じられないほどの幸運」と感じてしまうだけなのです。それも自分の主観で。これを人間の傲慢、あるいは都合主義と言うのです。

科学者は時々、自分の偏りをとんでもない非科学的な論理で埋め合わせしようとするところがあるように見受けられます。あまりにも、理系に傾きすぎると、その反動から無意識で文系的思考パターンで自己の偏りを修正しようとするようです。せっかくここまでたどり着いたのに、また神話の時代に逆戻りです。

それと、もう一つ言えることは、科学者は自分たちが到達した真実にうろたえ始めているのです。その真実というのは、これから徐々に話しますが、自分たちが今まで努力して勉強をしてきてやっと念願の学者という肩書きもつき、生きやすくなったと信じていたら、それが根底からくつがえされるほどのものだったのです。自尊心が丸つぶれです。自尊心とは、大海を航行している人生において、安心感となる大きな船ですが、それが、ちょっとの波でも転覆しそうな泥で塗り固められたちっぽけな船だったなんて気づかされたらたまりません。だから、今度は自分の自尊心を守るために、一生懸命になって自分の自尊心と科学が到達した真実とがけんかをしないような論理を構築しようとしてしまうのです。

上の二つの比喩(時計と宝くじ)には明らかに論理的欠陥があります。まず、時計の比喩ですが、時計の部品をバラバラにしてしまえば、いくら気の遠くなるような長い年月振り続けようとも、決して時計は完成はしないのではないのでしょうか。そう思いませんか?

例えば、たった一つのネジと、それにふさわしいネジ穴をもった部品だけを箱の中に入れて何億年も振り続けても、根本まできっちりと入るなんてこと、万に一つも起こり得ないように感じるのですが、宇宙を支配している力は、決してでたらめな偶然性ではなくて、雄ネジが同じ口径の雌ネジに引きつけられ右回転するような力が働いているのです。

また、宝くじの比喩の根本的な欠陥は、生命の誕生を「幸運」の結果と見なしているところです。生命誕生自体は、宝くじのような人間の欲望とは無縁だし、だから幸運の連続という考え方はおかしいのです。つまり、自分たち人間が地球上に出現したことを幸運と考えた上での論理に過ぎないわけですが。生命の誕生という奇跡へ向けての偶然の連続だった、くらいには言えるとは思いますが、でも、偶然とは以前言ったように、結果から見れば必然のことでもあるわけです。

だけど、その必然を逆手にとって、「宇宙には人間を生むための必然性、つまり意思のようなものがあって」と考えるのは馬鹿げているということは、前々回にも書きました。宇宙はルールを作り替えながら進行しているからでした。そして、それは神様でさえもわからないからでした。

いいですか? 生命誕生の偶然性は、決して箱の中で振り続けた部品が時計になるようなでたらめな偶然性や、宝くじを当てようとするような目的を持った偶然性ではありませんよ。素粒子がくっついて原子になり、それがくっついて分子となり、としているうちに様々な性質のものが生まれてきました。例えば、高温で反応させると互いにつながるアミノ酸の混合物とか、自己触媒という性質を持つ核酸の分子とか、カルシウムイオンと反応して収縮したり光を発したりするタンパク質とかです。

生命誕生の偶然性は、このような法則性を伴った偶然性なのです。さっきも書いたけど、バラバラにした時計が組み立てられるとしたら、雄ネジが同じ口径の雌ネジに引きつけられ右回転するような力が働いているのが自然界なんです。これは神の摂理でも合目的でもなく、自然界にはあらゆるものに方向性があるということです。その方向性は、初めの玉の一突きによって全て決定づけられたものです。あらゆる自然のふるまいに意味はありません。それに意味を見い出そうとするのは、人間の想像力というふるまいです。

編集後記

人間はあくまでも自分に都合のいい解釈をしたいようです。どのような解釈をしようと結局はその人の偏見を記述したものに過ぎないわけだから、間違えというわけではないんだけど、僕たち人類の幸福・平和という目的を想定した場合、ご都合主義的解釈はあまりすぐれたものではないと言えます。これからの僕たちに必要な解釈は、人間の都合に合わせた解釈ではなく自然界に合わせた解釈です。それが、今僕たちが始めた現代科学がたどり着いたものを手がかりとした自分探しの旅です。これこそが僕たちを幸福にしてくれて、世界を平和にしてくれるものです。

その意味は、「NO.2 自分探しのための方法論」に書きましたね。覚えていてくれていたら嬉しいのですが!?

不覚にも涙が

今日から三週に渡って、愛にまつわるちょっと恐~い?話です。

先日、僕は大変売れたという評判の、ある本を読みました。そこには最後に、「あなた自身を愛してください。あなたの人生を精一杯謳歌してください。世界をもっと愛してください。そうすれば、その愛が世界を救います。世界を救うのはまだ間に合います」のように書いてありました。ちょっとお酒を飲んでいたせいもありますが、不覚にも、僕はそれを読みながら涙が出そうになってしまいました。それほど、訴える力を持った文章でした。

だけど、自分を愛するとは、世界を愛するとは、一体どのようにすることなのでしょう？ そのことに対する記述はありませんでした。もちろん、そのことによる弊害も一切記述されていませんでした。それと、「あなたの人生を精一杯謳歌してください」のようにも書かれています。一人の人がその人生を謳歌することは、多くの人の犠牲の上に成り立っているということが多いのに、その考察もありませんでした。多くの人の犠牲の上に成り立っているものが、世界を救えるはずはありません。つまり、あまり深く考えて「愛」という言葉を使っているとも思えません。愛という言葉を使っただけに、大変売れた本のように思えてしまいました。

「愛とは、甘えたい欲求と甘えを許すことができる心が出会った時に起こる感情である」と僕は書いてきました。でも、多くの人はそんな難しい理屈は抜きにして、ただ何かをものすごく好きになる感情に対して「愛」と使っています。でも、よく考えれば、「何か」をものすごく好きなわけは、「何か」が自分の本能を癒して幸福な心持ちにしてくれるから大好きなのです。

「世界をもっと愛してください」

という呼びかけは、「世界をもっと大好きになってください」という意味に受け取ってもいいと思いますが、「世界」という抽象的な概念は、僕自身の本能を癒し幸福な心持ちにしてくれはしません。そんなものを「愛してください」とお願いされても本当に困ってしまうのです。でも、僕は不覚にも涙が出そうなほど感動してしまいました。僕は、愛という魔法の言葉、その魔法にかかって、涙が出そうになってしまったわけなのです。あなたの愛が世界を救います、と言われれば、もう自分は何かを救ったような気になって嬉しくなってしまうのが「愛」の魔力です。不思議な力を持った言葉です。だからこそ、安易に考えもなしに使って欲しくありません。

それを書いた人に聞いてみたいと思います。あなたは、どれほど深く「愛とは何か？」と考えたのですか？ あなたは、一体、自分を愛するは世界をどのように愛せとおっしゃるのですか？ その人がその文章を書いたこと、それ自体には、ある意味ではメリットはありました。一つには、それを書いた本人が、自分の言葉が世界を救ったような気になり自分自身の本能が癒されたということです。もう一つは、読んだ人も、愛という言葉そのものに、日常抑えつけられ続けている本能が癒されたということです。だけど、癒されたのは一時的ではないでしょうか？ 僕が不覚にも涙を流しそうなになったのは一時的ではないのでしょうか？ その証拠に、その時僕が涙を流していても、世界を平和にすることはできないでしょう。もっと永劫不変の真理を僕たちは見つけたいはずです。僕は、その作者に問いかけます。

本当に、愛が世界を救いますか？

そして、もう一度今度はあなたに問いかけます。それでも、まだ、あなたも愛が世界を救えると信じますか？（つづく）

次回のテーマは「幼児虐待と愛」です。

編集後記

本のタイトルは言いませんが大変売れた本らしいので、読んだ方もたくさんいらっしゃると思います。普通の方は、その本を読んで僕のような難しいことは考えず素直に感動したでしょう。感動は、日頃抑えつけられている本能を解放してくれます。と言うより、日頃抑えつけられている本能を解放してくれることを感動と呼んでいた、と言えるのかもかもしれませんが。

そして、そのとき流す涙の中には、ストレスを洗い流す成分が含まれていることが実験によって明らかにされています。と考えると、素直さは本人にはとてもいいメリットになっているわけです。

僕のような素直じゃない反応は、皮肉れていると言われてしまうものです。でも、素直に、つまり安易に他人の言うことを鵜呑みにすることを、感化される、洗脳される、あるいは煽動されると表現される場合があります。例えば、ヒットラーが考えたことは、彼自身にとっての愛の実践でした。彼は、自分の本能が最も癒され最も幸福になることを実践したのです。今でこそヒットラーを悪者のように言う人がたくさんいますが、その頃、彼の言うことを素直な気持ちで受け取ってしまった人たちがどういう行動をしたか考えると、僕の言いたいことがわかっていただけたと思います。

ヒットラーは演説の天才でした。聴衆を惹きつけるために演説の時刻や細かいことまで考えて演出をしました。彼の演説にうっとりとするように、僕たちは「愛」という魔法の言葉にいつまでもうっとりしてはいけません。ぼやぼやしていると、あの過ちをもう一度繰り返してしまいます。その危険は、常にあなたの側にあります。日常的にも、たくさんたくさん起こっています。

今の僕たちに必要なのは、素直さよりもむしろ疑うことです。信憑性のないもの、はっきりとした科学的裏づけや証拠もないものを鵜呑みにしない態度です。

自分探しの旅 with マーキー

NO.10 君の筋肉を動かすのは誰？

君の筋肉を動かすのは誰？

次回からはよいよ、人間が人間たるゆえんとも言える、脳の活動について見ていきます。でも、今日はこれまでの復習を兼ねて、筋肉の活動について見ていきます。

みなさんは、ご自分の筋肉はどうして動くのか不思議に思いませんか？ 考えると夜も眠れなくなるので、考えないようにしていますか？でも、世の中には知らないままにしておく方がよっぽど夜も眠れないという人たちもいます。筋肉がなぜ動くのかを研究し実験を繰り返してきた科学者たちは、かなり詳しいことまで突き止めています。

まず、筋肉は骨格筋と内臓筋と心筋とに大別されます。骨格筋というのは腕力とか脚力を^{つかさど}っている筋肉のことです。これは、筋線維（繊維とも表記します）という細長い細胞が多数束ねられた物です。この筋線維はそれ自体が伸び縮みしているわけではなく、それを形成している**アクチン**というタンパク質と**ミオシン**というタンパク質からできた太さの違う繊維が、注射器のピストン運動のように滑るようにして伸び縮みしていたのです。実際には筋は伸びることはせず、収縮するか収縮しない（=弛緩する）か、だけです。



出典：CEC、IPA

それがどうして動くかと言うと、まず脳から発せられた「収縮しろ」という命令が電気的な刺激として神経を伝わると、筋肉を包み込んでいる膜にあるセンサーがその電氣的刺激を感知します。すると「カルシウム放出チャンネル」というものが開かれ、筋小胞体という袋に蓄えられていたカルシウムイオンが筋線維内に流れ出します。その流れ出したカルシウムイオンがミオシンにあるトロポニンというタンパク質と結びつくとアクチンが引き寄せられ、筋肉が収縮を始めるのです。逆に、筋小胞体という袋にカルシウムイオンが回収されると筋肉は弛緩し、元の長さに戻ります。

では、実際に試してみましよう。

「まず、右腕を曲げて力こぶを作ってみてください！」

君の脳がこの文章を読んで刺激を受け、その刺激が、**刺激 反応 刺激 反応**という連鎖を引き起こし、君の右腕の力こぶのできる部分の筋肉（上腕二頭筋）の筋線維内にカルシウムイオンを放出させ、ひじを曲げさせます。この時、力こぶのできる反対側の筋肉（上腕三頭筋）は弛緩します。ひじを伸ばすと、反対に上腕三頭筋が収縮し上腕二頭筋が弛緩します。

カルシウムイオンを筋小胞体に回収する際にはエネルギーが必要になるんだけど、このエネルギーを生産するためにはマグネシウムが必要となります。もし、マグネシウムが不足していると筋小胞体にカルシウムイオンを取り込むためのエネルギーが足りなくなってしまう、筋肉は弛緩できなくなってしまいます。ちなみに、あの痛い、足がつつている状態というのはこのことだったのです。

なかなか言葉だけで説明するのは難しいし、僕も顕微鏡で実際に見たわけではありません。また、そこまでする時間もありません。もっと効率的に自分探しの旅をするために、ここでも必要なエキスだけをいただきちゃいましょう。今日のエキスとは、簡単に言ってしまうと、こういうことです。ビリヤードの玉がぶつかり合っくっついたりして違う性質の玉を作り上げると言いましたが、その過程で、ある種のタンパク質が作られ、そのある種のタンパク質は、カルシウムイオンを受けるとある種の反応をするという性質を持っていた というわけです。

そして、これは新たに作り出された性質ではなかったですね。レゴで風車を作った時、レゴは風を受けて回るという今までにない性質を持ったけど、もともと自然界には、自然界の法則の中に風車が風を受けたら回るという性質は準備されていたということでしたね。この考え方は、とても重要です。何のために重要かと言うと、自分の心の安らぎと世界が平和になるための、ものの考え方を見つけるためです。

自然界の法則（=ビッグバンという最初の一突きがもたらした僕たちの宇宙の性格）は、未来永劫決して例外を作らないということと、しかも、この先のレールは神様でもご存知ないということを知ることが、そのことに、とても役に立ちます。例外を作らないということは、ある意味では真理ということでもあり、真理を知るといことは心に安心感をもたらしてくれます。また、神様でさえも運命を操れないと知るとは、神に近づこうとする傲慢な人間に反省を促してくれます。人間が傲慢でなくなること、自分の無力を知ること、このことは世界を平和にする第一歩です。

さて、君の筋肉を動かしていた張本人は誰だったでしょうか？

答えは、カルシウムイオンだった、ということです。

ちなみに、内臓筋や心筋の収縮もカルシウムイオンによるものですが、そちらの方は、引き金となるのは中枢神経からの刺激ではなく、自律神経系やホルモンによる刺激です。

今日は、今までの復習をしました。科学が僕たちに与えてくれた最も大きな功績、それは、「**全ての現象には原因がある**」ということを教えてくれたことでした。筋肉の話を持ち出したのは、そのことをもっと細かく検証してみたかったからです。僕が、今パソコンのキーボードを打ったのは、僕の指の筋肉の線維がカルシウムイオンを受けたからで、そのカルシウムイオンを放出させたのは中枢神経からの命令で、中枢神経がそのような命令を出したのは、脳が、ある刺激を受けたからで、といった具合です。指一つ動くのでも、その原因はち

ちゃんと化学反応で説明がつけられるということが言いたかったのです。もう一つは、筋肉を動かしている二種類のタンパク質（アクチンとミオシン）の性質も、素粒子のクォークやレプトンなどが組み合わせられていくうちに作り上げられた物質が、自然界の法則に則^{のっと}って反応する性質に過ぎないということです。

そして、この原因と結果の関係を違う言葉で言い換えると、前回の「刺激に対する反応」のことだったわけです。全部がつながってきたでしょう!?

君の筋肉を動かしていた張本人はカルシウムイオンだったわけですが、そのカルシウムイオンを放出させるための電氣的刺激は中枢神経からやってきます。そのことを説明するには、脳がどのような刺激を受けて記憶、意識、思考という化学的反応をしているか見ていかなくてはなりません。さて、いよいよ次回から脳の話に入っていきます。このメルマガの一番初めに書いた「自分を知る」という意味は、実は自分の脳を知るということでもあったんですよ。（つづく）

次回のテーマは「脳の中の細胞」です。

編集後記

最初に「筋肉は骨格筋と内臓筋と心筋とに大別されます」と書きました。と言っても、人間が、筋肉の働きを知るための都合上、勝手に大別しているだけなんです。自然界にとっては、そんなもの区別する意味なんて少しもないわけです。物質を生物と無生物に分けているのも人間の勝手な都合です。生物をたくさんの動・植物に分けているのも人間の勝手な都合、人間を他の動物と別格に扱い、その人間をさらに覚え切れないほどたくさんの民族に分けているのも人間の勝手な都合。空の上から見たらどこにも境界線なんてないのに、たくさんの国に分けているのも人間の勝手な都合です。

自分たちが勝手に決めているのに、そのことを忘れてしまっていることってたくさんありますよね。例えば、数字がどうして10を単位としている（十進法）かわかりますか？ それは人間の指が十本あったからです。もし、人間の指が左右で六本だったら、六進法になっていたわけです。でも、みんなそんなこと忘れちゃって、当然のように十進法で計算をしてるし、それが七進法とかになると違和感があるどころか間違っているかのような錯覚をしてしまう。これを固定観念といひます。

例えば「フランスへ旅行に行ってきたよ」と聞いて、「そんな国、人間が都合上勝手に決めてるだけで本当はどこにもないんだよ」なんて言うと誰もが怪訝な顔をする。勉強というのは固定観念を作るためのもの、という言い方もできると思います。歴史を勉強して、自分の国が過去の一時期、ある国に不当に扱われていたということを知るとは、強い憎しみを生み出す固定観念にもなっています。

勉強はとて大切だけど、それが固定観念になっていることを忘れちゃってると、考え方がどのような方向に進んでいるか知りたい時に、こだわりを持った判断しかできなくなっちゃうことがあります。固定観念やこだわりが、柔軟な思考の妨げになったり、自分たち人間を客観的に眺めたり反省したりできなくなるということです。

僕たちはせつかく現代科学が解明しているものを手がかりとした自分探しの旅を始めたんだから、時々、「うーん、この解釈は人間の〇〇のための都合だな」という考え方をする訓練をしておく必要があります。

~ 世界を平和にしない愛 ~

NO.10 幼児虐待と愛

幼児虐待と愛

今回は、愛にまつわるちょっと恐~い?話の二回目です。

先日、ネットサーフィンをしていて、あるホームページに釘づけにされてしまいました。育児ノイローゼで虐待に悩む30歳くらいの女性が、同じような悩みを持つ人たちと語り合い、助け合っているものでした。でも、コンテンツを探っていくうちに、それは表面的なもので、実はもっと恐ろしい内容のホームページだったのです。

彼女は、子供の頃、実の母親からひどい虐待を受けて育ったようです。彼女の父親はほとんど育児には無関心で、負担は母親にすべてかかり、それだけでなく、彼女は、喘息やアトピーで、母親の手を煩^{わづら}わせていたので母親は一種のノイローゼだったのでしょうか。母親から受けた虐待の数々が、幼少時から順を追ってつづられていて、19歳で、母親から「家庭の平和を乱すから出て行ってくれ」と頼まれるまでのことが書かれていました。

虚弱体質で、身体の具合が悪く食事があまり進まなくても、早く食べないと母親から布団たたきで背中を叩かれるので、何とか飲み込む工夫をしなければなりません。自分の体内で毒素を作ってしまう嘔吐症^{おうと}にかかってしまった時には、寝ている時に時々嘔吐をしたそうですが、そうすると、何十回も往復ビンタをされたそうです。それが恐くて吐かないように祈っても、急にこみ上げてくる吐き気は子供にはどうすることもできません。

とても苦しい喘息の発作が起きて、夜だと病院は割増を取るの、朝まで連れて行ってもらえず、土下座をして「病院に連れて行ってください」と母親にお願いしたこともあったけど、それでも聞き入れてもらえなかったと書いています。

ある日なんか、喘息の発作の時、母親に手を引っ張られて外を走らされたそうです（実は、父親の入れ知恵だったと、ずっと後になってわかったらしいのですが）、その時の母親の顔は、確かに笑っていたように見えたと書いてありました。大声で「人殺しー」と叫んで助けを求めても、誰も助けてくれなかったそうです。

学校でもいじめにあうのですが、家にいるよりはましと思ひ、登校拒否もしなかったということです。友達にいじめられていることを言

っても先生は何もしてくれず、一度だけ、母親に学校に行きたくないと言ったら、髪の毛を引っ張って引きずり回され、追い出されました。子供の頃、ピクニックと称して車で山に連れて行かれ、そのまま両親に捨てられそうになったこともありました。

もちろん、これらの記述を全て鵜呑みにするのは大変危険です。「当時の母親の状況を考えると許してあげたい気持ちもある」と書かれている所を見ると、被害者側の一方的な報告である点を本人も自覚してはいるようです。状況説明というのは、どうしても双方の食い違いがおきます。もし母親がこの報告を読んだら、目をまん丸にして驚くに違いありません。「恩を仇で返すとはこのことだ」とわめいて布団叩きをへし折ってしまうか、もしくは自分の気持ちが子供には全く誤解されていて、切なくなって泣き出すかもしれません。

でも、母親の報告がないのでここでは推測してみることにします。

あなたはこの母親（そして父親）には娘に対する愛がなかったと感じますか？ 僕は、そうは思わないのです。僕は虐待をする親たちの気持ちが痛いほどわかります。母親が子供に愛を注ぐのは、その見返りとして子供が愛らしさや希望を与えてくれるからです。例えば、自分が作った料理を食べない子供は、その見返りが少ないということです。愛らしさも、健康という希望も与えてくれません。布団たたきで叩くのも、初めは、なんとか健康になって欲しいという気持ちがあったと思うのですが、それがうまく伝えられなかったり誤解されたりでイライラしてしまい、出てしまった行動かもしれません。

それが積み重なると、叩いてはいけないと思っても、気がついたら条件反射のように同じ行動（反応）をしてしまっているのです。そうして、行動というのは、だんだんとエスカレートしていくものです。母親が喘息で苦しんでいる子供を殺そうとしている時に笑っていたのは、嬉しいからではなく、もっと複雑な感情を笑うことで乗り越えようとしていたのかもしれない。虐待をしてしまう親は、我が子をいじめめることに快感を感じているのでは決してありません。

愛があるからこそ、虐待もあるのです。

これこそ愛の本性です。

もしあなたの前に見知らぬ人を連れてきて、「さあ、世界平和のために、今日からこの人を愛してください」などと言われても、愛せるものではありません。しかも、第一印象はあなたがあんまり好きになれそうもない人だとしたら、なおさら困ってしまいます。愛とは、理屈ではなく、もっと本能に近いものだからです。愛は、理屈ではなく本能的なものである以上、本能的に行動をしてしまう虐待と、同じ次元のものなのです。

虐待をしてしまう親は、誰もが美しくイメージする「愛」に振り回されている被害者の一人です！ 愛という利己的に働く甘い誘惑のために、子供をそして自らを不本意に深く傷つけてしまう、被害者の一人なのです！ まるで、自分の快樂のために用いる麻薬が、やがては周囲も自らも傷つけてしまうのと似ていませんか？ 愛には確かにそういう要素もあるのです。（つづく）

今回のテーマは「離婚率世界一を誇るアメリカの名言」です。

編集後記

虐待をしてしまう親は、我が子をいじめめることに快感を感じているのでは決してありません。と、僕は書きました。その証拠に彼ら（彼女ら）は、虐待をしてしまった後、必ず罪悪感を抱き、自らを責め続けています。虐待をしない自分になりたいとカウンセリングを受けたりもしています。

でも、いろいろな虐待に関するホームページを探っていくうちに、快感を感じている虐待もあることがわかりました。それは、実の母親が我が子をゲーム感覚で虐待しているケースでした。自分の人生をつまらないものにした子供を見ていると、なんだかムラムラムと憎たらしくなってきて、虐待をするとスーッとすると告白しています。その後の罪悪感もあまりなく、ニュースにならないくらいに隠微に虐待をすればいいと考えているようです。

もし、子供が自分の虐待に泣かなければ、負けたような気になって悔しくなるそうです。これは、今回の内容とは違う形の虐待なので、今までの理論では説明ができないものなののでしょうか？ 「愛とは、甘えたい欲求と甘えを許すことができる心が出会った時に起こる感情である」この理論に対する唯一の例外でしょうか？ 僕はそうは思いません。この親が自分の子供を虐待する時、この人の何らかの甘えの欲求（＝本能）が許される（癒される）わけです。

愛とは自分のために行なわれる無意識の交換であって、決して子供のためだけではないことを、今まで読んでくれた方はわかってくださっていると思います。普通は、親が子供に愛を注ぐのは、その見返りとして愛らしさや希望を与えてくれるからです。しかし、この親が子供に注ぐ愛は、その見返りとしてゲームで満点を取るような爽快感を与えてくれます。この人はこの人の愛し方で、子供を愛しているわけです。罪悪感はないと書いています。でも、どこかに非難されるべきことをしているという意識があるから、そんな恐ろしい告白をするホームページを作ることで、自分の気持ちを救おうとしているのかもしれない。

ところで、これまでのメルマガを読んでくださって、誤解をされないように書いておきます。僕は、愛というものに個人的恨みがあってこんなメルマガを発行しているわけではありません。僕が批判しているのは、愛をあらゆる物の解決策、のように用いるその安易さです。

「幼児虐待は、親の愛が足りないからです。世界に戦争が起きるのは人類への愛が足りないからです。愛が全てを救ってくれます。さあ、今日からもっと愛を大切にしましょう」

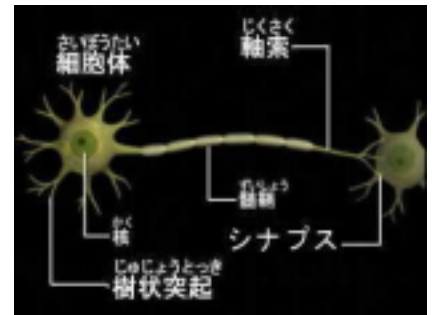
「なるほど、そうでしたね。いいお話を聞かせていただきました。じゃあ、私もこれからもっと愛を大切に作る人間になるように努力します」

こんな次元で、お互いに思考を停止してしまい、その先を考えることをやめてしまって、全てが解決したかのようにもう笑顔に戻っています。ちょっと待ってください！ 何も解決していませんよ！ むしろ幼児虐待は親の愛（愛とは常に利己的に働くものでした）が強過ぎたんじゃないですか!? 何の解決策にもなっていないのに、愛って言葉で全てが解決したように思わないで下さいね！

僕はそのように言いたいのです。その先を考えたいのです。

脳の中の細胞

人間の脳というのは、1000数百億個の神経細胞と、それよりずっと数の多いグリア細胞というものでできています。まれに、人間の脳は約150億個の神経細胞からできている、という誤った記述をしているホームページを見かけるけど、これは、大脳皮質の部分だけの数です。その主役である神経細胞（ニューロンといいます）は、一つの細胞体から、たくさんの短い「樹状突起」と、一本の長い「軸索」という突起が生えている形をしています。樹状突起（と細胞体）は他の神経細胞から情報を受け取り、軸索は他の神経細胞に情報を伝達する働きをしています。



出典：CEC、IPA

受容器（視・聴・触・味・嗅などの知覚装置）によって受けた刺激が、末梢神経を通して脳の神経細胞の、ある細胞体に伝わると、そこから伸びている「軸索」の中を電気的なインパルスが走ります。その先端は、またたくさんに枝分かれしていて、枝分かれしたそれぞれの先端部分は、わずかの隙間をもって他の神経細胞の樹状突起や細胞体とつながっています。この接続部分をシナプスと呼んでいます。電気的なインパルスが、そこで化学信号に変えられて他の樹状突起や細胞体に刺激が伝えられます。

何のために？ ですけど？ こんなもの何のためでもないです。（笑）

ただ、素粒子がどんどんくっつくうちに、この自然界の中にそのような働きをする物質が生まれた、というだけなんです。それは、ビリヤードの玉の最初の一突きによって性格づけられた力です。だから、刺激 反応 刺激 反応 刺激 反応 と永遠に（このビッグバン宇宙終焉の日まで）続いていく連鎖の過程の中で生まれた現象に過ぎないわけです。

脳の中でもそのように次の神経細胞へ次の神経細胞へと、刺激 反応が伝わり、性質は変化し、あるいは増幅され、それによって僕たちは物を考えさせられたり何かをしようと思わせられたり、いろいろな反応を引き起こさせられるような仕組みができてしまったわけなんです。それは永遠に（このビッグバン宇宙終焉の日まで）途絶えることはありません。

ちなみに、僕がこの文章を書いているのは、そのようにして何かの刺激に反応している状態ですが、この作用はここで終わったわけではありません。この文章を君が読んでくれて、その刺激が何かの反応を引き起こすわけですから。

えっ？ ここまで読んで、何の反応も引き起こさないって？（泣）でも、そんなこと絶対にありえません。例えば、君は今、僕のメルマガを2分31秒読んでから、右上のバツで閉じるとします。それで、煙草を吸いたくなり煙草の箱を取ると空っぽでした。そこで煙草を買おうと外に出ると、そこに現れたのは酔っ払いのおっさんでした。「おう、あんちゃん悪いねえ、この辺にコンビニねえかい？」それを教えてあげると、酔っ払った勢いでおっさんは千円をくれました。こんな幸運？を、君は僕のメルマガを2分31秒読んだこととは全く無関係だと言い切れますか？ 僕のメルマガを2分45秒間読んでいたら、酔っ払いのおっさんともすれ違わなかったはず。君は僕のメルマガを2分31秒間読んだことよりも、千円貰ったことの方がずっと価値があると思われるかもしれませんが、それは君の主観が判断していることに過ぎず、自然界から見ればどちらも一つ現象に過ぎないわけです。起こるべくして起こっている現象です。

酔っ払いのおっさんがその時間にその場所に現れた原因も、さかのぼれば、その時間にその場所に現れる以外にはあり得ないほどの必然性で現れているわけです。だから、ビッグバンという最初の一突きから途切れずに続いている刺激 反応、刺激 反応、刺激 反応、刺激 反応 がもたらしている一つの現象として、僕がこの文章を書いているということだって、全て必然です。

ビッグバンがなければ僕はこの文章を書かなかったし、僕がこの文章を書くことは、結果的に見れば（あくまでも結果的に見ればですよ）ビッグバンが起こった時点で決められていた、と考えられるわけです。でも、このことを逆手にとって、宇宙は生まれた時に、僕がこの文章を書かせるような目的や意思のようなものを持っていた、と解釈してはいけなことを前回話しましたね。

さて、神経細胞は他の細胞と違って、細胞分裂をせず、減る一方です。二十歳過ぎると、一日に十万個ずつ減っているとされています。でも、シナプスは、細胞体から出ている1本の軸索に対して、平均1万個もあると言われていて、新しく作り出せるから安心できそうです。ただし、年を取って神経成長因子が少なくなると、シナプスのでき方は鈍くなります。それで記憶力も鈍るのではないかということです。

ところで、脳内での情報の伝達は、軸索内を電気が走り、シナプスで化学信号に切り替わると説明しましたが、電気といっても、家庭の電化製品のコードの中を流れる電流のようなものとは違って、要は液性のカリウムイオンとナトリウムイオンの交換のことですから、脳の中で行われていることは、全て化学反応だと思った方が、僕たち素人にはわかり易いでしょう。イオンとは、電子を失ったり得たりして電気を帯びた原子及び分子のことです。

シナプスで伝えられる化学信号とは、ある働きを持った化学物質で、その作用により相応の反応をするというわけです。例えば、ノルアドレナリンは驚きや怒りの伝達物質、エンケファリンやエンドルフィンなどはモルヒネのような働きをします。フェニルエチアミンは、恋をしている時などに放出されていて、興奮する、陶酔するなどという一種の幻覚作用を引き起こします。セロトニンは攻撃性を抑制する働きがあるそうです。僕たちの感情を作り出す張本人は、化学物質だったのです。

このように、僕たちの脳の神経細胞の中では、いろいろな刺激に対する反応（特定の化学物質を生成したり、特定の結合を作ったり）が今も行なわれているわけです。その反応が刺激となって、新たに何かの反応（行動）を引き起こされるわけです。

ところで、一番初めに、脳は神経細胞とグリア細胞できていると書きましたが、グリア細胞は、ちゃんと？増殖もするし、数の上では神経細胞よりはるかに多く、神経細胞の活動・維持を助けるたいへん重要な存在です。このグリア細胞について次のように書かれている文を見かけました。

「脳が神経細胞だけからできているとすると、細胞表面のいたるところが、隣の神経細胞と接触することになり、それだといたるところに興奮が伝わる可能性が生じるから、おそらくそういうことが起こらないようにグリア細胞という脇役があって、それが神経細胞同士の間、徹底的にはまりこんでいる」

この文は原因と結果がひっくり返っています。たまたまグリア細胞があるから、隣同士の神経細胞は互いに接触せず、興奮がいたるところに伝わらない状態になっているだけであって、興奮がいたるところに伝わらないようにグリア細胞ができたわけでは決まてないです。

人間は物事の関わり具合を人間流に解釈してしまうところがあるから、うっかり、こういう因果のひっくり返った言い回しをしてしまいます。人間流というのは、人間以外の物事に、感情や意思を持っているとされている人間の価値観を当てはめて考えてしまうという意味です。僕はこの解釈法を「**意思的解釈**」と命名しました。人間にはあるとされている「意思」を、他のものにも当てはめて解釈してしまうという意味です。

上の引用した文章は、「男の子ばかりのクラスだと殺伐^{まっぴつ}としてしまうので、女の子を同じ数だけ入れたクラスを作りました」みたいなことを言っているのですよ。自然界が、そんな心遣い^{こころづか}をするわけがありません。「**意思的解釈**」については、いずれ話しますので、この言葉は覚えておいてください。

もし、僕たち人間にこのグリア細胞がないとして、いたるところに興奮が伝わる脳を持った人間ばかりだったら、最初から人間とはそういうものだと認識するまでの話です。何ら差し支えありません。自然というのは「～する方が都合がいいため、～する能力があらかじめ備わる」ということは決して起こり得ませんよ。「～という能力が備わったため～することが都合がよくなった」ということが、(人間の都合から見て)言えるだけです。(つづく)

今回のテーマは「ワニの脳、ウマの脳、ヒトの脳」です。

編集後記

今日のエキス。

このメルマガは、科学の解説のメルマガではありません。現代科学がたどり着いたものを手がかりとした「自分探し」をするものです。それで、今日も「自分探し」のエキスだけをいただいちゃいましょう。僕たちの感情を作り出す張本人は、化学物質だったわけですが、感情(驚き、喜び、怒りなど)は、化学物質同士の単なる刺激に対する反応が引き起こす状態に過ぎなかったということです。

それを、「心」という言葉で呼ぶか呼ばないかは、人間の勝手な都合による解釈に過ぎないわけです。

~世界を平和にしない愛~

NO.11 離婚率世界一を誇るアメリカの名言

離婚率世界一を誇るアメリカの名言

愛にまつわるちょっと恐~い?話の最終回です。

「私たちは誤解して結婚しましたが、このたび理解し合えましたので離婚します」離婚率世界一を誇るアメリカの名言です。彼ら(彼女ら)が、優しく耳で「I love you.」と囁き続けていないと不安なのは「君は僕の甘えを許してくれるので大好きです。君が僕の甘えを許してくれる限り、僕は君の甘えを許し続けます。」「私もあなたが私の甘えを許してくれるので大好きよ。あなたが私の甘えを許して下さる限り、私もあなたの甘えを許し続けるわ」という契約の確認だったからです。

この甘えというのは、もちろん今まで書いてきたように、「本能の求める欲求を押し通そうとすること、あるいは本能が最も居心地がよく感じる状態を維持しようとする」という意味です。これが達成されないと、人間は幸福感や満足感を持って生きることができないのです。個人主義を標榜^{ひょうぼう}するアメリカ人が、自己の甘えに価値を置くのも、よくわかることです。

さて、この三週に渡って、僕はあなたを失望させることはかり書いてきましたか? もっと夢のある愛の話ができないの? って言われてしまいますか? 愛とは今まで見てきたように決して綺麗なものなんかではありません。非常に利己的なもので、常に、気づかずに見返りを要求しているものでした。でも、でもですよ、それは、幸福感や満足感を得るために、言い換えると生きていくために是非とも必要なものでもあります。だとしたら、その愛を優しく受け入れて、希望を見出さなければならないのです。

僕があなたにお伝えしたかったことは、僕の書いていた物語の主人公が見つけたその希望の光だったのです。それをあなたにお伝えしたくて、書いています。(つづく)

今回のテーマは「あなたへの一つの質問」です。

=====

今日は短く収まったので、もう一つ書かせていただきます。

先日、テレビのチャンネルをランダムに回していたら、NHKの『心の時代』という番組に引きつけられました。そこには、気仙地方の

方言「ケセン語」研究家でカトリック信者で医師でもいらっしゃる山浦玄嗣さんという方が出演されていました。山浦さんは、新約聖書の「マタイ福音書」をケセン語で表現しようと考え、初め日本語の聖書を元に訳していたけれど、堅苦しく意味不明な直訳が多く、また、つじつまが合わなかったり、イエスの実像が浮かんでこないという理由から、ギリシャ語の原典から翻訳をし直しました。

山浦さんは番組の中で、聖書の「**汝の敵を愛せ**」という教えに「**どんなに苦しめられたかわからない**」とおっしゃっていました。敵というのは憎い相手です。その憎い相手を愛するなんてあまりにも矛盾しているからです。だけど、原典を調べていくと、そこには日本語の「愛」というニュアスはなかったそうです。日本語の「愛」には、上位のものが下位のものを「好き」であるという意味が基本的にありました。例えば、**男尊女卑**の頃、夫は妻を愛するという言葉は使えても、妻が夫を愛するなどと恐れ多くて使えず、「**お慕い申します**」と使ったわけです。

原典のアガペーという言葉は、相手が自分よりも下位であるほうが上位であるほうが関係なく、また好き嫌いの感情を超えたものだそうです。そこで山浦さんは、「**汝の敵を愛せ**」の「愛」を原典に近い「大切にしろ」という言葉に置き換えて、「**憎い敵であっても相手だって人間なのだから、大切にしろ**」と解釈したそうです。そうすると、それまで苦しめられていたものが、霧が晴れるように消失したということです。

ちなみに、戦国時代末期から徳川時代にかけての日本人キリスト教信者（**クリシタン**）も、「愛」という言葉は使わず、「**お大切**」という言葉を使いました。その理由は、「愛」は仏教用語で、解脱の障害となる汚れた**煩惱**・執着心の一つと考えられていたので、この語を避けたとも言われます。

愛は憎しみと同じ「感情」です。いくら愛という感情が「善」に近いイメージがあると言っても、感情に全幅の信頼を置くわけにはいきません。愛が感情である限り、それは憎しみという感情と同次元のものです。その証拠に、時には自分たちの愛を貫くために、敵を憎み血を流して戦わなければならないものです。

山浦さんは次のようにおっしゃっています。

「**大切なことは、愛憎の感情を超えて、意志の力によって、たとえ敵であっても大切にしようという決意と断固たる行為である**」
とても素晴らしい言葉です。

最悪の事態を想定してみましょう。もし、あなたの「愛する我が子」が、誰かに殺されてしまったとします。その時、あなたはその加害者を恨み続け、復讐に一生を費やし、様々な妄想に苦しめられ、自分の人生を台無しにしますか？ それとも、意志の力で大切にしようことができるでしょうか？ 僕たちには、きっとできるようになります。そして全ての苦悩を乗り越えられる時がきます。

僕たちがたどり着く場所には、今まで見たこともない木が立っているはずで、その木に実っている不思議な味のする果実に、全ての秘密が隠されています。（つづく）

今回のテーマは「あなたへの一つの質問」です。

編集後記

山浦さんは、「日本語の『愛』には、基本的に上位のものが下位のものを『好き』だという意味がある」とおっしゃっています。夫は妻を愛するという言葉は使えても、妻は夫に対して「**お慕い申します**」としか言えなかったわけです。

「愛とは、甘えたい欲求と甘えを許すことができる心が出会った時に起こる感情」であるわけですが、**男尊女卑**の頃、男性には女性に甘える気持ちが許されても、女性が男性に甘える感情を持つなんて、もってのほかだという偏見が幅を利かせていたのでしょう。

現代は、女性が男性に対して「愛しています」という言葉を使える時代です。それは、女性が男性と対等になってきたからでしょう。アメリカからやってきたウーマンリブというのは、女性の「甘えの権利」を獲得しようとした運動であると言い換えることができそうです。

今まで、男性は女性に甘えてきたわけですが、ウーマンリブの場合は、男性に甘えるというよりも、社会制度に女性の甘える場所を築こうとする運動です。そのことで、男性と闘わなければならないわけです。本当は男性が女性に甘えるように、女性も男性に甘えてくれて、お互いに包容力を持って受け容れようとする方が、世界は平和になるはずで、自分の持っているものや強さを誇示するより、自分が持っていないことや弱さを知り、男と女は助け合わなければ生きていけないことを知るべきです。これは男と女に限らず、人間関係でも、国際関係でも言えることなのです。何故それができないのでしょうか？

それは、誰もが自分の甘えを強く通そうとするからです。誰もが自分の甘えを強く通そうとする理由は、今はまだ、誰もが**自我という幻想**によって生きているからです。

と、謎の言葉を残して今回は終わりにします。この謎の言葉の意味も、不思議な味の果実をがりと齧った瞬間にわかっていただけるかも。

%%%

自分探しの旅 with マーキー

NO.12 ワニの脳、ウマの脳、ヒトの脳

%%%

ワニの脳、ウマの脳、ヒトの脳

今日もまた、人間が便宜上勝手に大別しているだけのどうでもい話をします。でも、大別という方法論は、自分探しには（自分を客観的に把握するには）結構役に立ちます。

人間の脳は大きく**大脳**・**小脳**・**脳幹**の三つに大別できます。

- 1、大脳 表面のしわしわの部分を大脳新皮質、その内側を大脳辺縁系、そのまた内側を大脳基底核と呼びます。
- 2、小脳 脳を横から見ると大脳の後ろにぶら下がっている部分。
- 3、脳幹 脊髄からつながっている脳の心棒にあたるもの。

これらの分け方はそれなりに重要ですが、今回は、脳を大脳新皮質、大脳辺縁系、脳幹という三層構造で見たいと思います。なぜなら、脳が作られてきた古い順番で見ると次のように分類できるからです。

- 1、脳幹の視床下部 = ワニの脳
- 2、大脳辺縁系 = ウマの脳
- 3、大脳新皮質 = ヒトの脳

ちなみに、『脳ってすごい！』っていう、すごい本を書いたロバート・オースタインさんは、「脳は、いわばきちんとした計画もないまま長い年月をかけて増築されてきた古い家のようなものだ」と言っています。この「きちんとした計画もないまま」という言葉、とても重要です。

ところで、小脳はどこへ行っちゃたのかって？ これは、身体のバランスを保ったり、自分の意思で行なう運動をスムーズに行なったりするための調節に欠かせない部分ですが、ここでは省略。

具体的に見てみます。

心棒にあたる脳幹には、本能と非常に関係が深い視床下部という部分があります（注：ただし、大別方法によっては視床下部を脳幹に含めない場合もあります）。これは、親指の先程しかない大きさですが、その働きたるやすごいものです。攻撃や逃避の行動をとるためのホルモンを分泌したり、摂食中枢や満腹中枢、性欲中枢などの他、体温や血圧や内臓の働きを調節したり、水分を調節したりする部分です。原始的、爬虫類の本能行動を司っている部分なのでワニの脳と呼ばれます。

その周りの大脳辺縁系をウマ（あるいはイヌ）の脳と呼んでいます。これは、（動物のレベルの）快・不快や、満足感や、恐怖や、不安や、怒りなどの感情を生み出したり、記憶にも関係しているところです。本能行動を起こさせる大脳辺縁系と視床下部を合わせて「動物の脳」ということもあります。

それに対して一番外側の大脳新皮質は「人間の脳」と呼ばれます。大脳新皮質は、高等になるほど発達していて、認識、記憶、判断、思考などを受け持つ部分なので、人間で言えば、理性や知性の脳とも言えるのではないのでしょうか。例えば、不快に思ってもそれに立ち向かわなければならなかったり、欲求があるのに我慢しなければならなかったりするの、この部分があるからなのです。動物だった人間が理性を持つことで善悪の基準を持つようになってしまったというのは、このような構造的な次元でのことだったのかもしれない。

今日は、ちょっと息抜きに、脳の三層構造（大脳新皮質、大脳辺縁系、脳幹）を「笑い」に焦点を当てて見てみます。

大脳新皮質－社交上の笑い

これは、協調の笑い、あるいは人間関係を円滑にするための1つの技術とも言える笑いです。バツの悪いときに笑ってごまかしたり、トゲトゲした人に対して使う武器としても使われる笑いです。社会経験とともに、徐々に身につく笑いです。

大脳辺縁系－快の笑い

これは、簡単に言えば、本能が満たされた時に無意識的に出てくる笑いです。例えば、嫌いな同僚が失敗して上司に怒られているのを見てニヤリとする笑いや、サッカー選手がゴールを決めたときに、「ヤッター！」というアクションを伴う笑いです。スポーツって結構本能的です。（笑）

脳幹 条件反射の笑い

笑いすぎた際に、「涙が出る、汗をかく、呼吸が荒くなり隣の人をやたらと叩く」といった行動が起こるのは、ワニの脳の仕業です。なぜなら、この部分は自律神経の中核でもあり、汗や涙の分泌・血圧や心臓の拍動の変化・血管の収縮や拡張、呼吸数などを司る部分だからです。みなさん、笑いながら隣の人を叩いている人を見たら、今日からは、あの人ワニの脳をフル活用させてるなあ、と感心しましょう。（笑）

今日は、脳を三層構造で見ましたが、次回は、五感（視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚）と言われるものがどの部分でキャッチされ、どのように認識されていくのか見ていきます。（つづく）

次回のテーマは「どこが感じているの？」です。ちょっと、卑猥かな？

編集後記

僕たちが、人間であるゆえんは、理性（物事を論理的に思考し真偽・善悪を識別する能力）の大脳新皮質を駆使しているからだけ、本能（欲望）がその奥に力強く潜んでいるんです。結局、理性は、その欲望を理由付け（合理化）する道具に使っているだけなのかもしれません。大人も子供も。そう、子供だけでなく、大人だって。

と言うか、大人の方がずっと巧妙にやっているわけです。子供はそのことを感覚的に見抜いているのだけど、うまく言葉で表現できずに、それでイラついて暴力で訴えてしまうのかもしれない。この状態から脱却して、大人も子供も真の人間になるためには、自分の中にはどのような本能が温存しているかをしっかり理解し、理性がそれをコントロールできるようになることが必要です。

僕の産みの親、真亜基さんは、メルマガ『世界を平和にしない愛』で次回そのことについて書くそうです。うまく書いてくれるかどうかちょっと心配だけど、それだけでなく、僕が考えたことをほんの少しだけ発展させて、「世界平和のための本能分類表」？と名前までつけて、自分のメルマガで発表しようとしています。ふんっ、別にいいんですけどね。（不快）ウマの脳でした。



出典：CEC、IPA

だから、僕が本能について口出しをするのは、この辺でやめておきます。この本能については、彼のメルマガ『世界を平和にしない愛』で見てください。本当は、自分探しにおいて本能を科学することは最も重要なことなので、他人任せにはしたくないんですが。でも、僕たちも急がなければ、彼の方が先に頂上までたどり着いてしまいそうです。できれば同時に到着したいですからね。まだまだ、考えることはたくさんあります。先を急ぎましょう。

～世界を平和にしない愛～

NO.12 あなたへの一つの質問

あなたへの一つの質問

今日は趣向を変えて、あなたに一つの質問をしてみます。

あなたが何歳の方がわかりませんが、あなたにお子さんがいらっしゃって、その子をとても愛していらっしゃるとします。さて、今、あなたのお子さんとその友達が海で溺れていて、あなたのボートには一人しか乗せられないとします。その時あなたは、どちらの子供を助けますか？

僕は以前、このメルマガの読者のMさん(45歳・女性)に同じ質問をしました。Mさんは、僕のメルマガの創刊号を読んでくださって「愛の本質は差別」という言葉に疑問を抱かれていたからです。僕は、上のような質問をすることで「やはり、愛の本質は差別である」と証明できそうな気がしたからです。愛にはその対象が存在し、対象を認識する行為が含まれている限り、差別と無関係ではあり得ないからです。

ちなみに、差別という言葉は辞書で引くと、

(1)ある基準に基づいて、差をつけて区別すること。扱いに違いをつけること。

(2)偏見や先入観などをもとに、特定の人々に対して不利益・不平等な扱いをすること。また、その扱い、

とあります。

僕は主に、この場合の(1)の意味で使っています。例えば、あなたが俳優の〇〇さんを好きだということも、それは他の人と区別して、扱いに違いをつけているわけですから、僕は差別と呼んでいます。ただ、ある人を好きだということは、無意識で他の人に不利益・不平等な扱いをしてしまっていることもまた事実です。だから、(2)の意味ももちろん含んでいます。

また、よく、差別は良くないが区別すること自体は悪いことではない、などとお茶を濁しているものを見かけますが、しかし、人間の営みにおいて感情の伴わない区別行為など存在するのでしょうか？ 区別すると、自ずと、扱いに違いをつける行為が生じるはずですから、区別すること自体は悪いことではないなどと言われると、なんだか、うまく丸め込まれているような気がしてしまうのですが。

こんなのが、僕が「差別」という言葉に持っているイメージです。人種差別などと使われるような、特に非道で残虐なイメージを伴って使っているわけではありません。

さて、ボートの話ですが、あなたはお子さんを愛しているわけですから、当然、お子さんの方を助けようとするはずですから。愛すること、お子さんとその友達の違いを認識し、区別する能力があったわけですから。これは創刊号でゾウアザラシを例に説明したように、動物が種の保存のために必要な能力の一つです(もう一度読んでみてください)。でも、愛は、お子さんを助けることでその友達に対して不利益・不平等な扱いをしてしまったわけですから。もし、そこに愛がなければ、あなたは近くにいた子をボートに乗せて、遠くにいた子を助けられなかったというだけの話で終わっていたでしょう。

この質問に対する、Mさんの回答をご紹介します。

> その事は、今まで私自身も考えた事はありました。その時、自分の子どもを助けたら、本能的な愛でしょう。自分の種の保存のため、自分のかけがえのない子を生きのびさせたいという。その結果、自分の子を助けて、友達を見殺しにしたと非難されて、一生後悔するでしょう。友達を助ければ、人は、非難せず誉めるかもしれません。でも、とっさのときにそういうことを計算するとしたら、それは、自分が非難されないためにはどうするかと考える自己愛でしょう。自己愛のために自分の子どもを犠牲にしたら、そのことでやはり一生後悔するでしょう。たぶん、こういういろんな思いが打算のように、心の中を駆け巡り、瞬時に、助けなければという愛は、純粹な人類愛ではなくなるのです。そこまで、考えが、たどり着いたとき、このことは、今考えていても無駄だと、考えるのを止めました。せめて、> そういう場面に出くわさなくていいように、いろいろな設定をするときに、気をつけようと思いました。

Mさんのような自己矛盾に悩む心優しき方に、「愛とは、自己を滅却して他人に尽くすものではなく、非常に利己的に働くもの」なんてことを言うのは、本当はとても嫌なんです。でも、みんながそのことに気づくと、例えば「自分の子供とその友達を助ける時、一人しか助けられないとしたらどちらを助けるか」という場合に、Mさんのような心優しき人が矛盾を感じずに行動ができると思いませんか？ 何故なら、瞬時にMさんのとったどちらかの行動に対して、誰一人として「あなたには愛がない」と非難する人がいなくなるからです。つまり、どちらもその場においての瞬時の愛を実践したわけですから。その時の行動を、本人が後で後悔するかどうかはまた別の問題です。

愛という言葉は本質を見えにくくして美化する働きがあるだけでなく、その人の行動も制約しています。こんな行動をとったら愛が足りないと思われやしないか、という強迫観念でその人の行動を規制します。それは多くの場合、いい行動をする役に立つのですが、心優しき人

を自己矛盾で苦しめてしまうのは、やっぱり、愛という言葉が誰も矛盾を抱えたまま使っているからではないでしょうか。Mさんとの何回かのやり取りで、次のようなことを教えていただきました。

> 突き詰めていけば、自己満足以外の愛はないのかも知れないんだけど、「自己だけ満足」じゃないならいいのかなと思います。

この言葉、なかなかいいと思います。

以前、車椅子で階段を降りようとしているおじさんがいたので、周囲にいた何人かで手伝ってあげました。僕は他人が喜ぶことをすることに、とても自己満足を感じてしまう人間なんです。例えば肩が凝った人がいれば揉んであげたくてしょうがなくなる。それが自己満足以外の何物でもない証拠は、相手がそれを拒むと、つまらないなーっていう気持ちになってしまうからです(笑)。それはちょっと自己嫌悪もありました。なぜなら、他人のためにやっているようでも、実は自分のためというのがあるからです。でも、その時、車椅子のおじさんが感謝してくれたのは、助かったと思ってくれたからでしょう。その時僕は、自己満足以外の何かもしていたのですね。それでお互いに幸せなら問題はないわけですよ。

これからは、はっきりと「僕は、自己満足のために手伝ってあげました」と言える世の中になったらいいと思います。愛などという言葉を使うよりよっぽど矛盾がなくていいです。別に「お手伝いさせていただいた」などとへつらう？こともなく、堂々とするのです。(つづく)

今回のテーマは「犬と人間の良い関係」です。

編集後記

どこかのテレビ局で「愛は地球を救う」というような番組を作って、寄付を募ったりしていますが、それは「自己満足は地球を救う」と言い換えてくれた方がいいと思います。その方が、心優しきゆえに、寄付したことで自分の中に沸き起こってしまう矛盾で苦しむこともなくなり、他人からも「偽善者！」という陰口を叩かれることもなくなります。矛盾で苦しまなければならなかったのは、愛という言葉そのものが矛盾をはらんでいるからなのです。

ところで、愛は自己満足である、って言葉でこのメルマガの結論が出てしまったわけではありません。今日は、ちょっとした寄り道でした。Mさん、ありがとうございました。

%%%

自分探しの旅 with マーキー

NO.13 どこが感じているの？

%%%

どこが感じているの？

大脳新皮質が右脳と左脳に分かれていて、それぞれ異なった働きをしているということは、ほとんどの人が知っていると思います。右脳と左脳に関する本だけでも何十冊も出てるんじゃないかなあ？あるいは、この大脳新皮質には、五感(視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚)に対応する部分(視覚野、聴覚野、体性感覚野、味覚野、嗅覚野)があることもほとんどの人が知っていると思います。だから、このメルマガではそんなことは省略します。忘れちゃってる人や、詳しく知りたい人は、わかりやすく解説した本がたくさん出ているので自分で調べてみてください。絶対おもしろいですよ。

ところで、僕たちは、映画を見て感動したり、恋人の声を聞いて嬉しくなったり、^{にが}苦いものを食べて顔をしかめたり、といった反応をしているわけですが、それは目が感動したり、耳が嬉しくなったり、舌が苦くなったりしているわけではないですよ。では、どこが感じているのでしょうか？

五感について調べていくと、ある共通点があるのがわかります。そのことを考えることで答えが得られるかもしれません。共通点の一つ目は「まず、外界から何らかの刺激を受け取る」ということです。

目が受け取る刺激は、光の粒子です。

耳が受け取る刺激は、空気の振動です。

皮膚が受け取る刺激は、何かが触れる感覚です。

舌が受け取る刺激は、食べ物の中に含まれる化学物質です。

鼻が受け取る刺激も、匂いの分子、つまり空気中の化学物質です。

二つ目の共通点は、それらの刺激に対して反応する細胞がそれぞれの器官に存在している点です。例えば目は、網膜に視細胞があって、光の波長(色)にだけ反応する細胞や明暗にだけ反応する細胞などがあります。

耳では、空気の振動が水(蝸牛に満たされているリンパ液)の振動に換えられ、その水の振動が、音の高さに反応する有毛細胞、音色に反応する有毛細胞などに刺激を伝えます。

皮膚は、表皮の細胞が変形を受けると、軽く押された感覚、引っ張られる感覚、毛が傾く感覚、温度の感覚、のそれぞれに反応する細胞があります。

舌には、唾液に溶け込んだ味成分の情報を受け取る味蕾^{みらい}という細胞があり、その中の味細胞がそれぞれの味に反応しているわけです。

鼻は、その奥の方は常に粘液で満たされていて、匂いの分子がこの粘液と溶け込み、それぞれの匂いの分子に反応する嗅細胞に刺激を伝えます。

さて、三つ目の共通点です。これらの特定の反応をする細胞に伝わった刺激は、それぞれ電気信号という刺激に変えられ、最終的には脳に到達し、そこで過去の記憶などを刺激し、それらと反応し合って感情を喚起したりしたものを、僕たちは色や明るさや、音や温度や味や匂いなどを知覚したと呼んでいるわけです。そして、そして、これらの刺激や反応を作り出しているものは全て、そう、クォークやレプトンなどといった素粒子がくっついていくうちに、できたものでしたね。

さて、今日のテーマ「どこが感じているの？」の答えは、。そうです。実際に痛みを感じたり、辛さを感じたりしているのは、脳だったわけです。例えば、指を怪我して痛いのは、それは脳の体性感覚野の指に対応する部分が反応していたわけです。その証拠に、脳の体性感覚野の指に対応する部分を刺激すると、指が痛いと感じます。また、もし右腕がなくても、体性感覚野の右腕に対応している部分を刺激すると、ないはずの右腕が痛く感じてしまいます。

今日は、この体性感覚野のことで、ちょっと興味深い実験をしてみたいと思います。まず、先の尖った鉛筆を二本束ねて持ってください。目をつむって、先端の尖った部分を左腕のどこかに押し当ててみてください。何本だかわかりますか？ きっと、わからないと思います。次に、くちびるに当ててみてください。どうですか、目をつむっていてもはっきりと二本だとわかるでしょう!? 指先ではどうですか？ これも二本だとわかるはずですよ。

どうして腕は鈍感かと言うと、脳の中にある体性感覚野の中の、くちびるや指先に相当する部分の神経細胞の数が、腕よりもずっと多いからです。これはカナダの脳外科医ペンフィールドさんが発見したものです。ペンフィールドのマップという、人間の全身を体性感覚野の面積に置き換えた奇怪なものを見た人もいます(注: ペンフィールドのマップは、他に運動野のマップもあります) 脳って本当に面白いですね。

あっ、ちょ、ちょっと待って！ ここで閉じないで下さい！ 僕のメルマガがここで終わるわけがありません。なぜって、このままじゃ調べたことを確認しただけですもの。そんなもの、他の本でもやってるし、もっと細かく説明しています。僕は今日、それぞれの刺激に対して、それぞれに反応する細胞が存在し、その反応に対応する部分が脳に局在していると書きました。でも、本当に言いたかったことは、それぞれの刺激に反応している細胞が、それ以外の刺激に対しては反応していないのかどうか？ ということなのです。

今ちょっと禅問答のような質問を君に投げかけます。目は何のためにあるのでしょうか？ 物を見るため、と答えた君、ブーッです。目は物を見るためにあるものではありません。では、何のためにあるのでしょうか？

何のためでもありません。

目的はないということです。

ただ、クォークやレプトンがどんどんくっついていくうちに、たまたま生まれたある現象に対して、人間が「物を見るために目がある」と結論づけただけなのです。

目のそれぞれの細胞は、他の刺激にもたくさんたくさん反応しているはずですよ。ただそれが見るという役には立っていないのです。人間は、自分たちにあまり役に立っていないものを軽視してしまう癖があります。それぞれの細胞が、人間が自分の役に立たないからという理由で見落としている反応をたくさんしているに違いありません。そのように考える根拠は、細胞が何かの刺激を受けて反応することには、何の目的もないからです。そこに目的を見いだそうとするのは、人間の営みです。

では、もう一つ例を挙げてみます。皮膚には、人間にとってもう一つ大切な反応をする細胞があるとされています。それは紫外線に対して反応する細胞です。普通は、紫外線によってメラノサイト(色素細胞)が刺激され、大量のメラニンが作られ、有害な紫外線から皮膚の細胞を守っていると考えられています。メラノサイト様様というわけです。このように解釈する人がいるくせに、誰一人としてメラノサイトは肌にシミを作る働きをしてくれているなどと答えません。これは、人間が自分の役に立つ働きに対してのみ目的に適った正常な働きと見なし、役に立たない働きを軽視したり異常と見なす身勝手な解釈の一例です。それに、目的を持った現象というのは、自然界の成り立ち(創刊号から順を追って見てきました)から考えると起こり得るはずがありません。それではどのように解釈したらいいのでしょうか？

クォークやレプトンがどんどんくっついていくうちに、たまたま細胞という自己増殖するものが生まれ、それがくっついて大型の生物が作られ、その生物の中でたまたまメラノサイトを持ったものが有害な紫外線から皮膚を守り、生存をたまたま優位にしたので、以後その遺伝子を持つ種が繁栄した、ということです。

メラノサイトは、決して紫外線から肌を守るためという目的を持って反応しているわけではありません。まして、やまんばメークのゴキヤルのためという目的を持った反応でもないとも言えるまでもありません。それもこれも、人間の想像力が勝手に作り上げている「目的」に過ぎないのです。その証拠に、大腸の中にだってメラノサイトは存在していて、まれに腸の壁にシミを作っているそうです。人間はそのことにどのような目的を考え出すのでしょうか？(つづく)

今回のテーマは「至福感の受容体」です。

編集後記

やはり、刺激 反応 刺激 反応、の原則はここでも成り立っています。実は、そのことを証明するために細かく見てきたわけで、それぞれの専門用語などは専門家が覚えればよいことです。だいたい、自然界には名前なんてなかったのに、専門家が勝手にいろいろなものを区別して、名前を付けたわけですからね。でも、専門の学者先生が細かく調べれば調べるほど、この刺激 反応 刺激 反応、の原則が正しいことを証明してくれることになりそうです。科学は限りなく次の言葉の証明に近づこうとしています。

「このビッグバン宇宙で起こっている全ての現象は、刺激に対する反応の連鎖に過ぎない」

こんな簡単なことだったんです。こんな簡単なことだって、根気強く研究熱心な先生たちがいなければ、僕たちには証明すらできず、

単なる思い込みと言われてしまったでしょう。そのために、僕は難しい本をたくさん読む必要があったし、これからも読み続けます。お忙しい皆さんには、そのエキスだけをお伝えします。

ちなみに、今日書かなかった六番目の感覚、第六感ですが、これは経験や潜在的な意識に裏付けられた洞察力に基づいて、一瞬に閃く感覚のことだそうです。だから、当たる確率も高いけど、はずれることもよくあるわけです。当たった時だけよく覚えていて、私って靈感が強いよ！なんて自慢してるんですね。それが信念になるとちょっと病的かも？ 脳の働きとは、刺激 反応の連鎖によって作られている現象のこと、と言い換えることもできるから、思わぬ所で刺激が増幅し、それがスパークして、勝手な反応(思い込み)をしようと別に不思議でもないですよ。なぜって、脳にはオーケストラを統率するような指揮者がいるわけではないんですから。えっ、自我と言われるものが指揮者じゃないかって とんでもない！

~世界を平和にしない愛~

NO.13 犬と人間の良い関係

犬と人間の良い関係

動物には本能があります。本能とは、基本的な生命維持に関わることや行動を制御しているものです。それを我々がだまかに本能と呼んでいるわけです。

よく考えていただければわかると思いますが、人間の場合も、いくら理性が発達したとはいえ、ほとんど全ての行動が本能に支配されています。ノーベル賞を受賞した動物行動学者のコンラート・ローレンツ氏は、「人間にそなわっている真の本能的衝動は他の動物に比べて少ないどころか、むしろ多いのである」と言っています。また、広島大学教授の難波紘二氏は、「人間を動物と異なった何ものかとして、倫理道徳を説くのは非科学のお説教にすぎない。だからそれは空理空論である。人間を動物として生物学的、心理学的に説明するところから、倫理問題を解明する道が開けるのである」と言っています。

僕たち人間は、理性的な行動に見えても、実は深い部分で必ず本能的なものが動いています。そうして、やっかいなことに、人間の幸福感、満足感というのも、本能と連動して起こる感覚なのです。

* 甘えとは 本能の求める欲求を押し通そうとすること、あるいは本能が最も居心地がよく感じる状態を維持しようとする、ことです。そして、これが達成された時、人間は幸福感や満足感を得ることができます。

* 愛とは 甘えたい欲求と甘えを許すことができる心が出会った時に起こる感情、でしたね。愛が利己的に働くということをもっと強調して表現すると、「自分の甘えを許してくれる(満たしてくれる)対象に出会った時に、あるいは許してくれそうな対象に出会った時に、そのものに対して抱く感情」と言い換えられます。

愛を理性のように考える人がいますが、愛は感情であり、むしろ本能に近いものです。もし、それでも愛が理性の方に近いと感じる人は、本能に近いはずの愛を、理性が都合よく感動的に表現した、その理論上の「愛」を見ているのです。つまり、今まで見てきたように、たとえ愛が多くの人を傷つけていても、人間は愛がなければ幸福感や満足感を持って生きられないものです。だとしたら、理性の力を借りて、それが良いものであり必要なものであるように理由づける必要があるからです。

さて、今日は、人間の中の理性と本能について、次のようなたとえ話をしようと思います。

犬を飼ったことがある人はわかると思いますが、犬は、主従関係をはっきりさせておかないと、主人の言うことを聞かないものです。散歩に連れていっても、自分主導で先へ先へと引っ張って行こうとします。家の中の物をかじってポロポロにしてしまったり、ご主人様に吠えたり手に噛みつきたりもします。悲しいことに、目を合わせようともしてくれません。

だけど、ちゃんと主従関係を明白にした訓練をして、心を込めて接すれば、このようなことが全て解消されます。今まで目も合わせてくれなかったのに、嫌になるくらいべロべロ舐めてきます。人間は、自分の中に扱いにくい犬を飼っているようなものではないでしょうか。犬というのが人間の中に温存している「本能」です。主人というのは「理性」です。

ある日のこと、離れて暮らしている母が電話をしてきました。用件のついでに、自分の飼っている犬に、最近、ほとほと手を焼いていると話し出しました。ソファーをかじってポロポロにしてしまったり、絨毯におしっこをして汚してしまったり、自分たちのスリッパを持って行ってかじって駄目にしてしまう。絨毯を取り替えるにもお金がかかるので困っちゃうよ。というようなことを言いました。

そこで、僕はちょっとお節介かなと思ったのですが、出張指導もしてくれる近くの訓練士さんを紹介したのです。その訓練士さんは次のように言っています。

「良い犬とは、飼い主にとって都合の良い性格と習慣を持った犬のことです。犬の気持ちを思う余り過保護になるよりも、飼い主本位で自信を持って接する事が、良い犬に育て、最終的にはお互いに幸せになれるコツなのです」

「これから十数年間に暮らしていく家族ですから、もう一度犬の性質を一から勉強し、可愛い愛犬への理解を深め、信頼関係を築いていきましょう」

含蓄のある言葉だと思いませんか？ 僕たちが、自分の中に住んでいる扱いにくい犬と共存し、「幸せになれるコツ」は、その犬の性質を一から勉強し理解を深めることから始まるのです。僕たちは人間として生きる以上、あくまでも理性が主で本能が従でなければなりません。主従関係を明白にした訓練によって、人間と犬が良い関係を築き上げることができるように、僕たちは人間として生きる以上、この主従関係を作り上げて、より良い生き方をする必要があると思います。

ところで、母親は僕のアドバイスに礼は言ったものの、その後もおしっこで絨毯を汚してしまう犬と生活を続けました。僕もそれ以上は強く説得できず、できることは黙って愚痴を聞いてあげるだけででした。何が、母親の心を頑なにしているのでしょうか？問題は、訓練士の指導を受けることを自分で選択したわけではない、ということです。母親の性格をよく知っている僕は次のように推測します。口には出しませんが、長いこと生きてきた彼女には自分の人生に対する密かな誇りと驕りがあります。でも、僕のお節介は、母親には「あなたのしつけに重大な問題があった」と責めているように感じるのでしょうか。それはつまり、自分の人生を根本から否定されているようにも感じるのです。

確かにしつけに問題があったかもしれない。でも、長いこと喜びも悲しみも苦しみも（って大げさだけど）この犬と共にしてきたのに、それを何にも知らないあんなんかに否定されたくないわよ、って気持ちになるのではないのでしょうか？ そんな批判を受け入れるくらいなら、犬に絨毯を汚されてもそのつど拭き取って、消臭剤を散布しながら生きることを受け入れた方がまだましだね、と意固地になるのではないのでしょうか？ 電話での愚痴は、「でも、うちの犬が一番可愛い」という自慢話でいつも終わります。

どうでしょうか？ それが多くの人々の生き方ではないのでしょうか？ 自分の中に扱いにくい犬がいることには気づいていても、そのことを見ないふりをして、悪く言えばごまかして一生を送ろうとしています。自分の中に悪さをする犬がいることを認めることは、今までその犬と共に生きてきた自分を根底から否定するようで耐えられないのです。そのため、多くの人々が犬に自分を合わせて生きています。言い換えると、理性は、自分の中の本能を理由づけ（合理化）するための道具になっているのです。

僕の母親のように愚痴は言うくせに自分の本能をしっかりと見つめようとはせず、最後には「でも、こんな自分が人間らしくてかわいいよ」って誉めてあげて（言いくるめて？）終わるような気がします。それでは、家の中がめっちゃめっちゃなまなまのと同じで、永遠に心の中も幸せにはなりません。そして、永遠に世界が平和になりません。あなたは、本当の自分を見つめることから目をそらさないでください！（つづく）

今回は「悪が生まれた理由」というテーマで書くつもりでしたが、何人かの読者の方からメールをいただいて、いろいろと考えることがありました。考えたり、本を読んだりしているうちに「マザー・テレサの愛」について、どうしても書いておかなければならないと思うようになりましたので、それについて書きます。

メールを下さった方、この場をお借りしてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

編集後記

その数ヶ月後、母親からまた電話がありました。取り敢えず絨毯はやめてフローリングにする、と決断したようです。（笑）

以前、NHKの「真剣10代しゃべり場」を見ていたら、「他人の才能に嫉妬したり、素直に誉めてあげられない自分がイヤだ」と悩む女の子がいました。ゲストで出演していた作家の鷺沢萌女史が、「人間らしく生きたいんだよね」と言ったのに対して「ええーっ、人間らしくって言うんだったら、私なんかなおさらグチグチ言っちゃうよおー」という反応をした子が数人いて驚きました。みなさん、人間らしさってなんでしょう？

僕は、人間を脳の次元で捕らえます。もし、大脳新皮質の活用が不完全なら、つまり、より本能に近い生き方をするなら、それは人間的ではないと考えたいのです。たぶん、「ええーっ、人間らしくって言うんだったら」と答えた子は、人間らしさという言葉から、生き生きとしたもの、という連想をしたのではないのでしょうか？ 泣いたり笑ったり、飛んだり跳ねたり、時には殴りあいの喧嘩をしたりそれが人間らしさのイメージなのでしょう。確かに、あんまり外で遊ばずに家にももって勉強ばかりしている子や、規則に縛られていることにもおとなしく耐えていたり、自分の感情を抑えたり、何かに対して無感動な子は人間らしいとは言えないかもしれません。

鷺沢女史は、人間らしさについて次のような意味のことを述べておられました。「野生の動物たちはより強い子孫を残そうとしてオス同士に戦わせ、メスは勝ったオスと交尾をする。我々が、連れ合いを選択する場合、たとえば、喧嘩が強いとか、いい大学出身とか、というのを判断基準にしたり、あるいは他人に勝とうとしたりすることって、野生の動物の競争とよく似ている。人間らしく生きるということは、それを乗り越えたところにあるのではないだろうか」

僕は、鷺沢女史に全般的に同感なのです。人間的かどうかというのは、本能を理性がコントロールできるかどうかで判断したいと思えます。そのためには、人間の中にも温存している本能（動物の脳）のことを体系的に研究し、よく理解する必要があります。

先程の「あんまり外で遊ばずに家にももって勉強ばかりしている子や、規則に縛られていることにもおとなしく耐えていたり、自分の感情を抑えたり、何かに対して無感動な子」というのも、本能のコントロールが下手なんだと思います。

「コントロール」とは決して抑えつけることではありません。

%%%

自分探しの旅 with マーキー

NO.14 至福感の受容体

%%%

至福感の受容体

臨死体験者の誰もが見てきたと語る、お花畑のような光景というのは、脳に血液が行かなくなった状態のときに脳内にたまる炭酸ガスが、大脳新皮質の視覚野に影響を与えて見る幻覚ではないかと考えられています。また、そこで出会う人物や物は文化的な影響が強く、育った国や信仰する宗教によっても異なると言われているから、やっぱりその人の潜在的記憶が作り上げている幻覚に過ぎないのでしょうかね。

海外では三途の川を見たという事例はなく、城壁やその上に神々しい人が立っていたりしています。でも、文化に関係なく多くの人に共

通のものもあります。それは、「深い至福感に包まれた」と語っていることです。

近年、脳の神経細胞にマリファナの受容体が見つかりました。人間は何故、このマリファナの受容体を持っているのでしょうか？ だって、人間がマリファナを体内に入れるなんてことは、通常ではあり得ないことですよね。

浜松医科大学教授の高田明和^{あきかず}さんは、僕たちの遠い祖先、常に死と隣り合わせの苛酷な自然環境を生き残ってきたのは、不安をあまり感じない楽観的な種族だったに違いない、と言っています。言い換えると、快感をもたらす物質の受容体を体内に持つものが、進化の過程で勝利をおさめてきた、その物質がたまたまマリファナの構造に似ていただけのことじゃないか、ということです。

NO.11で、脳内での情報の伝達は、軸索内を電気が走り、シナプスで化学信号に切り替わると書いたけど、シナプスで伝えられる化学信号とは、結果的には僕たちに感情などを誘発させる化学物質のことで、それを受け取るための受容体が存在しています。

発見されたマリファナの受容体というのは、アナンダマイドという脳内物質の受容体ですが、これはマリファナと似た構造の物質です。だから、アナンダマイドの受容体はマリファナをアナンダマイドと勘違いして「ああ、なんだあ、まいどー」って感じで受け取ってしまうのですね。

前回と同じ言い回しをすると、クォークやレプトンがどんどんくっついていくうちに、たまたまある現象として快感をもたらす物質の受容体が生まれ、それがたまたま生存に有利に働き、種の繁栄をもたらしたのです。その受容体は別に目的を持っていたわけでもないから、たまたま似た構造をしているマリファナを受け入れてしまう、ということです。

さて、話を元に戻すと、臨死体験者の共通の体験、深い至福感、死という超不安の状況で、アナンダマイドを初め、セロトニン、エンドルフィン、エンケファリンといった快感をもたらす化学物質がいっせいに働くからではないか、と言えそうです。また、そのような状況の時に、幸せを感じるように進化してきたのが人間の脳ではないか、ということです。

今、うっかり進化という言葉を使っちゃったけど、進化という言葉はあまり適切ではありませんでした。変化し続けている状態を、人間は自分に都合よく「進化」と呼んじゃってるだけなんです。NO.12で見た、ワニの脳、ウマの脳、ヒトの脳だって、自然界から見たら進化ではなく変化しているだけです。人間は、自分がワニよりも偉いと思いたいから、進化なんて言葉を使っちゃうだけなんです。それでも、「いや、自然界には絶対に“進化”と言える現象が起きている」とおっしゃる学者先生がいらっしゃったらメールください。受けて立ちます(笑)。その時の僕のキーワードは、天動説と地動説です。君はどちらを支持します？ そんなもん、現代人は地動説を支持するに決まってるって？ 違いますよ！ 地球から見れば天が動いていて、天から見れば地球が動いているだけのことです。ただ、全ての天体の動きを説明するためには地動説が都合がいいということです。あくまでも、天体の動きを説明したかった人間の都合が必要とした説に過ぎないわけです。宇宙のどこを探しても、天動説さんも地動説さんもいませんよ。そんなことで、一々死刑にされたんじゃないやしませんよね。それと、進化とどう関係があるかって？ その答えは、メールで。(逃)

もう一度、先週見てきたことの確認をしておきます。先週、それぞれの刺激に対して、それぞれに反応する細胞があると書きました。例えば、目には色(波長)に反応する細胞と明暗に反応する細胞があると。でも、注意しなくてはいけない点は、その刺激のためにできた細胞ではないということです。ある刺激を受けやすくするためにできた細胞ではなく、たまたまそれがある刺激に対して最も強く反応するものだったということです。しかも、もっと注意しなくてはいけない点があります。僕たちは、目とは物を見るためのものという固定観念があります。だから、その細胞を色に反応しているとか明暗に反応していると解釈しているだけなのです。要するに、人間の都合で、理由づけをしているに過ぎないのです。

それが間違いというわけではなく、あくまでも自分たちの都合上の解釈、ということ忘れてはいけないということです。これは、とてもとてもとても重要なことです。(つづく)

今回のテーマは「不確かな脳」です。

編集後記

唐突ですが、君に質問します。生命というのはどこにあるのでしょうか？ 僕たちは生きているので確かに生命はあります。うん、それは間違いなさそうです。だって、生きているその原動力のことを生命と名づけたわけですから。では、残酷のようですが右足を取ったらどうでしょう。左足を取ったら？ 右手を取ったら？ まだ生命はあります。では、それをどんどん分解して細胞になり、それをもっと分解して陽子や電子になると、そこには生命はありません。一体、生命とはどこにあるのでしょうか？

脳ですか？ 脳だけ単体で取り出してもそこには心がないように、生命は単体では存在しません。そんな理由から、「やっぱり生命とは科学では説明できない、要するに唯物論では決して説明しきれないものがあるのかもしれない」と説明している科学の本がありました。

僕はそれを書いた科学者は、科学者と呼ばれるにはあまりにも諦めが早過ぎる人だと思います。

確かに陽子や電子には生命はありません。それは以前書いたけど、レゴの一つ一つの部品に過ぎないからです。でも、レゴが組み合わさって風車になれば、それは風を受けて回転するという今までになかった性質を獲得します。生命というのは、陽子や電子が組み合わされて獲得された一つの現象に過ぎないのです。そうやって生まれた生命を、どのように過大評価し意味づけをしようと、それはやっぱり人間の都合に過ぎないんじゃないでしょうか。それがわかっているけど、人間は「生」というものに、他とは違う何らかの意味を見出したいとする、どこまでも傲慢な存在のようです。



出典：CEC、IPA

マザー・テレサの愛

愛という言葉聞いて、マザー・テレサのことを思い浮かべる人も多いと思います。題名に彼女の名前が入った本を開くと、そこは例外なく「愛」という言葉で溢れているに違いありません。

「マザー・テレサ(本名アグネス・ゴンジャ・ボワジュ)は1910年8月27日、現マケドニア共和国・スコピエのアルバニア人商家に生まれました。1928年9月に18歳でアイルランドのロレット修道会の修道女となり、教会の派遣事業でインドに渡りました。カルカッタにあるロレット修道会の附属女子高校で歴史や地理などを約20年間教え、学校長にもなりました。1946年9月に“神の声”を聞き、貧しい人々への奉仕を決意します。そして、1950年に『神の愛の宣教会』(ミシヨナリーズ・オブ・チャリティー)を設立し、52年には、『死を待つ人の家』を開設します。『愛は平等だ』と唱え、社会の底辺で暮らす人たちに教育や医療を施しました」(青春出版社『マザー・テレサの愛という仕事』あとがきより)

僕は現代科学という偏見に基づいて、世界が平和になるための偏見を確立しようとしています。彼女は宗教という偏見に基づいて世界の平和を実現しようしました。まず、その点が大いに違います。

宗教というのは非科学的ではあっても、いや、非科学的であるからこそ多くの人を引きつけます。それはまるで惚れぐすりの効果と言ってもいいほどです。彼女の言葉には、人を感動させる力があります。それを真実と呼ぶ人もいます。確かに、ある宗教の偏見に基づいた真実です。真実は偏見の数ほど存在します。例えば、現代科学という偏見に基づいた真実とは、それは自然界の法則のことです。

彼女は、強い信念(信仰)を持った人だから、他の人が目をそむけたり嫌がるようなことを、迷うことなく実践することができたのでしょう。信仰を持てる環境にいた彼女を、羨ましく思います。ただ、彼女の行動を見聞きして「愛とは、決して見返りを求めないで相手に尽くすこと。与え続けること」と勘違いしている方々に、聞いて欲しいことがあります。

僕はこのメルマガNO.7で神に対する愛を次のように規定しました。

神に対する愛 現世において甘えを許されない(満たされない)自分を、神を愛するという行為の見返りとして、慰めてもらおうとする感情。でも、本当は神様は自分の心(=頭)の中にいるので、言い換えると自分で自分を慰めているということ。

マザーの心(=頭)の中には、常に神がいました。自分の満たされない甘えに対して常に慰めてくれる方がおられたので、自己犠牲は苦にならないのです。むしろ自己を他人に捧げれば捧げるほど神は誉めてくれる(=自分を自分で誉める)という図式ができあがっています。世の中に、これほど大きな見返りはあるでしょうか!? その証拠に、シスターたちは一様に言っています。

「私が与えたものより、私ははるかに大きなものを与えられました」

それが宗教の偉大さです。宗教は無意識に、僕たちに善い行いをさせ、僕たちを医者でも救えない苦しみから救います。だけど、たとえ宗教がどんなに偉大であっても、世界中に何百、あるいは何千という宗教があるうちは、世界を平和にすることは不可能です。なぜなら、自分の宗教を信じれば信じるほど、その素晴らしさを主張したくなります。場合によっては、平和になるどころか、喧嘩になります。

それに、宗教の「惚れぐすり」の成分は、現代科学によって一つ一つ解明されてしまいました。もう僕たちは、特定の宗教、つまり今までの偉大な偏見では生きていけない時代に入っているのです。

以前、「宗教とは何か」とかというような本を読みました。そこには、確か、「真理という円筒形を真横に切ると丸になり、斜めに切ると楕円になり、縦に切ると長方形になる。同じ物なのに切り口が違っただけで違うものに見えてしまう」というようなことが書いてありました。要するに、この地球上にたくさんの宗教が存在するけど、実は、真理を違う切り口から眺めているに過ぎないという意味です。だから互いにいがみ合ってはいけないというようなことが書いてあったように記憶しています。なかなか含蓄のある言葉だと思います。

だけど逆に言えば、どの宗教も、円筒形の形をした真理を見ていないということも言えるわけです。真理が象だとして、目が見えない人が尻尾を触って「象というのは細い蛇のような形をした動物だ」と言っているのと同じだからです。

真理が円筒形であることを感じ始めている僕たちは、いつまでも、丸や楕円や長方形や細長い形にこだわっている場合ではないと思います。環境問題も災害も医療も、あるいは資源やエネルギーや情報や交通も、あらゆる課題が地球規模に拡大した現代、それを越える宇宙規模の現代科学という偏見に基づいた真実を獲得しなければ、生きていくのが困難な時代に入っていると感じています。

僕は高校生の頃、ある店の前を通りかかった時、何かに呼び止められたような気がして足を止めました。店先には、星座をかたどったペンダントが並べられていたのです。僕にとっては高価な品で、2000円くらいしていたと思います。何日もその店の前を素通りする日が続き、自分の星座は幸運をもたらす、というような言葉をどこかで聞いていたせいもあり、また値段が高いのがご利益がある証拠のように思え、ある日、勇気を振り絞ってついに自分の星座のペンダントを購入しました。

その日から毎日、洋服の下に隠れて誰にも見られることのないペンダントをして過ごしたのですが、すると、どうでしょうか、不思議なことにそのペンダントをしている間は、自分が何かに守られているような気持ちに包まれているのです。ペンダントをつけることを忘れた日は、なぜか居心地の悪い気持ちになり、自分の身に悪いことが起こると、それをペンダントを付け忘れたせいになりました。

宗教の最大の功績は、僕は「非科学的思い込み」だと思います。それは、僕のペンダントに対する思い込みと同じように、ありはしない

物を信じることによって脳内に起こる特殊な前向きな効果です。しかし、宗教の最大の罪もまた、その「非科学的思い込み」にありました。なぜなら、非科学的思い込みとは「嘘」のことで、嘘を信じ込ませるといことは、違う言い方をすれば詐欺に当たります。ただ、それが個人的利益を得るために他人を騙す詐欺ではなく、人に善い行いをさせるためとか、民族をまとめるためとか、多くの人の心を癒すための詐欺だから、誰にも告訴されずにすんでいるわけです。まれに本当に告訴される宗教もあります。

僕は、残念なことに、非科学的思い込みにどっぷりとつかったマザーの言動に、数々の矛盾を発見してしまいます。だけど、彼女の信仰の大きさを前にすると、僕は口をつぐむべきだと思います。

宗教とは“古い時代”の非科学的思い込みのことで、もし、僕が今でもペンダントの呪縛に縛られているなら、前向きな人生を生きることができたかもしれません、そして、きっとそのペンダントを周囲の人に勧めていたかもしれません。その結果、違う星座の人に自分と同じ水瓶座のペンダントを勧めるような過ちを犯していたかもしれません。僕のペンダントが、それを信じている僕にしか効果を発揮しないように、宗教もそれを信じる人ができない人には何の効果もないのです。現代を生きているあなた！あなたは、古い時代の思い込みを信じることができますか？小さい頃から洗脳されていればいざ知らず、僕には、今さらできません。それでも、僕たちには信じる「何か」が必要です！だから僕は、宗教に代わる何かを、時代の流れの中に求めたのです。(つづく)

今回のテーマは「悪が生まれた理由」です。

編集後記

マザーは、世界が平和になるために、一日たりとも休まずに祈り続け、貧しい人々、病気の人々の間を歩き続けました。僕の彼女に対する評価は、彼女の人生に対する批判ではなく、むしろ彼女の人生に贈る賛辞とと思ってくださったら嬉しいのですが。違う偏見ではあっても、真実を生きようとした同志としての。生きる時代や環境が違っただけなのです。

感動を与えてくださった彼女に対する恩返しとして、この命が尽きるまで、僕も一日たりとも休まず歩き続けようと思います。読んでくださっている方が、たとえ、あなた一人だけであったとしても。

%%%

自分探しの旅 with マーキー

NO.15 不確かな脳

%%%

不確かな脳

僕の父は、真亜基さんのお父さんと同じで、七年前に亡くなりました。創刊号からこのメルマガを読んでくださっている方は、僕が一体何者か、わかってくれると思うけど、僕は彼（徳永真亜基）が作ったある物語の中の主人公なのです。と言っても、彼にそれほどの想像力があつたわけでもなく、ほとんど彼の人生そのものを僕に移したようなキャラです。だから、僕の父が死んだ日も同じなのです。安易な奴でしょう!?

でも僕は実際に今ここに存在しています。なぜなら、彼をこの場所に引っ張り出して、日頃の鬱憤を叩きつけてやることだってできます。ただ、彼の脳が壊れちゃったら、そのときは僕も消滅しちゃいますけど。要するに、僕は彼の脳の一部に間借りして生きているようなものです。と言っても、悲しいですよ。こんな僕を憐れんでくれる必要なんて、ちっともありませんからねーだ。なぜって、みなさんだって、この僕の“在りよう”と大して変わらないんですから。

僕の父は、真亜基さんのお父さんと同じで、七年前に亡くなったんだけど、もし長生きをしていてアルツハイマーにでもなっていたら、ついさっき食べたご飯のことも忘れて、家族が自分を虐待していると怒り出しちゃっかな？自分がどこかに置き忘れてしまった物を、家族が取ったと思ひ込み文句を言ってくるかな？悲しいけど、自分のこともわからなくなり、鏡に写った自分の顔が誰なのか認識できずに、鏡の裏に誰かがいるのではないかと覗き込んだり（鏡現象）してしまったかな？もっと悲しいことに、僕が久しぶりに会いにいっても、「どちらさんでしたっけ？」なんて聞かれちゃっかな？

症状が進んで、自分という概念すらなくなってしまったとしても、その父を見て、誰一人として「この人は、もはやあなたの父親ではない」なんて言いませんよね。でも、その同一人物であるはずの父は、自分の顔も、自分の息子のことも他人と思っちゃうのです。不思議なことです。

アインシュタインさんを天才と評することには、誰一人として異論はないんだろうけど、もし彼がアルツハイマーになっても、誰一人として「それはアインシュタインではない」などと否定する人はいませんが、でも同一人物であるはずのアインシュタインさんは、自分が提唱した相対性理論を理解することすら困難になってしまうのです。この矛盾、一体、どのように理解したらいいのでしょうか。

アルツハイマーというのは痴呆という病気で、病気でない人がその人を見て、本人に間違いはないと言うなら、その方が正しいと君は思うだろうか？それは、とっても奇妙な理屈です。まず第一に、アルツハイマーを病気だと決めているのは、人間の都合です。そうでない状態を正常な状態と考えているわけですが、本当は、どちらも自然界から見たら正常な状態なのです。つまり、科学的に考えれば、脳内の神経細胞が自然界において適応している状態がアルツハイマーという現象を作り出しているだけの話なのです。第二に、自分のことを自分がそうでないかを決めるのは、他人にはできないことだからです。

確かに、本人であることを証明するかのよう、子供の時に作った怪我がそのまま身体のどこかに残っているかもしれません。でも、君が証明しているその人は、あなたにとっては他人であって、つまり、君は他人の存在を証明しているだけです。自分の存在を証明できるのは自分だけです。

ということかと言うと、例えば、君は子供の頃かわいい熊のぬいぐるみを母親から買ってもらったとします。毎日遊んでいるうちに鼻がポロッと取れてしまいました。君は泣きながらクレヨンでまあい鼻を描きこみました。20年経った今でも、なぜかその人形だけは捨てられなくて部屋の隅に置いてあります。それは確かに20年前の母親に買ってもらった、思い出のたくさん詰まったかわいい熊のぬいぐるみです。その証拠に鼻がクレヨンで描かれています。だから、君はそれを同一だと証明することができます。だからといって、当の熊が、それを同一の自分であると納得したことにはなりません。

ぬいぐるみに向かって、「あなたは今でも変わらず素敵よ。間違いなく私が愛したあのときのままの熊よ」と慰めても何にもなりません。自分の存在を主張できるのは自分だけですが、それをするための脳が熊にはないからです。もちろん、人形には自分であることを証明する必要ありません。それを必要とするのは、確固とした自分があると思いたい人間の願望だからです。その願望が自我という幻想を作り出して、それを君は見ているのです。

自分を証明している脳は、ある条件の下で自分と信じているものを自分と思い込んでいるだけなのです。他人がどんなに証明してくれたって、「自分」であると信じるものがなくなってしまったんなら、そしてその必要もなくなってしまったんなら、それは自分ではないということです。

さて、アインシュタインさんの中から立ち現れて、そして立ち消えてしまった相対性理論とは、一体何だったんでしょうか？ それは、このように考えるとわかりやすいと思います。脳というのは、個人の持ち物だと思っていたことが間違いだったのです。脳は個人の持ち物ではなく、この宇宙のあらゆるものがそうであるように、それを取り巻く環境によって作られている柔軟なものなのです（注：僕は環境という言葉に、遺伝も含めています）。そして、この世に起こる現象は、その脳が捉える限り全て幻想であるわけです。このように考えると、いろいろな疑問がスーッと解けていきます。

今まで、相対性理論は、天才的な脳を持つアインシュタインさんが考えたものだと思われていたけど、そうではなくて、彼を取り巻く環境が相対性理論という幻想を作っていたんですね。

脳が環境（自然界の物質の、刺激 反応の連鎖が作り出している現象）によって作られる柔軟なものであり、それが様々な幻想を見るものであるとすれば、彼の脳が、環境によってちょっとでも変化することによって、相対性理論という幻想もそこには存在しないということがあっても、少しもおかしくはないわけです。元々、彼の脳が見させられていた幻想だったわけですから。

僕の父の脳が環境によってちょっとでも変化することによって、彼には、僕が彼の息子であるという幻想も存在しなくなったとしても、少しもおかしくはないわけです。

君は、実は、今まで揺るぎない自分があると信じ込んでいただけかもしれない！と言われたら、どうしますか？ 実は、僕が今日言いたかったことは、そのことなのです。僕たちは、確固とした自分があるという幻想の中で生きています。でも、自然界に適応して存在している脳とは、環境によって作られているもので、環境に左右される不確かなものだったのです。不確かな脳が信じる僕たちの自我も、また不確かなものだと言えます。不確かな自我を、今まで確かなものと勘違いしていたということです。

自我とは、自分と区別される対象の存在を知り、「これが自分という存在である」と自分で思い込んでいるところのものです。アイデンティティーという言葉もあります。アイデンティティーとは、日本語で自我同一性と訳されますが、「時間・空間を異にしても同じであり続け、自己を自己として確信する自我の統一をもっていること」ですが、実はそのような自我が存在すると思っ込んでいただけなのです。

僕たちは、ひたすら不確かな脳に支配されていたわけですから、自我もアイデンティティーも、願望が見させる幻想に過ぎなかったわけです。（つづく）

今回のテーマは「何をどのように記憶するの？」です。

編集後記

ヒトラーさんに独裁的行動を取らせていた脳は、彼を取り巻く環境によって作られていたものだと考えると、責められるべき人はヒトラーさんだけではないという発見も引き出してくれます。

こういった目で周囲の人を見回してみると、いろいろな発見をします。例えば、人の考えをちっとも受け入れてくれない威張った上司も、実は彼を取り巻く環境によって作られている彼の脳が、彼にそのような行動を取らせていただけだったのです。彼の脳を取り巻く環境の中には、もちろん君もいます。君も一枚かんでいたわけです（笑）。なんか、今まで憎たらしいだけだった上司が、とてもかわいらしく思えてきませんか？ 明日、会社でその上司の怒鳴っている顔を見ながら、ニヤニヤしてはいけませんよ。

ところで、自分というものが不確かだったら、何を信じて生きていったらいいの？なんて悲観的に考えないで下さいね。僕は君を今まで見たこともない素晴らしい場所へお導きします、と約束したじゃないですか？

~世界を平和にしない愛~

NO.15 悪が生まれた理由

悪が生まれた理由

「悪」とは何でしょうか？ と聞かれたら、みなさんはどのように説明しますか？ 僕は、悪の根源は本能である、と答えます。『虚偽と邪悪の心理学・平気でうそをつく人たち』という本を書いたM・スコット・ペックという人は、「悪という字を英語の綴りで見ると evil であ

り、ちょうど生きる (live) の逆になっているように、生に対置するものである、だから悪とは、生きようとする力を阻むもの、肉体的な危害にかかわらず何らかの危害を加えるもののことだ」と、うまい言い回しをしています。また、河合隼雄氏は、『子どもと悪』という本の中で、悪とは「集団の秩序が破壊されること」と規定しています。人間は自己の存続のために、何らかの集団を作っていて、その集団を維持するためにはある種の規約が必要となり、それを破ることが悪となる、ということです。

でも、僕はこの両方とも賛成できません。

今日は、ベック氏に対する反論を書きます。まず、「生きようとする力」と聞いて、僕がすぐに思い浮かぶ言葉は「本能」です。それを阻もうとするものが悪というのなら「理性」も悪の一種になってしまいそうです。また、悪とは生と対置されるもの、と定義することはなかなかうがっているように感じます。しかし、悪が生と対置されるなら、生=善という公式が成り立ってしまいます。これが間違っていることは誰の目にも明らかです。むしろ、生=悪+善であるわけです。つまり、生の中に悪と善が未分化のまま渾然一体となっていたものを、人間が都合上分類しただけということです。

ところが、この答え方もあまり正確ではありません。本当は、自然界にはもともと、悪も善も渾然一体どころか存在すらしなかったのです。人間が勝手に作り上げた概念に過ぎないからです。

では、なぜ僕が本能を悪の根源だと考えるのか、ということを書きます。まず、本能イコール悪、と言っているのではなく、悪の根源と言っている点に注意してください。動物の行動を統御している本能というものは、もちろん悪とは無縁のものだと知っています。悪の根源という表現を使う意味は、本能はもともとは悪とは無縁のものだけど、人間が作り出した悪という概念から見たら、その原因になっていると言いたいだけだからです。

人間を動物から枝分かれさせた一番大きなものは、自我の芽生えだと思います。自我が芽生えたことにより、自分の生に対して善く作用するものと悪く作用するものを識別する能力が発達してきて、善悪の概念が固まってきて、そのことが理性(物事を論理的に思考し真偽・善悪を識別する能力)をますます発達させたのです。つまり、悪とは、ベック氏が言うような生と対置されるものではなくて、生の中に存在すらしていなかった悪と善を、人間が自分という基準を作ったことにより、分別するようになっただけです。

ベック氏は「生きようとする力を阻むものが悪である」と言っていますが、その言葉を聞いて「殺人」を思い浮かべる人も多いと思います。殺人は元々、悪ではなかったわけですが、自分が殺されたくないから他人を殺すことを悪と考えようというようなところから悪とされているわけです。このような考え方を相互主義と言います。

人間は社会というものを作って生活をしているので、その社会で、善悪の判断基準も違うのですが、ただ一つ共通しているものがあります。社会というものはみんなが自己中心的では成り立たない。だから、いろいろなものが、本能を極力抑制するように取り決められていきます。

動物は生まれた瞬間から競争の世界に入ります。例えば、同じ時期に卵から孵った小鳥の雛は、より多くの食物を親から貰おうと、できるだけ大きな口を開けるそうです。子犬は乳の出る乳首を奪い合い、この競争に負ければ発育が遅れ死ぬことにもなりかねません。

カッコウが他の鳥の巣に卵を産み、その鳥に自分の子供を育てさせるのは有名ですが、カッコウの雛には、驚くことに首の後ろに卵を乗せるための凹みがあるそうです。そして、卵から孵ったばかりのカッコウの雛は、誰に教わったわけでもないのに、他の鳥の卵をその凹みに乗せて全部巣の外に放り出してしまいます。遺伝子に記憶されている行動なのでしょう。たぶん、他の鳥の卵をより多く外に放り出せるカッコウほど生き延びる確率が高かったので、たまたま少し首の後ろが凹んでいたカッコウが生き延びる確率が高く、その遺伝子が繁栄したのでしょう。

このように動物は本能に基づいて行動をします。理性のない彼らには善も悪もなく、本能という自然界のメカニズムに従って、そうやって動いてきたのです。理性は自然界には不要のものだったので、僕は理性は自然界にとって唯一の反逆児として生まれたという言い方をします。だから、人間の理性は自然とは相容れず、以後、たくさん矛盾をはらむこととなります。そこから、人間としての葛藤が生まれてくることになってしまったわけです。

今回は、もう一つの(河合隼雄氏の)意見に対する反論を兼ねて、この悪の根源である本能をもう少し考えてみようと思います。(つづく)

今回のテーマは「それでも本能は必要？」です。

=====

今日は、付け加えることがあります。とても大切な問題を提起してくださっている、ベック氏の主張を取り上げさせていただきます。ちょっと長くなりますが、我慢してくださいね。

心理療法家であるM・スコット・ベックという方は、自らの診療経験から、世の中には「邪悪な人間」がいると考えるに至りました。彼の言う邪悪な人間の特徴とは、自分には欠点がないと思いつ込んでいて、異常に意志が強く、罪悪感や自責の念に耐えることを絶対的に拒否し、他者をスケープゴートにして責任を転嫁したり、対面や世間体のためには人並み以上の努力をし、他人に善人だと思われることを強く望み、自分に都合のよい隠微な嘘をつく、などの特徴が挙げられるということです。そして、人間の邪悪というものを、治療を要する病気の一つと見なすべきだと主張しています。医学的には、邪悪は「自己愛(ナルシズム)的人格障害」の一つとして分類できるのではないかと考えています。

邪悪というものを一つの病気とする考え方には利点もあります。今まで漠然としていた概念を、あるいは曖昧にごまかしていたものを、あるいは認めようとしなかったものを、邪悪という名称を与えることではっきりと意識して、それに対処していこうという姿勢が生まれる点です。でも、それが病気であるとして、一体誰がその治療にあたるのでしょうか？ 宗教家でしょうか？ それとも、倫理学者でしょうか？ それとも、ベック氏のような心理療法家でしょうか？ その人たちは、治療する側の人間だと自分で思っているだけで、単に自分の

邪悪に気づいていないだけなのです。

ベック氏は、邪悪な人間はなかなか自分の邪悪さを認めたがらないと言っていますが、邪悪な人間と健全な人間がいるのではなく、本能を温存させた動物であるところの人間は、すべからず邪悪を内包していると言えます。もちろん、治療にあたる人もそれに該当しそうです。だから、「邪悪な人間はなかなか自分の邪悪さを認めたがらない」という言葉は、「人間は、誰もが自分のありのままの姿をなかなか認めたがらない」と言い換えた方がいいようです。

治療にあたる人間に必要なとされる権威は、かつて、宗教が聖職者という特権階級に、人々を説教する喜び（欲求）を目覚めさせてしまったように、治療者に邪悪な欲望を満たす喜びを目覚めさせてしまうことになるでしょう。

ベック氏は、「将来的には邪悪な人間を特定できるような心理テストが開発されるだろう」と言っていますが、この世には完全なる邪悪な人間も完全なる健全な人間もないと言い切れます。邪悪な人間などどうして特定することができるでしょう。そのような想像をする点で、ベック氏の考えは間違えていることがわかります。そして、邪悪な人間を治療する人間など間違っても作ってはいけません。歴史の過ちは二度と繰り返してはいけません。必要なのは、各々が自分の本能というものを理解し、理性がそれをコントロールすることです。犬と人間（本能と理性）の良い関係を築き上げた時に、そこに幸福感というご褒美がもらえることが実感できれば、僕たちは人間としていい生き方ができるようになっていきそうです。そして、人が人を裁くのではなく、自分が幸せになることが社会が幸せになることと同次元でつながれば一番いいわけです。それは決して不可能なことではありません。（つづく）

編集後記

今日は、愛という言葉が出てこなかったのが、このメルマガのタイトルとは関係ないと思われるかもしれませんが、愛は感情であり、本能に属するものです。だから、本能を研究することで、愛とは何かということがもっとわかってきそうです。しばらく、本能について考えていきたいと思しますので、よろしくお付き合いください。

ところで、『虚偽と邪悪の心理学・平気でうそをつく人たち』の前書きに「この本は危険な本なので、慎重な配慮と愛でもって扱ってほしい」とありますが、著者の言う愛とは一体何でしょうか？ 「邪悪の治療は困難であろうが、悪は愛でもって封じ込めよう」とも言っていますが、その愛とは一体何でしょうか？

愛は解決にもならないどころか、むしろ邪悪を作り出しさえします。愛という言葉が安易に使われている本は、注意をする必要がありそうです。ベック氏は、「邪悪な人間が選ぶ見せかけの態度に共通して見られるのが愛を装うことである」と言っていますが、彼らは愛を装っているのではなく、装うために使われるものが愛そのものなのです。

このメルマガのNO.8に書いたように、愛は今では美しいイメージを持たされているものですから、なかなか重宝されているわけです。愛という言葉そのものも、常に邪悪をごまかすために便利に使われています。例えば、「この本は危険な本なので、慎重な配慮と愛でもって扱ってほしい」この無責任な言葉もその一つです。愛という言葉さえ使えば全てが丸く収まる、と考える典型です。ベック氏の書かれた本が邪悪だと言うわけではありませんが、自分の邪悪を棚に上げて書かれていらっしやるような気がするのです。僕は、自分の中の邪悪を知っているので、決して他人を裁くつもりはありません。裁かなければいけないのは、自分自身です！

ベックさん、今日のごめんなさいね。決してあなたを裁いているのではなく、あなたが、愛とは何かを知るための大切な問題を提起してくださっているのが、引用させていただきました。お許しください。

%%%

自分探しの旅 with マーキー

NO.16 何をどのように記憶するの？

%%%

何をどのように記憶するの？

今日は、僕たちが獲得した原則、刺激 反応 刺激 反応 の原則、に則って、人間の脳の最大の謎と思われる、記憶とは一体何なのかを考えてみます。まず初めに、もう一度、原則を確認しておきます。

今まで、科学が、試行錯誤の実験や注意深い観察を繰り返すことでつかんだ真理は、この宇宙のあらゆる現象は、ビッグバンから始まった、刺激 反応 刺激 反応、の連鎖によって作られた物質の、物理・化学的な作用によって起こる現象に過ぎないということでした（もちろん、ビッグバンという反応を引き起こすための刺激が、その前にもあったわけですが）。だから、「記憶」という現象も、ある物質の特性が作り出している、物理・化学的な作用によって起こるものに違いない、と考えることができそうです。

頭の中を整理しながら考えていきたいので、記憶というものを次の順序で考えてみます。

- 1、記憶とは何か？
- 2、何を記憶するか？
- 3、どのように記憶するか？

[1、記憶とは何か？]

難しい注文ですが、もしあなたの頭の中に記憶という能力（能力という言葉は、人間が自分たち生物に都合よく作った言葉なので、単に

作用とでも言った方がいいかも)がまったくなくなったと想像してみてください。過去の記憶も現在の記憶もなくなったと想像してみてください。何かを見たり聞いたり感じ取ったりすることができるのでしょうか。あらゆるものが自分の前をただ通り過ぎていだけなのではないでしょうか。記憶とは、恐らく、ものを理解するための背景を作っているのです。「記憶」のおかげで、私たちは物を「認識」し、自分を「意識」し、「意欲」を持って行動することができるのです。もちろん、これらの能力(いえ、作用)は、お互いに補い合って強化されていくものでもあるということは言うまでもありません。

さて、視点を変えて、**刺激 反応 刺激 反応** の原則から、記憶とは何かと考えると、それは筋肉の作用のような、刺激に対する一時的な化学反応であるはずはありません。そこには何か「刺激に対して、ある特定の化学反応のパターンが形成される」ものがある、と考えられそうです。その、形成された「ある特定の化学反応のパターン」を記憶と呼ぶ。とりあえず、こんな答え方でどうでしょうか？

[2、何を記憶するか？]

感覚器(目・耳・鼻・舌・皮膚など)から入ってきた情報は、脳の中の神経線維(ニューロン)を、次々と興奮させて進みます。つまり、**刺激 反応 刺激 反応** と突き進み、大脳にまで達し、そこが反応することを「対象を認知した」と呼んでいます。神経細胞を次々と興奮させて突き進む際に、それは神経回路の興奮のパターンとして蓄えられ、その興奮が終わっても再び情報が入ってきた時に、同じパターンで興奮するような変化がシナプス(ニューロンとニューロンの接続部)で起きています。要するに、これは、脳の中に興奮の痕跡が刻まれると言い換えられますが、「何を記憶するか？」の答えは、この「興奮の痕跡を記憶している」と言えそうです。

視覚に関する作用を例にあげて考えてみると、我々の脳には縦の線に反応する(感受する)神経、横の線に反応する神経、細長いものに反応する神経、丸いものに反応する神経、赤い色だけに反応する神経、黄色い色だけに反応する神経、とあるそうです。例えば黄色く細長いバナナを見て、その刺激に対して反応したパターン(組み合わせ)ができ、そのパターンが固着されるわけです。

なぜ固着されるのかって？ そんなもの理由はありません。

素粒子がくっついて原子となり、それがくっついて分子となり、それがいろいろな組み合わせでくっついていたりしているうちに生まれた物質が、たまたま授かった特性としか言いようがありません。自然界の法則の中に、元々そのような特性が生まれる要因があったのも事実です。こうして生まれたニューロンの特性が、こういうものだったというだけの話です。僕たちは、「バナナを記憶している」と言うよりも、「バナナを見たときの興奮(の痕跡)」を記憶していると言った方が正確のようです。

[3、どのように記憶するか？]

記憶を司っている部位を突き止めるには、脳を少しずつ削っていけばわかるはずですが。例えば、1953年にアメリカで、てんかんの治療のため脳の中の「海馬」と言われる部分を切除された患者がいました。すると、手術以前のことは克明に覚えているのに、手術後のことは何一つ覚えられなくなってしまったのです。このため、比較的近い時間起こった出来事の記憶は、海馬が引き受けているに違いない、と考えられるようになりました。

それで、その部位が、何をを使ってどのように記憶しているのか研究されました。これが、シナプスの伝達効率の長期増強(LTP)と言われるものです。海馬は情報が3種類の主要なニューロン(歯状回顆粒細胞、CA3錐体細胞、CA1錐体細胞)に次々と受け渡される構造をしています。このニューロン間のシナプスそれぞれにおいて、シナプス活動が高まると伝達効率が上昇し、効率の上昇が数時間から数日にわたって持続するという長期増強(LTP)が発見されました。

もっと簡単に説明します。

脳の神経細胞(ニューロン)というのは、ある刺激を受けると、その軸索の中を電気信号が流れ、その末端から化学物質を放出し、それが次のニューロンの受容部(レセプター)にキャッチされ、そのニューロンはまた同じようにして次のニューロンの受容部に刺激を引き渡していくということを、意味もなくただ延々と繰り返しています。このとき、繰り返し同じインパルスが来るとレセプターの数が増え、シナプスの感受性が高まります。このおかげでニューロンネットワークには、よりスムーズに情報が流れるようになります。

さらにニューロンは、軸索が伸びて新しいシナプスが生まれ、ネットワークを補強したり新しく作ったりもします。シナプス(ニューロンとニューロンの接続部)は、外から入ってくる刺激によってどんどん変化するものなのです。このことを、シナプスの可塑性(あるいは柔軟性)と学者の方々は表現しています。

今、さらに「ニューロンは、軸索が伸びて新しいシナプスが生まれ」と書きましたが、これも、ある刺激に対する反応が引き起こしている現象に過ぎないわけです。ニューロンの軸索の先端部は、その標的(受容体またはレセプター)に向かってアメーバが這うようにして伸びていきますが、別に意志をもって伸びているわけではありませんよ。これは、ニューロンと周囲のグリア細胞との間で情報のやり取りが行なわれ、ニューロン内では、新しい遺伝子が発現し、特定の酵素が働いてニューロンの骨格(といっても骨のようなものではない)が変化するためと考えられます。またその際に、方向性をガイドする「接着分子」や「神経栄養因子」と言われるものの存在も発見されています。これらの**刺激 反応**作用によって、ある標的に到達し結合(シナプス)します。

さて、記憶が単なる「ある特定の化学反応のパターン」を作ることであるなら、それは、人間にとって意味をなしません。それでは単に、配線が組まれたと言うだけのことです。記憶は再生され、意識や思考というものを作り出すから意味があるわけです。そこで、今回のテーマは「意識・思考」です。(つづく)

編集後記

ニューロンは、なぜか他の体細胞のように細胞分裂して増殖しません。どうしてかって？ そんなものに理由はありません。たまたま、**刺激 反応**の変化の過程で生まれてきた特性です。

あなたが友達100人の名前を覚えたとき、脳の中に100人分の名前を保存したニューロンのネットワークができています。もしもニューロンが「体細胞」のようにしょっちゅう分裂して増殖したら、せっかく覚えたネットワークがごちゃごちゃになって、「記憶」が混乱してしまいます。そこで、「ニューロンが体細胞のように増殖しないのは、記憶が混乱しないためです」と、ある科学者が説明している文章を見つ

けました。とんでもない間違いです。原因と結果がひっくり返っています。これを僕は「意思(意志)的解釈」と呼んでいます。人間にはあるとされている「意志」、つまり何かをしようとする目的を持った考えのようなものが、あたかも自然界にも働いていて、それでそういう現象が引き起こされているといった解釈の仕方、これは非常に身勝手な、人間の側に立った幼稚なものの考え方の一つです。しかも、本当は人間の「意志」と言われているものでさえ、いわゆる本人の意志ではないのです。科学が追いついていなかった時代の人が、「意志」なる言葉を作ってしまったというだけのことです。

記憶が混乱しないのは、たまたまニューロンが体細胞のように増殖しないからであって、記憶を保持するためにニューロンが意志をもって増殖しない道を選んだわけではありません。ところが、多くの科学者があらゆる状況で、このような非科学的な表現を使っています。

それはなぜでしょうか？

NO.9にも書きましたが、科学者は時々、自分の偏りをとんでもない非科学的な論理で埋め合わせしようとするところがあるように見受けられます。あまりにも、理系に傾きすぎると、その反動から無意識で文系的思考パターンで自己の偏りを修正しようとするようです。もう一つは、僕たちにわかりやすく説明するために擬人的手法を使うのです。でも、その擬人的手法が曲者なんです。科学がせつかくここまでたどり着いたのに、その人たちのお陰で、また神話の時代に逆戻りです。トホホ。

~世界を平和にしない愛~

NO.16 それでも本能は必要？

それでも本能は必要？

前回は、悪の根源は本能であると書きました。それでは、こんなものない方がいいのでしょうか？ それでも本能は必要なのでしょう。もし本能が悪の根源だからといって、僕たちから本能をほとんど取り除いてしまうとしたら、どんなにつまらない人生になるでしょう。男性は素敵な女性を見ても胸がときめかないし、第一、女性は着飾りもしなくなるだろうし、子供も産みたがらなくなるかもしれません。戦争はなくなるかもしれないけれど、スポーツにも興味が失せてやがてなくなってしまうかもしれません。

でも心配はご無用です。本能は悪の根源ではあるけれども、善の根源でもあります。

* * *

前回ご紹介させていただいたM・スコット・ペック氏と同じ、心理療法家でもある河合隼雄氏が、『子どもと悪』という本の中で、悪とは「**集団の秩序が破壊されること**」と規定しています。人間は自己の存続のために、何らかの集団を作っていて、その集団を維持するためにはある種の規約が必要となり、それを破ることが悪となる、ということです。

その定義で間違いはないのですが、それだと、その集団ごとに悪の概念が違うということになってしまいます。例えば営利を目的としている集団にとっては、自分たちに利益をもたらさないことが「悪」となります。僕は短い期間でしかけど営業を経験したことがあります。そこでは「**お金こそ正義だ!**」といった考え方を押しつけられました。自分たちの秩序を守るためには殺人を犯す集団もあります。だから、もっと普遍的な悪の概念を考える必要があると思うのです。

僕が考える悪とは、先週も書いたように、本能(動物としての生まれつき持っている性質や能力)と関係があります。「本能」こそ、どんな種類の集団を想定しても、その秩序を破壊する根源となり得るものです。本能こそ、人間が人間としての集団生活を送るためには、なかなかのやっかいものでした。人間はこの乱暴者を抑えつけるのに、ほとほと手を焼いてきたわけです。ところが、いくら抑えつけようとしても、動物から完全に脱皮できていない僕たち人間は、抑えつけられた本能が形を変えて爆発することがあります。それを悪と呼んだらいいと思います。

例えば誰でも所有・獲得本能があります。高級車に乗りたい、好きな女を自分のものにしたい、有名ブランドの洋服を着て優越感に浸りたい など。普通の人はその抑えてほどこに生きています。ところが、その本能が強すぎてとても抑えられなくて爆発させる人は、あこぎな金儲けを始めるとか、強姦をしようとしたり盗みをしたりしてしまう場合があります。それが、どんな集団から見ても悪と呼べるということは、誰も否定しないでしょう。

この理屈からいくと、芸術もスポーツも、元々は本能が形を変えて爆発したものだから悪の一種ということになります。これはちょっと乱暴な解釈のように受け取られる方が、たくさんいらっしゃるかもしれませんが、実は大切な見方です。どんなに戦争をなくそうとしても何故なくならないか、凶悪な犯罪や、人種差別や、校内暴力やいじめなど、それがニュースになる度に反省はしても、何故なくならないか考えてみてください。それは、今までは悪に対して、根源を究明する努力をしない対症療法でしかなかったからです。芸術もスポーツも、このメルマガのテーマである「愛」にしても、悪の根源である本能と強いかわりから生まれているのですが、そのことは見逃されているからです。

僕は、本能は悪の根源と言うだけで、悪そのものとは考えません。悪を生む原因となる本能でも、それをうまく昇華(社会的に認められない衝動や欲求を、社会的・精神的価値をもつものとされているものに置き換えて充足すること)させて発現できれば「善」になるわけですから、本能は善を生む根源ともなり得ます。芸術やスポーツも、本能がうまく具合に昇華されています。要するに、善も悪も、人間に自分という基準が生まれた時(=自我が生まれた時)に生まれた概念で、根本は一つだから、現れ方いかんでどちらにでも転ぶわけです。

ところが、昇華された芸術やスポーツは善である、というレベルで留まってしまうと、僕たちは悪を根絶することができません。やはり、

芸術もスポーツも、元々は本能が形を変えて爆発したものだから悪の一種であるという観念を持つくらいの真剣さが必要です。

スポーツを例にとってみます。スポーツは、出発点から見ると、実は戦争や犯罪と同じ、支配・被支配本能、闘争本能、所有・獲得本能、群居本能などが根本に働いているわけです。こういった本能があるから、僕たちは戦争やスポーツに駆り立てられるわけです。その証に、テニスやボクシングでも闘争心が希薄な人はモノにならないし、相手の嫌がる場所を意地悪く責めたり、フェイントなどの嘘や騙しのテクニックが必要です。それに、あるスポーツの監督の言葉ですが「戦う気がなくなったらだめだと、選手たちを鼓舞し続けました」とか、ニュースでは「日本は勝って凱旋帰国しました」とか、「今、日の丸を肩にかついで場内を一周しています」などという、まるで戦争を思わせる言葉がスポーツにピッタリと嵌まるのもそのせいです。高校野球で決まって使われる「全国を制覇する」などという言葉も、実はきな臭い言葉です。スポーツをする心理と戦争をする心理は、同じ本能から始まっているということの証しです。

根源は同じなので、いくらスポーツが「善」に昇華されたものだと言っても、裏を返せば「悪」の一種であり、悪がついて回ることは避けられません。スポーツにまつわる悪はたくさんあります。スポーツの勝敗が原因で戦争になったこともあるくらいです。

こうしたことをなくすためには、僕たちがスポーツをする時、自分たちは、今、戦争をしたい本能をスポーツで昇華している、つまり本能を理性でコントロールしているんだという意識をどこかで持っていることが必要です。そんなことを考えながらスポーツをするのなんて、ちっとも面白くないよ、ですって？ 確かにそうですね(笑)。でも、それが本能を知って本能をコントロールすることであり、そのことが自分の心を幸福にすることで、それがまた世の中から悪を根絶することにつながっていく第一歩だとしたら、そんなことは言っていないはずですよ。

頭の片隅に、「僕は今、戦争をしたい本能をスポーツで昇華している」という知識を記憶させていけば、いざスポーツをする時には無心であっても、そのプレーさえも全く変わってくることは、誓ってもいいです。スポーツの観戦者も、自分たちはスポーツを観戦することで興奮を味わい楽しんでいるけど、実はこの心理と戦争をしたい心理とは同じものなんだと知っているだけで、暴動を起こすようなサッカーの観客も、本能のコントロールがずっと容易になるものです。

スポーツは戦争をしたい本能を昇華させるもの。この知識が世界中の人の常識として埋め込まれれば、暴動を起こすほど興奮している観戦者も、自分に多くの人の批判が注がれるような気がして、自制心もより強く働きやすくなります。だから、僕は、この世の中から悪を根絶させるためには、一人一人が自分の中の本能の存在を、そしてその習性を知識として知ることから始まると考えています。

知識なんて、何の役に立たないと思っている方も多いでしょう。それは、個人的なレベルで見ると、大した変化もなく実践には役立ちそうもないように感じます。でも、個人個人の知識が変化すれば、それは、人類の営みという大きな波のうねりを変化させるほどの可能性を持っているものです。何故なら、知識とは単に、ある物事について脳が知った「ことから」に過ぎませんが、その「脳の記憶」こそ自分を作っているものであり、世界を作っているものだからです。

知識として脳に刻み込むには、しっかりした体系化が必要です。そんなわけで、近々、僕の書いた物語の主人公マーキー君が考えた「本能分類表」を発表させていただく予定です。(つづく)

今回のテーマは「子育てよりも助け合い」です。僕に子育てを語らせていただくと、このようになります。

編集後記

愛は感情であり、本能に属するものです。芸術やスポーツも、本能に属するものです。僕たちは、本能に属する愛や芸術やスポーツを、理性に属するものに、と言うより理性がコントロールできる場所にまで、しっかりと引き上げてくる必要があります。

本能を研究することで、芸術やスポーツとは何かということがわかってきます。

愛とは何かという疑問を解くカギも、その辺りに転がっていそうです。もう、しばらく、本能について考えていきたいと思いますので、よろしくお付き合いください。

%%%

自分探しの旅 with マーキー

NO.17 意識・思考

%%%

意識・思考

前回、記憶とは「ニューロン同士が作り出した興奮の痕跡」のことであったと書きました。それがネットワークを作っているのです。けど、それでは単に、配線が組まれたと言うだけのことで、人間にとって意味をなしません。記憶は再生され、意識や思考というものを作り出すから意味があるわけです。記憶を再生するとはどういうことでしょうか？

外界から、受容器(目・耳・皮膚・舌・鼻などの知覚装置)を通して入ってきた刺激は、それぞれ大脳新皮質にある(視覚野、聴覚野、体性感覚野、味覚野、嗅覚野)に到達して、その部分が反応している状態を、物を見た、聞いた、触れた、味わった、匂ったと呼んでいる、と書きました。(NO.13)

人間の脳内では休むことなく、ひたすらニューロン同士の刺激 反応が繰り返されているわけですが、ひとたびネットワークが作られるとその結合が強化されることはわかりました。受容器を通して新しい刺激を身体の外から受けたり、内からの何らかの刺激を受けることで、ニューロンの中をその刺激(情報)が流れます。その場所が、かつて結合され強化されているネットワーク内だと、かつてと同じ刺激が大脳新皮質に届き、そこが同じ反応をします。これが、記憶の再生と呼ばれている現象の初期段階ではないでしょうか？ 美味しそうなもの

を見て、思わずつばが出てしまうアレです。この段階では、まだ記憶は意識上に現れてきてはいません。

以前、脳の中の体性感覚野の右腕に対応する部分を刺激すると、右腕がない人でも右腕の痛みを感じると書きました (NO.13)。僕たち人間は、大脳新皮質で物を感じているということは、言い方を換えれば、実は、大脳新皮質の視覚野が目であり、聴覚野が耳であり、体性感覚野が皮膚であり、味覚野が舌であり、嗅覚野が鼻であったということになります。このことは、自分の脳の中に自分の脳の中で起こっていることを感じる目があり、耳があり、皮膚があり、舌があり、鼻があるということにもなります。

記憶という作用により、脳内には受容器を通して外部から入ってくる刺激と同じような反応をする刺激 (刺激の代用品) で溢れかえるようになりました。人間の脳には、刺激の代用品が無数に散らばり、しかもそれらの刺激を捉える受容器が脳内にも存在するようになったということです。僕は、この自分の脳内を見る脳のことを「第二の脳が生まれた」と呼んでもいいのではないかと思います。

例えば、苦い野菜ジュースを飲んだ時、どういうわけか初恋の彼女の顔が浮かんだとします。それは、苦いジュースを飲んだ時の刺激が、あるネットワークを通過しますが、その時の刺激を、脳内の受容器 (第二の脳) が見たマジック (現象) だと言えます。

僕たちの脳が何かを記憶するときには、同じニューロンをいくつもの記憶に対して使い回しをしているそうです。限られた数のニューロンですが、そうやって効率的に使われているようです。この、一つのニューロンを使って違う情報をいくつも扱うということは、一つのネットワークが、いくつものネットワークと重なり合っているということです。これが「連想」という現象を生み出しています。

このように、第二の脳ができたことで、人間には意識という現象が起こってきたと言えるのではないのでしょうか？ 意識とは、脳が一旦知覚したものを、第二の脳で知覚することではないのでしょうか？ 目から入った視覚情報は、一旦、後頭葉の視覚野に送られ、その後、頭頂葉や側頭葉に送られて物を認識しています。頭頂葉は、空間認識の機能を持っていて、方位、動き、距離感を判断しています。また、側頭葉は、像の意味を認知する機能を持っています。その判断や認知したものを、再び脳内の受容器 (第二の脳) が知覚することを、「意識」と呼んでいるわけです。

例えば、ネズミのような動物は、障害物を目で見て避けようとしますが、それは脳が反応しているだけで意識的行動ではありません。僕たちは意識することで、障害物が何かを判断して、それに応じた意識的行動をします。それは一旦見た障害物を、第二の脳が見たり感じたりしていることです。

このように、意識が生まれたことで、必然的に思考も生まれました。何故なら、思考とは、ニューロンのネットワーク上で「まったく違った情報」がいろいろ組み合わせられたり、離れたりにしている状態を、第二の脳が捉えている現象のことだからです。人間が言葉というシンボルを獲得し、“刺激の代用品”をシンボル化することに成功し、それによって記憶という作用がますます飛躍的に増大し、思考と呼ばれる作用にも幅が生まれ複雑さが増しました。言葉 (表音文字) とは、音の物理刺激が変化したものと考えられます。言葉による刺激がある反応を引き起こし、それがまたある反応を引き起こしたり、他からやってきた言葉の刺激と出会って違う反応をしたり、このような言葉による刺激 反応の連鎖が、思考を作っていたのです。

かつて作られ強化されたネットワーク上を、刺激が規制されながら流れることで、思考の方向性も決められていくわけです。あなたと僕の思考パターンがちょっとばかり違うのは、記憶しているものが違うから、ということになります。ところで、この意識、思考が生まれたことで、僕たち人間に最も目を見張ることが起こりました!!

それまでは、生物は宇宙の法則に操られて動いているに過ぎませんでした。例えば、掃除当番だから掃除をやらされているという状態でした。でも、「意識」は掃除をしている自分を見つめ、「自分がやりたくて掃除をやっているんだ」という“大きな勘違い”を起こしたのです。掃除をするという内容は同じであっても、この転換によって実に奇妙なことが起こりました。このことにより、脳内が活性化されることになり、意識を組み立てる方向性が広がり、そのことによって偶然できるようになったたくさんのことをも、どんどんと記憶していったのです。

例えば、木と木がこすり合わさって火が起こるのを記憶していた脳が、自分の手を使って木と木をこすり合わせてみたら火が起こった、というようなことです。偶然できるようになったたくさんのことを記憶することにより、実際にできることが増えていきました。そうして、大きな勘違いがだんだんと“確信”に変わっていったのです。

そうです!! 人類は、自分から意志を持って行動をしていると思いはじめたのです!!

誰だって、自分は自分の意志で行動をしていると思うでしょう。ケーキが食べたいからケーキ屋に行って、お金を払ってケーキを手に入れる。だけど、これは自然界の法則が作り出す様々な刺激に、僕たちが反応させられている姿に過ぎないのです。刺激 反応の連鎖によって、僕たちは行動を引き起こさせられて (ちょっと日本語が変?) いたのです。(つづく)

今回のテーマは「脳が見ている現実」です。

編集後記

今日は、火曜サスペンス劇場よりもショッキングな内容でした。僕たちは、意志を持って行動をしているように思っています。でも、それは、たくさんの方向からやってくる膨大な量の刺激によって、行動を「引き起こさせられて」いただけだったのです。

実は、僕がいろいろ考えて、そしてメルマガを発行しているこのことだって、自然界の法則が作り出している現象の一つに過ぎなかったのです。僕は、ああ、何ということでしょう!! 自然界の法則に操られて書かされていたのです。眠い目をこすりこすり書かされている奴隷に過ぎなかったのです。(T_T)

こんな現実、現代科学というものは直面してしまいました。さあ、どうしたらいいのでしょうか？面白くなってきました。そして、核心に迫ってきました。でも頂上はもう少し先です。頑張ってください!!

子育てよりも助け合い

前回のメルマガを思い出していただけますか？ 全ての人間が温存させている本能こそ、悪の根源だと書きました。悪の根源ではある本能だけど、やっぱり必要なものでした。人間は、自然界においては唯一の反逆児（＝理性）を授かり、それによって悪の概念を持つようになり、そして弱くなりました。自分で自分の行動を規制したり、他人を思いやる優しさを持ったからです。

人間は本能のままに生きれる他の動物たちと比べて、とてとても弱い生き物となってしまいました。大人になっても助け合わなければ生きていけない、弱い弱い生き物になってしまいました。

悪の概念を持ってしまった人間ではありますが、本能が悪の根源だとはあまり気づきません。自分は、悪いことをするような人たちは違うと誰もが考えがちです。でも、誰でも悪の根源を温存させています。それがなければ死んでしまいます。

「子育て」について考えてみます。

人間の子育ては、他の動物の子育て「一人で獲物が捕れるようになるまでの期間、世話や手伝いをする」とは違います。人間の子育ては、即、教育に関係してきます。教育とは、子供をその社会の体制（枠組み）が目標とする人間に育て上げることです。戦時中の子育てと戦後の子育てがどんなに大きく違うかと考えれば、教育と子育ての関係が見えてきます。

教育には理想がつきものです。戦時中の教育の理想は、教育勅語によく現れています。日本全国民が暗誦させられた「朕オモフニ」で始まるアレです。これは、1890年（明治23）10月30日に発布され、1948年（昭和23）に廃止されるまで、学校教育を通じて国民に強制され、天皇制の精神的・道徳的支柱となったものです。短い文章の中に日本の美風を天照大神（あまてらすおおみかみ）以来の歴史の連続性ととも説いていて、さらにそれを守れと命じるのでなく、一緒に高めていこうと天皇自ら呼びかけているものです。

その一部に次のような文章があります。（注：ここでは現代語に直しています）

「ひとたび国家の一大事（戦争）になれば、勇気をふるいたて身も心もお国（天皇陛下）のために捧げることで、天にも地にも尽きるはずのない天皇陛下の御運勢が栄えるようにお助けしなければならぬ。こうすることは、単に天皇の忠良な臣民として行動するというだけのものではなく、同時に、お前たちの祖先が残したすぐれた点を継承し、それをほめたたえることにもなるのだから」

どのような意図の下に教育勅語が作られたのかはわかりませんが、戦時中は、子供も大人もこの言葉を信じて、「欲しがりません勝つまでは」の精神で頑張ったのでしょ。

僕はある意味で、戦時中の人たちは現在の人たちより幸せだったのではないかと思います。幸せとは、裕福な生活をするだけでも健康になることでもなく、人間同士のつながり、つまり共感につきと思っています。当時は裕福でも健康でもなかったかもしれませんが、たとえ嘘であっても信じるものがありました。一つの理想を設定し、敵を憎むことで共感も強まったことでしょう。

教育勅語には、次のような理想も謳ってあります。

「親には孝行し、兄弟は仲よくし、夫婦は仲むつまじく、友人とは信頼し合い、礼儀を守り、慎み深く博愛の心で他人には親切にし、学業に励み、仕事を身につけ、知識をひろめ才能をみがき、人格を高め、すすんで公共の利益の増進を図り、社会のためになる仕事をし、憲法を大事にして法律を守りなさい」

国民をあげてのこの理想があったから、親も学校の先生も確信をもって子育てができました。でも、教育勅語がなくなった今、子供にこんなことを押し付けようとする反発されるかもしれません。

「なんで親に孝行しなきゃいけないの？ 別に産んでくれて頼んだわけじゃないのにさ。友人と信頼し合えたっていろんな奴がいるからムリだよ。礼儀なんて堅苦しいよ。なんで赤の他人に親切にしてやんなきゃいけないのさ。学業なんて大ッ嫌い。仕事なんかやりたくないなあ。楽しんで金欲しい。知識、才能、人格って、あんた何言ってるの？ 仕事は社会のためじゃなく自分の生活のためにやるもんでしょ？ 法律なんて破るためにあるんじゃない？」

もしこんなことを言い返されて、ちゃんと答えられる大人もいないような気がします。当たり前です。やっぱりその時代が作った嘘を信じ込まされていただけですから。ちゃんと答えられる大人は、頭の固い証拠ですよ。（笑）

現在、教育の荒廃が叫ばれているのは何故でしょう？ それは、教育に必要な理想がなくなってしまったからです。信じるための嘘がなくなってしまったのです。戦時中のように、たとえ虚偽であっても、価値観が意図的に統一され、自分たちがその価値観を信じきっている限りは、堂々としていられました。そして子供たちも、先生や大人の言うことを信じて健やか？ に育っていけました。

ところが、現在は、テレビでも週刊誌でも商業上の戦略から、たまたましいタレントや政治家の権威を面白おかしく暴いています。先生の権威も面白おかしく暴いておいて、自分を棚に上げて正義面して批判しています。権威というものも、もちろん嘘で固められたものですから、暴こうと思えばいくらでも暴けるわけです。

教育勅語の頃は、権威を暴こうとするのではなく、むしろ保とうとする傾向が社会全体に見られました。先生には絶対的な権威がありました。大臣や政治家には偉そうなヒゲがありました。父親はとて怖い存在でした。

それがなくなってしまったところに、教育（および子育て）の崩壊があると思います。

僕が学校の先生になろうとして頑張っていた時は、教育基本法や学習指導要領などを暗記させられました。そこには、教育勅語に代わる

いくつかの教育の理想のようなことが書かれていました。だけど、そんなもの教育の理想でもなんでもありません。教育の理想とは、先生や子供だけに押し付けておけばそれでいいというものなんかじゃありません。僕が言っている教育の理想というのは、お役人様が考えたそんな付け焼き刃的なものなんかじゃなく、社会全体が生きる支えにできるものことです。

僕たち日本人の、心の支えになっているものって何でしょうか？ 一つはアメリカの個人主義、あるいは能力主義からきているものがあります。自分の能力を活かして、人々を見返してやるほどの成功を収めてやろうとするあのアメリカンドリームです。これは、結構前向きに自分を成長させているような錯覚を与えてくれます。でも、単なる変化を成長と信じている錯覚に気づかないということは、自己反省に欠け、様々な悪影響が現れてきます。それは、世界を平和には導かないものです。何故なら、この能力至上主義の特徴である「優劣」からイメージされる言葉は、争いをイメージさせるものばかりです。

勝者 or 敗者、優越感 or 劣等感、尊敬 or 妬み、支配者 or 奴隷、能力主義は、本来、共同体の社会で生きてきた日本人にはあまり馴染まないものかもしれません。むしろ、日本人の心の支えになっているのはもう一つの心の支え、つまり世間体のような感覚です。普通に大学を出て、普通に就職し、普通に結婚すれば、自分は大人側に仲間入りさせてもらえるという気分(=幻想)です。さらに子供を授かれば、一つの役目を果たしたという安堵感や連帯感、さらには優越感も持つようです。どうやら今の日本人は、そんなものにしがみついて、そんなものを心の支えにして生きているようです。

社会における教育の理想がなくなってしまった現在、多くの親が、それを自分の教育の理想?にして、子供を育てるように見受けられます。だけど、気分を支えにしたくらいで子育てができるほど、子育ては甘いものではありません。

理想を喪失している現在では、本当の意味では子育ても成り立ちません。心あるお父さんお母さんほど、その心を痛めている子育て、それは決してお父さんお母さん方が微力なのではなく、理想を喪失している現代社会が微力なのです。いくらお母さん方が勉強会などに参加して努力しても、理想が崩壊している社会にある限り、決して根本的な解決策は見つかりません。

でも、僕は決して嘆くことはないと考えています。今までは、今までの嘘が権威を作り、信じさせてくれるものを作ってくれていたように、これからの時代に即した、新たな嘘と権威を見つけなければいけぬのだと考えています。これからの時代に即した嘘と権威を作り出せるものは、今まで、そしてこれからもあらゆるものを凌駕していくであろう「科学」をにおいて今のところ考えられません。現代科学が解明している自然界のあり方こそ、これからの時代の嘘と権威の裏づけとなってくれるでしょう。これからの子育ては、徹底的に今までの嘘を暴いて暴いて、暴いたその先に、これだけは信じていることができるというものを見つけたところから始まります。今、そのための転換期にあると考えています。

徹底的に暴かなければいけない嘘の例を、一つ挙げてみます。

大人は煙草を吸ってもいいけど、子供は煙草を吸っては駄目という嘘があります。そんなのただの屁理屈だから、子供の喫煙がなくなるのも当然です。喫煙は大人にも子供にも害になることは誰でも知っているはずですが、子供の喫煙は身体への害ばかりでなく、品行への害も考えられますよ、とおっしゃる方に質問します。

例えば子供が、お年寄りに席を譲っている大人のまねをして、お年寄りに席を譲っても誰も悪く言う人はいません。例えば子供が、道端に落ちているゴミを拾ってゴミ箱に捨てている大人のまねをして、ゴミを拾ってゴミ箱に捨てても誰も悪く言う人はいません。それなのに何故、子供が大人のまねをして煙草を吸ったら悪く言われるのでしょうか？

それは、大人が煙草を吸う行為自体に、あまり良くない、あるいは不健康な心理的背景があるからなのです。でも、大人は誰もそのところを見ようとはしません。自分たちは平気で吸っているながら、子供たちだけをとがめています。子供は、その辺の嘘を敏感に見破ります。大人の品位や権威という今までの嘘も見破っています。親父狩りとか援助交際とか舐めてかかるのもそのせいです。先生に注意されて、ちょっと小突(こつ)かれると「いてーなー！ 何するんだよ！ 暴力教師！」と大声で叫ぶのです。

大人たちにも自信をなくしている人が増えていますが、その人たちはどうしたらいいのかわかってはいないけれど、自分たちの偽物の威厳に気づいているというだけ ましではないでしょうか。

そこで、僕が考える解決策の第一段階を書きます。

まずは、「自然界を生きるためには障害となる理性を抱えてしまったのが人間だ」という大前提を知るところから始まります。理性を抱えてしまったから、人を思いやる優しい気持ち生まれ、人間は弱くなりました。人間は本能のままに生きる動物と比べて、ずっとずっと弱い生き物になってしまったのです。誰かの手を借りなければ弱くてとても生きていけない者同士です。大人が子供を教育するなどという、思い上がり捨てて、大人も子供も弱い人間同士助け合って生きる、そんな人間関係で結ばれていくことが理想となると考えています。

この考え方の裏づけとなるものが、マーキー君のメルマガ「[自分探しの旅](#)」で書いている、現代科学が解明している自然界のあり方です。

もう僕たち大人にごまかしは通用しません。大人も子供の前に、同じ人間としての弱みをさらけ出して、真剣勝負で生きることです。それは、もう子育てと言うよりも助け合いに近いものです。障害を持ってしまった者同士の助け合い。考えてみてください。実際、大人が子供に助けてもらっているものはたくさんあるのではないのでしょうか？ もちろん家事を手伝ってくれるなどということだけではありません。喜びや希望を与えてくれないのでしょうか？ それがなければ、大人だって生きていけないんじゃないですか!？ 人間は他の動物と違って、弱い弱いものだからです。

ごまかしのない真剣さだけが、子供の心を動かします。それが本当の子育てではないのでしょうか？ そんな僕たちの真剣さや、その真剣さを見て育った子供たちが、世界の平和を作るのだと信じます。(つづく)

次回のテーマは「科学者は本能なんて言葉使わない」です。いよいよ、本能分類表を公開します。自分の弱さをどこまでさらけ出せるかやってみましょう。

編集後記

僕たちのこれからの課題は、「大人は子供をどのように導いたらいいか」ではなく、大人も子供も手をとって、人間としては未完成な自分たちを、いかに人間としての完成に導くかということです。あるいは、未完成部分をどのように補い合うかです。そのためにも、自分の未完成さに気づかなければ です。自分たちが、遠い昔、自我に目覚め、人間としての道を歩もうとした時から、もう本能のままに生きる動物を捨てたわけですから。

逆戻りはできないなら、より完成された、理性で本能をコントロールできる「人間」に近づく努力をすべきだと思います。自己を知ること、本能の働きを知ること、それを呼びかけましょう。

もし世界中の人が、自分たち人間は、自然界においては理性という障害を持ってしまったので、助け合い補い合わなければ生きていけない、ということに同意し合えば、世界中の人と自分の心に同志としての共感も生まれます。その上で、自分の中に飼っている犬の習性をよく理解して、それをコントロールできるようになれば、世界中の人の心に安定が訪れます。それは、世界を平和にする人間性を築くことになり、そのことで世界が平和になる人間関係が築かれていきます。世界中の人と自分の心との共感はずっと大きくなり、大きな幸福感で結ばれることができるようになります。とすれば、こんなにいいことはないじゃないですか？

「子育て」も煎じ詰めれば、人間と人間の共感に尽きると思います。これからの大人が子供に見本を示せるものがあるとすれば、弱さをさらけ出して助け合って生きている、その真摯な姿ではないでしょうか？

%%%

自分探しの旅 with マーキー

NO.18 脳が見ている現実

%%%

脳が見ている現実

近年、脳の研究が進み、脳のどの部分がどのような働きをしているのかが徐々にわかってきました。病気や怪我で脳の一部が損傷を受けると、今まで当たり前のように行っていた行動に支障が起こることで、その部分の機能が解明されるようになったのです。

脳が右脳と左脳に分かれていて、それが脳梁という神経線維の束でつながっているのは知っているとします。では、この右脳と左脳が別々の働きをしていることが、どうしてわかったか知っていますか？ 1960~1970年の頃、片方の脳でんかんの異常がもう一方の脳に広がるのを防げるということで、脳梁を切断する治療が行なわれたことがありました。この右脳と左脳がバラバラになった患者に、いろいろなテストをしてもらうことで、右の脳と左の脳の特殊性もわかったわけです。

右脳と左脳があるわけですが、どういうわけか脳と身体では右と左が逆転しています。脳の右半球は、身体の左半分を支配し、また左半分に支配されています。脳の左半球はその逆で、身体の右半分を支配し、右半分に支配されています。これを「交叉支配の法則」と言います。身体の左半分から入る情報は、右の脳に行きます。視覚においても同じで、自分の左側に位置するモノは両目で捉えられた後、右の脳に行きます。まず、脳のことを知るには、この「交叉支配の法則」をしっかりあなたの脳にたたきこんでください。

脳梗塞などで右脳にダメージを受けると、身体の左半分が動かなくなってしまうのはそのためです。この時、患者の脳は時たま不思議なことをします。左半身が動かないという現実を受け入れまいとして、左側という概念そのものを消し去ってつじつまを合わせようとするのです。これを「左半側空間無視」と言います。その患者に、人を描いてくださいと指示すると、人の右半分しか描かないのです。左の概念がなくなっちゃったからです。

僕たちの目から入った視覚情報は、電気信号となって神経細胞の中を通り、一旦、後頭葉に送られ、その後、頭頂葉や側頭葉に送られて物を認識しています。頭頂葉は、空間認識の機能を持っていて、方位、動き、距離感を判断しています。人ごみの中でも、誰にもぶつからずに歩けるのはこのお陰です。また、側頭葉は、像の意味を認知する機能を持っています。

先程の脳梗塞などで、右脳の頭頂葉にダメージを受けていると、左半側空間無視の症状が現れる場合があるわけだけど、右脳の側頭葉が健在な場合、左に位置する物を認識できないわけじゃありません。だから、もし僕が左半側空間無視になっちゃったら、食卓に大好物のお刺身が並んでいても、それが左側に置かれていれば、お刺身があることは(側頭葉では)認知していながら、(頭頂葉が無視するので)食べることができないというちくはくことが起こります。ああ、くやしい。だから、お刺身は右側に置かなければいけません。っていう話じゃあなかった。

今度は側頭葉にダメージがある人の話です。この患者は、物の意味を認知できません。例えば、目の前に置かれているりんごを写生するように指示すると、きちんと写生できるのに、それが何かは答えられないのです。側頭葉には、特に顔の記憶を専門に引き受けている顔細胞というものあって、そこが損傷を受けると、自分の親しい人の顔もモザイクがかかっているかのようにわからなくなり、知人がすぐ側を通りかかってもわかりません。身につけているものや体型で判断するしかないわけです。その人の声を聞いて、ああ、〇〇さんか、とわかります。この症状を「相貌失認」と言います。

「エイリアンハンド症候群」という珍しい現象があります。脳梁がダメージを受けると右脳と左脳の情報伝達が失われ、片方の手が自分の意志にそぐわない勝手な動作をしたりします。これをエイリアンハンド症候群と呼んでいます。例えば靴下を履こうとしても、片方の手は靴下を脱ごうとしてしまうのでいつまでも履くことができなかったりします。

次は「シャルルボネ症候群」という現象です。これは正常？なが見る幻覚と言われています。僕たちの目から入った視覚情報は、一旦、後頭葉に送られ、その後、脳の各部に送られて過去の記憶などに基づいてそれが何であるか解析されます。この意味で、僕たちは、常に記憶によって都合のいいように歪められた世界を見ていると言えるわけです。錯視と言われる現象は、そのいい例です。顔文字も錯視の仲間ですよ。

U^9^U

並んだ記号が犬に見えるから不思議です。今はちょっと作画的に記号を配置したわけですが、そうでないとしても、脳には勝手に知っているものに置き換えて見てしまうという癖があります。そこで、白内障などで視覚を入力する一部分が損傷を受けると、視覚入力のない部分を脳が記憶情報の一部を用いて補おうとします。これによって幻覚を見てしまう症状がシャルルボネ症候群です。葉巻を吸っている男の人とか、明るい玉のようなものとか見えるそうです。それらは、過去の記憶から呼び出されたものを幻覚として見ているわけです。

例えば次の文章をどのように読みますか？

「のかきいしまのなやかすくりきてすきくにれあいだは」

これは、今、まったくでたらめにパソコンのキーボードをたたいてみたのです。これをそのまま漢字に変換してみます。

「野か奇異島の名や貸す乗るきて素聞く楡間は」

これは、僕のパソコンが意味不明の文章から、今までの記憶情報を用いて（僕が使用する語彙の頻度に応じて）補って変換しているわけです。この、まったくでたらめにたたかれた言葉の中に、僕のパソコンは「野」「奇異」「島」「栗」「楡」などの幻覚を見ているとも言えます。これと同じようなことが、視覚において、シャルルボネ症候群の患者の脳の中では起こっているわけです。

しかし、脳神経科学者ラマチャンドランさんは、「人間は皆、いつも幻覚を見ている。その中で一番現実にあったものを選んでるに過ぎない」と言っています。僕たちは、常に過去の記憶によって歪められた現実を見ているという点で、ある意味、みんなシャルルボネ症候群と言えるわけです。つまり、百人の人が同じ映画を見ても、百通りの見方をしているわけです。

今、「りんご」と聞いて、あなたは僕と同じ物を想像していると思いますか？ りんご自体も大きい物もあれば小さい物もあり、丸いもの、角張ったもの、赤いもの、青いもの、腐ったもの、一つとして同じりんごはこの世には存在しません。それでもみんなはそれを見て同じ「りんご」と認識します。それは何故でしょうか？

その理由は、りんごが一つ一つは違うのに一括してりんごとして認識する共通した概念（イメージ）があるからです。だけど、厳密に言うとそのイメージさえも一人一人また違ったものです。僕のイメージするりんごとあなたがイメージするりんごは、それぞれの経験を通して記憶しているりんごなのです。「りんご買ってきて」と言われて、ちゃんとりんごを買ってくるのは、その経験を通して記憶しているものが近いというだけのことです。

僕たちは会話をする場合も、こうして、それぞれの近似値で話し合っているだけなのです。要するに、言葉というのは、聞き手にはその人の取舍選択して再構成されたイメージで届くわけです。人間は、お互いの言葉を自分の都合のいいように理解し合いながら会話をしていたということですよ。

さて、現実とは何でしょうか？

「シャルルボネ症候群」の人に見える幻覚は、その人のどうにもならない現実には違いありません。「左半側空間無視」の人が見る世界は、それがその人の現実。「相貌失認」の人が見る世界は、それがその人の現実です。分裂病（＝統合失調症）の患者の人が聞く幻聴も、その人には幻聴だとわかっていても、確かに存在するのです。多重人格の人が経験するたくさんの現実も、確かに人格の数だけ存在するのです。なぜなら、現実とは、脳が過去の記憶に基づいて見ている幻覚のことだからです。幻覚こそが、僕たちが現実と呼んでいたものだったのです。

そして、正常だと思われる人たちの現実ですら、その人の過去の記憶に基づいて見ていた幻覚だったのです。その幻覚が、異常だと言われている人たちよりも、より多くの人と近似しているという、ただそれだけで、僕たちは確固とした現実が存在すると思い込んでいたのです。でも、所詮、幻覚である限り、現実とは確かなものじゃなかったのです。（つづく）

今回のテーマは「正常？ or 異常？」です。

編集後記

「人間は、お互いの言葉を自分の都合のいいように理解し合いながら会話をしている」と書きました。「自分の都合のいいように」と言う場合の、自分とは一体何なのでしょう？ 前回のメルマガを思い出してください。現代科学が捉えている究極の見方をすれば、自分とは、たくさんの方向からやってくる膨大な量の刺激によって、動かされていた操り人形でした。

自我とは何でしょうか？

僕たちは、しっかりとした自分というものが現実の中に存在していると考えがちです。でも、今日見てきたように、その現実ですらあまりにも不確かなものでした。自我がなければ人間は不安で生きていけません。そのため確固とした自分がいると思いたいのです。脳はそのようにつじつま合わせをします。そのことが、自我という幻想を作り上げてくれたわけですよ。今では誰一人としてその妄想を疑いません。

しかし、自我がなければ不安だった時代は終わりつつあります。今では、その自我が、むしろ様々な混乱と不安を引き出しています。今、僕たちに必要なことは、まず第一に、自我というものが幻想に過ぎなかったと理解することです。第二に、幻想に過ぎなかったと理解しても、それでもしつこく存在する「自我」とは何かということを知ることです。

それがわかった瞬間、僕たちは、今までの自我の幻想から一気に解放されます。そのことで、心の平安を得ることができる時代に入ろうとしています。僕たちの自分探しの旅も、その場所にたどり着くはずですよ。

ところで、この度、僕の産みの親でもあり、こちらのメルマガの（名前だけの）発行人でもある徳永真亜基自身が発行しているメルマガ「世界を平和にしない愛」に、友情出演しています。そちらも是非ご覧ください。

~世界を平和にしない愛~

NO.18 科学者は本能なんて言葉使わない

科学者は本能なんて言葉使わない

まず、本能の概念ですが、これは大きく二つに分けられます。一つは「理性によって抑えがたい不合理な内的衝動を本能とする」という考え方で、フロイトが、生（エロス）の本能とか死（タナトス）の本能などを使った場合の基本的概念です。

もう一つは、フェアブルなどによって動物が生まれながらにして持つ驚くべき行動能力が明らかになり、生得性、合目的性、精巧さなどを備えた能力を意味するものです。前者は人間を対象としていて、後者は動物一般を対象としていることに注意してください。

さて、後者の意味としての学術用語では「本能」という言葉はほとんど使われなくなっているそうです。例えば、伝書鳩がちゃんと巣に戻ってくるのは帰巣本能があるからだ、という説明だけでは答えになっていないし、学術的にもあまり意味がありません。それでほとんど使われなくなったようです。

ちなみに、比較行動学の研究によれば、伝書鳩が巣に戻るの、刻々の太陽の位置と体内の生理的周期変化との連動である、ということがわかってきたようです。

今、僕は、人間を対象とした前者の「本能」ではなく、今日では使われなくなっている、動物を対象とした「本能」を、もう一度、表舞台に引っ張り出そうとしています。

学術用語としてほとんど使われなくなってしまった原因は、元々は、動物の行動を説明するために使われだしたものであり、僕のように人間の悪の根源を説明するために「本能」という言葉を用いようとする研究者など、誰一人としていなかったからです。人間には、自分たちは他の動物たちとは違う、という確信にも似た思いがどこかにあるからです。そこで、もう一度、広島大学教授の難波紘二氏の言葉を引用させていただきます。

「人間を動物と異なった何ものかとして、倫理道徳を説くのは非科学のお説教にすぎない。だからそれは空理空論である。人間を動物として生物学的、心理学的に説明するところから、倫理問題を解明する道が開けるのである」

本能の分類が過去盛んに試みられましたが、そのどれもが「人類の平和」という目的を持ったものではありませんでした。そしてついには消えていったわけです。科学の究極の目的は、本当は「人類の平和」であるはずなのに。(v_v)

そこで、僕の書いた物語の主人公マーキー君は、いろいろな分類法を集大成して、次のような分類表を作成しました。一応、彼なりに考えて人類の平和にとって害悪の高いものからの順序で分けたようです。そこで僕は、これを「世界平和のための本能分類表」と名づけます。

「世界平和のための本能分類表」

- a. 支配・被支配本能（性本能、求愛本能）
- b. 闘争本能（攻撃・破壊本能、緊張・興奮本能）
- c. 差別本能（母性本能）
- d. 所有・獲得本能
- e. 群居本能
- f. 放縦本能
- g. 探求本能
- h. 防衛本能
- w. その他 摂食本能、休眠本能、模倣本能、遊戯本能

今日は、これを作った本人（マーキー君）に登場してもらって、自分で説明させます。では、マーキー君、どうぞ!!

えーっ、オホン。マーキーです。それでは講義を始めさせていただきますが、その前に、今ちょっと怒っていることを、みなさまの前で表明しなければいけない失礼をお許しください。真亜基さんは、僕が『アラスカの風に乗せて』の物語の中で作成した分類表を、事後承諾でほんの少しだけでも改訂しています。できるだけ簡略化して覚えやすくしたんだそうです。まあ、いいんですけど。今度からは前もって言ってください。(´´)

まずは準備として、お手数ですが、上の「世界平和のための本能分類表」をコピーして、アクセサリのメモ帳かなんかに貼り付けて、常に右側に小さく表示させておいてください。

この頭文字をとって「し、とう、さ、シヨ。ぐん、ほう、たん、ぼう」と覚えます。d(^_^)ネッ!

えっ? い、意味はありません。(^^;)

この分類表は、もちろん動物の本能を元にして作ったのですが、例えば犬などの「追跡本能」(逃げる獲物を追う本能。突然走り出したり、

走り抜けようとする人でも咬捕しようとする)は、人間には当てはまらないので削除しました。それぞれの説明に入ります。

aの支配・被支配本能は問題ないですよ。人間には他人を支配したいという欲望がありますが、それと同時に他人に支配されたいという欲望もあるから不思議です。それを被支配本能と呼ぶことにします。この相反する欲望が出会うことで成立するものなので、面倒くさいので、あっ、いや、その方がわかり易いので一緒にしちゃいました。

誰かさんの支配欲を陰で支えているのは、その他大勢の人の被支配欲かもしれません。カリスマを作り出す心理に似ているかもしれません。その後ろの括弧でくくっているのは、イコールという意味ではなく、含むという意味です。ここに含んでいる求愛本能とは、動物の求愛行動のようなものではなく、愛を求める(愛されたい護られたいという)本能の意味です。つまり、このメルマガのテーマの愛です。それが、人類の平和にとって害悪の高いものの筆頭に挙げられている点に注意ですね。

動物の求愛行動の方は、むしろ「性本能」と書いた方です。蛇足ですが、人間同士の愛というのは、支配と被支配の揺らく関係(いつも入れ替わる柔軟性に富んだ関係)で成り立っています よね。えっ、君のところは違いますって? 知りません!

bの闘争本能も問題ないですよ。これが希薄な人は、スポーツ界ではものになりません。運動神経はまあまあなのに人前で競い合うと駄目な人は、これや自己顕示欲などが希薄なんですよ。世界平和にとって害悪の高いものの第二位に挙げられています。この本能を強く持っている人はいけないうわけではありません。全然問題ないですよ。要は、自分に闘争本能があるということを知ればよいのです。それがどのような行動を導くかを知識として知ることが大切なのです。うまくコントロールできるようになればいいだけの話です。ここに含む、緊張・興奮本能というのは、人間が戦争や祭りやスポーツが好きなのは、本質的には緊張や興奮を求める本能があると思うからです。

cの差別本能は、このメルマガ「世界を平和にしない愛」の最初に出てきたソウアザラシの差別本能です。この本能があるから種の繁栄もあるわけです。だから、母性本能も含みました。なんとなく、わかりそうな気がしません?

dの所有・獲得本能です。これはもちろん、お店で素敵な洋服を見つけたら自分のものにしたい、という本能です。優越感を得たいとか権力を握りたいなどの欲などは、この所有・獲得本能に入れていいんじゃないかと思えます。ナルシズムや自己顕示欲なども、他人の注目を「獲得」したいという意味でこれに入れます。

eの群居本能とは動物だと群れを作って生活をするということですが、人間に当てはめた場合「人と同じことをすることによって安心を得る」というような意味で用いました。付和雷同することです。

fの放縦本能は、勝手気ままに行動することですが、怠惰なんかもある意味でこれに分類されるのではないかと思われま。要するに、仕事したくないから会社に行かないというのは、ある意味勝手気まま、ある意味怠惰ですものね。これを「ほうじゅう本能」と命名します。これよりeの群居本能を上位に置いたのは、どちらかという、勝手な行動をとるより、自分のしっかりした考えを持たず群れる方が、危険だと、僕が思ったからです。無意識の大きな悪が生まれる可能性を秘めているからです。

gの探求本能とは、単純に好奇心(珍しい物事・未知の事柄に対して抱く興味や関心)のようなものと思ってください。

hの防衛本能とは、意地悪な人には近寄らないなどというようにあらかじめ危険を回避したり、不安・葛藤・フラストレーションなどから自己を守ろうとして働く本能のことです。心理学で使われる、投射・退行・抑圧・昇華・合理化などといったものは、この防衛本能が生み出すものです。支配的な人を前にして、その人に服従してしまうのも、一種の防衛本能です。

wのその他とは、特定の状況下以外ではそれほど害のないものや、基本的な生命維持に関するものなどです。摂食とは食事を摂ることです。休眠は休むことと眠ることという意味で使っています。

それほど害のないものなどと言ってしまいましたが、特定の状況、例えば食事を摂ることや眠ることを疎外される状況に陥れば、人間は結構凶暴になるので、あなどれない本能です。やっぱりどれも、本能である限り、悪の根源でもあります。

この分類は、人類の平和にとって害悪の高いものからの順で分けたつもりですが、人と人との愛や母性愛など一見害悪とは対極にありそうに考えられているものが、1位と3位に入っているのを見てください。愛を求める気持ちや母性愛は諸刃の剣です。

例えば多くの人民を支配した王の心にあったものは、無差別の溢れんばかりの愛だったかもしれないし、一人の女性を愛し抜いた男の心にあったものは、支配欲だけだったかもしれないのです。愛こそ、理性でコントロールしなければならぬ、最も危険なものです。

「愛とは、甘えたい欲求と甘えを許すことができる心が出会った時に起こる感情」でしたね。そして、その甘えたい欲求とは、今まで見てきた「本能」の求める欲求を押し通そうとすること、あるいは本能が最も居心地がよく感じる状態を維持しようとするのでした。その本能をコントロールできないときに、愛もまた暴走してしまいます。

さて、このように分類させていただきましたが、実際の本能は、このように明確に分離はできないものです。それに、様々な本能が重なって行動は引き起こされます。ただ、物事の本質を知るためにはどうしても体系的に整理してみる必要があったのです。次に僕たちがやることは、これらを、実際の人間の行動に照らし合わせてみることなんです。以上のような点を大目に見て、細かいことは気にしないでやってみましょう。

確かなことは、平和というのは、世界中の偉い人たちが(; _ _ ;)こんな顔をして話し合ってたって決して実現しないということです。

一人一人が() 顔をしなす。前回のメルマガで、真亜基さんはいいことを書いています。大事なのは「人間とは、自然界を生きるためには障害となる理性を抱えてしまった動物である」という大前提を知ることです。障害を持ったもの同士が助け合うという気持ちから、世界平和が始まります。だから、明るく、楽しく、他人を許す気持ちを忘れずに、細かいことは気にせず本能を暴き合ひましよう。

今回は、真亜基さんに「本能分類表」を実例を挙げて説明させます。その前に、僕からお願いがあります。お手数ですが、今コピーした「世界平和のための本能分類表」をデスクトップ上に「名前をつけて保存」しておいていただきたいのです。いつでも、参照できるようにです。

それとちょっと宣伝させてください。僕は「自分探しの旅」というメルマガを書いてます。その旅でたどり着くところと、この「世界を平和にしない愛」がたどり着く場所が同じ場所なのです。途中で道に迷わなければの話ですが。

えっ？ はい、はい、わかりましたよ。隣りで覗^{にら}んでいる人がいるのでこの辺で失礼します。では、今回のテーマは「実践・本能分類表」です。あっ、これは隣りの人のセリフでした。

編集後記

えー、マーキー君でした。ありがとうございますね。夜道に十分に気をつけてとっととお帰りください。

本能を取り除くのではなく、本能とはどのような害をもたらす、その害を避けるには理性でどのようにコントロールすればいいのでしょうか？ 世界中の子供が九々のかけ算を習って記憶するように、まずは、小学生の頃から知識として、本能と人間の行動の関連性を覚えていくことがこれから必要になることです。

初めのうちは、たとえ単なる知識でもいいのです。一人一人の地道な努力ですが、これ以外に世界を平和に導く方法はありません。そのために、マーキー君が作成した「世界平和のための本能分類表」が少しでもお役に立てれば、彼も死んでも本望でしょう。(; _ ;)

%%%

自分探しの旅 with マーキー

NO.19 正常？ or 異常？

%%%

正常？ or 異常？

先週は、僕の産みの親、真亜基さんのメルマガに出してもらったので、今日は彼の言葉を紹介してあげることにします。

発明王エジソンが子供の頃実験をしていて爆発騒ぎを起こしたというのは有名な話だね。

人はそれに対して実験に失敗したと考える。でも、本当にそうだろうか？

彼が混ぜ合わせた化学物質が自然界の法則の中で適応した現象を起こしたわけだから

自然界から見たら全てが成功？してるんだよね。

失敗・成功は、人間の想像力がある基準を設けてそれに対して下される判断なんだ。

障害者って言葉だって同じだね。大多数の人を基準としていろいろなものは工夫され発明されるから少数の人はますます暮らしにくくなる。その人たちに対して人間の想像力が障害者と呼んでいるけど科学的偏見から見るとつまり科学もひとつの偏見でありその偏見から見るとというわけだけど、それが、その人の自然界に適応した現れ方なんだ。

それなのに病名を与えられ治療^{ほどこ}されるから本人まで自分が病人のような気がしてきちゃう。苦しんだり悲しんだりしていなければ申し訳ないような気がしてきちゃう。

この宇宙には適応されない状態で存在しているものは何一つない。

世の中から無用な差別や争いをなくすには自然界を基準としたこの考え方が役に立ちそうだと思えないかい？

今までの大多数の人や強^{ちやうじや}者を基準とする考え方ではなく。

科学は物騒な兵器をたくさん作りはしたけれど実は、平和に貢献する「ものの考え方」を示してくれてもいたわけなんだ。

(<http://www.aa.alpha-net.ne.jp/markey19/> 「僕は健康だよ。ただちょっと」の中の「7.適応と障害」より)

例えば、遺伝子の配列が突然変異を起こした場合、それによって、ある病気にかかりやすくなってしまふことができることがあります。でも、同じように突然変異が原因で、ある病気にかかり難くなるということができることもあります。どちらも自然界に適応した現れただけで、僕たちは勝手に一方を病気とし、一方を優れた能力のように差別しています。

大多数の人と違うからといって、それを障害とか、またその逆に優秀な能力とか見る見方も、同じように差別を生みます。アインシュタインさんは天才だと言われていますが、考え方を換えれば、彼は脳にある種の障害を抱えていたからあんなことを考えてしまったんだとも言えるんですよ。それなのに、僕たちはある人たちを障害者と呼び、ある人たちを天才と呼ぶ。

養老孟司^{たけし}さんの『人間科学』という本の中に、次のような文がありました。

「確率的に生じうる事象を異常ということは、本来できないはずである。地震も台風もべつに異常な現象ではない」

これは、男と女、つまり性差^{せいさ}について論じている部分に書かれていた言葉です。受精から始まって性腺^{せいせん}（精巣や卵巣のこと）が作られ、男性ホルモンが分泌され外部生殖器官や脳の性分化が行なわれていくのですが、その段階で性決定の逆転が行なわれることがまれにあります。我々は、それを異常と呼んでしましますが、それを異常と呼ぶことはできないはずである、と彼は言っているわけです。

もう一つ、今度は難波統二^{なんばこうじ}さんの『生と死のおきて』から、次の言葉をご紹介します。

「医学においては“正常”はノーマル(normal)の、“異常”はアブノーマル(abnormal)の訳語である。これは統計学における正規分布(ノーマル分布)の概念から来ていて、ある集団の中で、多数を占めるものが正常であり、少数を占めるものが異常であると定義されている。正常と異常という概念それ自体には、良いとか悪いという価値判断は含まれていない。(中略)つまり、異常と正常のどちらが良いかを判断する基準は、医学や生物学の中にあるのではなく、社会にあるのである」

ダウン症の人は、21番染色体が1本過剰で3本あると言われています。その原因はまだ究明されてはいないだろうけど、一体どのような仮説が立てられるでしょうか？ まさか、前世の悪行^{あくぎょう}が原因などという仮説は成り立たないでしょう。僕は現代科学の最も大きな功績は「物事には全て原因がある」ということを僕たちにわからせてくれたことだと思っています。21番染色体が1本過剰になるにはそれなりの原因があるのです。もちろん、前世の悪行などではない、何らかの化学的作用が働いてそのようになるわけです。ただ僕たちが、まだ原因を究明できていないだけです。そして、その何らかの化学的作用が働くことを、僕はその遺伝子が自然界に適應した状態と呼んでもいいのではないかと思います。何事も、物理・化学的作用(自然法則)に適應して起こっているわけで、適應されないで存在する状態はあり得ないわけです。

ダウン症を、染色体の異常ととる捉え方もありますが、異常ととるのは人間の想像力であって、本当は自然界には異常も正常もないのです。あるのはただ「何らかの化学的作用が働いてできる結果」だけです。自然界から見れば、全てが正常な状態だと言えると思います。

それでは、最後にもう一人の方の言葉をご紹介します。諏訪中央病院の院長先生である、鎌田^{みのる}さんの書いた『がんばらない』という本の中に次のような文章がありました。

「今を生きるぼくらは忙しいために、効率を優先して行動する。効率を優先しないと結局どこかに迷惑をかけてしまう。悲しい現実の中でぼくらは組織を維持しようとする。しかし、この構造の中にダウン症の人がひとり入るだけで空気がホーッとするのである。(中略)ダウン症の子供は実にあたたかでやさしい」

ダウン症は決して脳に障害を負っているわけではありません。その状態が、彼の脳が自然界に適應した現われ方なのです。見方を変えれば、効率効率と追い立てられている我々こそ脳に障害を負われているとも考えられるのです。僕たちが普通「障害者」と呼んでいる人たちは、社会的に見れば(この社会が大多数の人に便利ように作られていくので、少数の彼らには、不便な面はたくさんあり)障害かもしれないかもしれませんが、自然界から見れば障害者なんかじゃなく、自然界に適應して現れている姿です。

自然界から見て、もし僕たちに唯一障害というものがあるとすれば、それは、理性です。だから僕たちは「みんな障害者」であると自覚したところから、新しい世界が始まります。人間はあらゆるものを人間中心で考えてきましたが、これからは、自然界中心に考えなければやっていけない時代に入っていくと考えています。

なぜ理性が障害かと言うと、こんなものがなければ死ぬも生きるも動物のように自然に任せていけばよく、こんなにじたばた生きる必要もないし、やりたいことを我慢したり、やりたくないことをやらなければならなかったりすることもないし、難しいことを考えて悩むこともなかったからです。だからと言って、理性を捨ててしまおうなどと言っているのではないので、誤解しないでください。今さら捨てられるわけではないですから。それに、僕は理性を悪と捉えているのではなく、自然界においては障害だったと言っているだけです。

その考え方が何の役に立つかと言うと、君の心の役に立ちます。そして世界の平和です。

世界を平和にする偏見とは、「理性という反逆児を授かった僕たちは、自然界に適應する上において、みんな障害者なんだと理解し合うこと」です。

「みんな障害者」であったと気づくことで、障害者と呼ばれてしまっている人たちを悪い意味で差別することもなくなり、自分を悪い意味で尊大に思うこともなくなると考えます。そして、恵まれない子に愛の手を などという上から下ではなく、「僕たちは、理性を持ってしまった人間というみんな恵まれない障害者同士だから助け合わなければ、生きていけないんだよ」って考えましょう。そこから、本当の平和への第一歩が始まると考えています。人類はまだ、本当の意味で、平和への第一歩すら踏み出していません!! 偉い人も(いや、偉い人ほど)胸に初心者マークをつけて始めましょう!!

あれっ? 何だか、真亜基^{まゐ}さんの方のメルマガ「世界を平和にしない愛」とリンクしてきちゃいました。きっと頂上^{いっとう}が近づいてきたせいでしょうね。もうすぐ、彼ら一行とも遭遇できそうです。でも、まだ最大の難関が待ち受けています。その難関を越える前に、考えておきたいことがあります。(つづく)

今回のテーマは「科学者の非科学的解釈」です。

編集後記

今日は、この世に存在しているものは全てが適応している状態だ、と書きました。そのところを、誤解しないでください。僕が、現代医学では手も足も出ない何かの病気で死んじゃうとします。でも、僕が死んだのは、僕がこの世に適応できなかったからではありません。僕がある病気で死んだとしたら、それが自然界に適応している状態なのです。生だけが自然界の現象ではありません。死だって立派な自然界の現象です。死という形で、死はこの世に存在しています。(ちょっと難しい言い方でした)

とかく、人は生だけを謳歌しがちです。いい生き方をしたいと楽しく思いを巡らせますが、いい死に方についても楽しく考える気持ちを持ってたとき、初めて人間は自然界という大船に乗ってあらゆる物事が楽しめるようになるんです。

もう一つ誤解しないでほしいのは、さっき、「僕たちが普通『障害者』と呼んでいる人たちは、自然界においては障害者なんかじゃなく、自然界に適応して現れている姿です」って書いたけど、だから、障害年金を廃止しようなんて言ってるんじゃないんですよ。自然界には適応した現われであっても、理性を持った人間が作っている現実の社会にあっては適応が難しい人たちもいます。人間が理性を持ちちゃった弊害がここにも現れています。

僕たちはみんな、理性という障害を持った障害者だから、その人その人の不得手な部分を、周囲の人が手を貸し合って生きていかなければならないんです。障害年金だって、少しでも手を貸してあげることになればいいじゃないですか？

~世界を平和にしない愛~

NO.19 実践・本能分類表

実践・本能分類表

前回、「世界平和のための本能分類表」をデスクトップに保存してくださるようお願いしましたが、やっていただけましたか？ それでは、また、それを右側に表示させながら、以下の文章を読んでください。

「し、とう、さ、ショ。ぐん、ほう、たん、ぼう」と、覚えてしまった方は、右側に表示させなくても大丈夫ですよ。

* * *

最近(と言うわけでもないんでしょうが)、ショッキングな事件が多発しています。公職にある政治家がたくさんの賄賂を自分の懐に入れた(a・d・e)とか、国民の安全を守るべき警察官が盗みをした(d)人殺しをした(a・b・d)とか、聖職者であるはずの学校の先生がわいせつ行為(a・d・g)に及んだりとか。でも、このメルマガを読んでくださっている方にお願ひがあります。もし、それらのことを本当になくしたい(a・d)と思うなら、これからは一々驚かないで下さい。どこよりも驚かせるような報道をしようと、腕を振るう(a・b・d)のがマスコミの仕事です。何故なら、僕たちがそれを求める(d・g)からです。

僕たちは、ショッキングな事件を見聞きしても決して驚かず、彼らは僕たちと同じ人間だからそういうこともあって当然でしょう、と思えるようにならなければいけません。

また、世の中には傷害事件の被害に遭われた方や、戦争の被害に遭われた方がいます。このメルマガを読んでくださっている方にお願ひがあります。その方たちに同情して、「何の罪もない人や子供たちを、こんな目に遭わせた事件や戦争が許せない」という怒り(b・c・e)を持たないで下さい。そんな同情をして、戦争や事件を起こした責任を他人に探す(e・g)ようなまねはしないでください。

自分とは記憶の積み重ねである、という言葉聞いたことがありますか？ 記憶の積み重ね、それが自我を作っているに過ぎない、と言うことです。自我とは、自分と区別される対象の存在を知り、「これが自分という存在である」と自分で信じているところのものです。その「記憶」は、現代では、より多くのことがテレビや週刊誌などのメディアを通して入ってきます。現代人は、大部分がテレビや雑誌などに作られている自分を、これが自分であるところのものである、と信じているに過ぎないと言えます。

視聴率の獲得が至上命令(a・b・d)である彼らのやり方は、正義面をする(b・c・h)ことと、僕たち視聴者を有能な判定者とおだて上げる(h)ことです。僕たちはそのやり口に乘せられて、自分を正義であり有能な判定者だと思いがります。(c・e・h)

エッセイスト山本夏彦氏は「マスコミは真実など書いておらんし、そもそも真実を書く気などありはしない。ただ部数を伸ばすために、大衆に迎合するのみである」と書いています。「新聞に載っていることは、結局は部数を増やすための文章にしか過ぎない。あれを真実の報道だと思って読んで決してならない。新聞記者は、現場を見て書いているのではない。本社デスクの顔色を見ながら書いているのである」とも書いています。

平仮名で日常に退屈して、他人に降りかかる忌まわしい事件や戦争の話題を待ち望んでいる(b・g・h)なら別ですが、もし本当にそれらをなくしたい(d)という良心がおありなら、今日からは一々驚かないで欲しいのです。そして、「何がそんなに事件なの？」と思えるようになって欲しいのです。何故なら、忌まわしい事件や戦争を起こすように(本能というもので)プログラムされているのが、僕たち人間です。と言うより、たまたま本能に基づいて行動していることを、僕たちの理性が事件に仕立て上げているだけなのですが。

山本夏彦氏は「庶民は汚職する権力者を憎んでいるのではない。妬んでいるだけだ」(a・b・d)と書いています。本当にその通りだと思ふのです。汚職ができる環境にないだけです。でも、よく思い出してください。僕たちは、自分の環境の範囲内で、汚職と同じようなことを日常茶飯事に行なっています。

世話になったからといって金品を渡したり、気に入られたくて物をあげたり、いろいろな意味でコネを利用したり。その逆に、何かをくれた人には特別扱いをしてあげたくなるのが人情です。それらを別に罪の意識もなく行なっているのが僕たちです。むしろ、ある面では善意として行為し合っています。金品をくれる人は「いい人だなあ」って無差別で反応してしまいませんか？(笑)

僕たちは、汚職をする権力者を憎むのではなく、妬んでいる自分を憎むべきだったのです。同じことをしている自分の行為に気づくべきだったのです。そうでなければ、永久に政治家の汚職すらなくなりません。

妬んでいる自分に気づき、みんながそんな自分を憎むようになったら、もう僕たちは正義でも有能な判定者でもないこととなります。そんなことに気づかれたら、マスコミは戦術を変えなければならなくなるでしょう。

自分のしわだらけの顔に気づいた年寄りに、「若々しいですね、まだ30代に見えますよ」などと言っても通用しなくなるわけです。「見て御覧なさい。あのしわだらけの顔の人たちを、ああはなりたくないですねえ。僕たちは国民として彼らの若さをしっかり管理しましょう」などと言えば言うほど、いやみに聞こえてきます。それよりも、正義面していたマスコミも自分の嘘に気づき、ほとほとイヤになります。

ちょっと「世界平和のための本能分類表」を見てください。

驚くことに、政治家になるには上位4位(a~d)までの本能が強いのはもちろんのこと、政治家を全うするためにはa~wの全てが必要です。そういう本能の強い人たちが政務に携わっているわけですから、世の中が「悪」に満ちていようと不思議なことではありません。

政治家になる最も大切な資質は二つあると思います。一つは金集めがうまいこと(a・b・d)、もう一つは嘘をつくことがうまいこと(b・h)。この二つに長けた人物が人を動かして世の中を自分の描いた理想に近づけることのできる人たちです。

いや、もう一つありました。権力欲(a・b・c・d)などが強いこと。これが第一条件です。それがなければ、まず政治家になんかならうと思わないでしょう。

金集めが大切なことだと言うなら、政治家と裏金とは切っても切れない関係にあるわけです。そして嘘がうまいという点から、「私はそんな金を貰った記憶はありません」とふてふてしく嘘をつけるのもうなずけます。そういうことをうまくやる人たちが政治家になるものなのだから。

その逆の人を考えてみればわかります。

欲がなく、真っ正直で、金集めも下手な人なんて、政治家にならうと思っても無理なのはわかりきっているし、始めから政治家になんかならうとはしないだろうし、何かの間違いで政治家になったとしても、彼を選出した人たちに頼りなく思われてしまうでしょう。だけど、そんな人を頼りなく思ってしまう(c・h)自分を責めようとは、誰も考えもしません。本当は裏金よりも、そのことの方が問題なのです!!

例えば、ある政治家の言動を考えてみてください。彼の言動は、彼の脳が引き起こしたもの(a~w)であるということには異論はないですよ。でも、その政治家の脳は環境によって作られていて、その環境によって作られている脳によって言動を引き起こさせられていたのが政治家です。と言うことは、政治家の脳は彼を取り巻く環境の一つでもある「あなたの脳」も関与していたのですよ。

それでは、身近なところで世界を平和にするための「実践・本能分類表」をしてみます。自分たちの行動を支配している本能を、互いに許しあう気持ちを持って暴き合ひましょう。他人を責めるのではなく、くれぐれも助け合う気持ちが大切です。

理性という障害を授かった弱い人間同士助け合う、という意味です。理性という障害を授かったおかげで、動物にとっては悪ではない本能を悪と見なすようになってしまったわけですからね。

- ・自分一人ぐらいいいだろうと夜中に生ゴミを出す f(放縦)
- ・自分の子供が一番かわいい c(差別)、d(所有・獲得)
- ・隣近所の人を噂や悪口を言う d(所有・獲得)、e(群居)、g(探求)、h(防衛)
- ・強い人につく a(支配・被支配)、e(群居)、h(防衛)
- ・世話になったからといって金品を渡す d(所有・獲得)、h(防衛)
- ・出世のためコネを使う a(支配・被支配)、d(所有・獲得)、h(防衛)
- ・バーゲンでは我先にと人を押しのけて物を奪い合う b(闘争)、d(所有・獲得)
- ・並んでいるのにずうずうしく割りこむ b(闘争)、d(所有・獲得)
- ・生意気な外人を見ると外人のくせにと言う c(差別)、e(群居)、h(防衛)
- ・汚らしいからといって嫌う c(差別)、h(防衛)
- ・格好いいからといって好きになる c(差別)、d(所有・獲得)、g(探求)
- ・憧れたり、特定の人だけを愛する a(支配・被支配)、c(差別)、d(所有・獲得)、g(探求)
- ・焼き餅を焼く c(差別)、d(所有・獲得)
- ・ひいき、差別する c(差別)

このように、自分や周囲の人たちの行動を見て、本能分類表と照らし合わせることを「実践・本能分類表」と名付けます。これが何の役に立つのか？ とても、あなたの心の役に立ちます。世界の平和にも役立ちます。その理由は、あなたのこの体験の中にあります。(つづく)

今回のテーマは「ネガティブ・シンキングのすすめ」です。

編集後記

あなた自身でも結構ですが、自分のことはなかなかわかりづらいものです。あなたの周囲の人、友達や同僚や上司、テレビに出ている偉い人、学者、政治家、コメンテーター あらゆる人の言動をこの「世界平和のための本能分類表」に照らし合わせてみてください。何日か続けていると、きっと、面白い体験をします。

人間は他の動物と同じで、意外なことに、ほとんど全ての行動を本能に支配されていたという事実を知るはず。そして、理性はほとんどの場合、その本能に支配された行動を理由づけするために使われているという事実も知るはず。そして、自分も本能によって支配されている同じ穴のムジナだったことを知るはず。実は、これが一番大事なことです。

本能は悪の根源でもあるけれど、善の根源でもあります。本能が強いこと自体は、恥ずべきことでも悪いことでもありません。人間の理性が、善悪を決めているだけです。だから、() こういう顔を忘れずに、許し合い助け合う気持ちで、楽しくやってみましょう。

是非あなたの「実践・本能分類表」もお聞かせください。

%%%

自分探しの旅 with マーキー

NO.20 科学者の非科学的解釈

%%%

科学者の非科学的解釈

科学者の方たちでも、とんでもない非科学的な解釈をしていて、それに気づいていない例を二点挙げます。

- 1、進化という言葉の誤用
- 2、意思的解釈をしてしまう

まず、1番目の「進化」という言葉だけど、この言葉の中には進歩というような意味合いが含まれています。でも、自然界を基準にして眺めると、あらゆるものが「変化」しているだけで、進歩しているとは考えられません。進歩しているとするのは、人間を中心としたときに出てくる見方です。ちなみに、大辞林で「進化」という言葉を調べてみると、次のように説明してあります。

「生物は不変のものではなく、長大な年月の間に次第に変化して現生の複雑で多様な生物が生じた、という考えに基づく歴史的变化の過程。種類の多様化と、環境への適応による形態・機能・行動などの変化がみられる。この変化は、必ずしも進歩とは限らない。また、生物だけを対象とするにとどまらず、社会進歩観を背景に社会進化論が生まれ、さらに全宇宙・全物質を歴史的变化の中でとらえる概念にまで拡大される」

このように、大辞林には「変化」という言葉が使われていて、「必ずしも進歩とは限らない」とも書かれていました。にもかかわらず、科学者の中には、進歩という意味合いを含めて使ってしまった人がかなりいます。

例えば、「チンパンジーより進化している我々ヒトの脳を、チンパンジーの脳を研究することで全て解明できるとは考えられない」などと使うとき、そこには進歩という意味合いが含まれています。もし、これを自然界を基準として言い換えるとすると、「チンパンジーとは違う変化をしてきた我々ヒトの脳を、チンパンジーの脳を研究することで全て解明できるとも考えられない」とも言うのでしょうか。

「必ずしも進歩とは限らない」ものに、「進」という字を当ててしまったことが勘違いを起こす元です。「進」という字を当ててしまった最初の人、自分たち人間を中心にして世界を捉えてしまう人だったのは確かです。もちろん、先程の辞書の説明の中に書かれていた「社会進化」も、実は単なる「社会変化」に過ぎないのです。人間を中心にして考える根強い偏見が、社会に進歩という概念を持ち込んでしまうだけです。

もし、本当に戦争がない世界がやってきても、それは世界が進歩したのではなく、そのような世界に変化しただけという考え方をしましょう。戦争をしてしまうのは、人間の理性が進歩していないわけでも成長していないわけでもありませんよ!! 戦争をしないような理性に変化していないだけです。それを人間中心に考えて、理性が成長している人とそうでない人がいる、などと差別すると、そこにまた無用の優越感や侮蔑や批判が生まれ、争いが起きます。

発展という言葉も結構無造作に使われるけど、実は単なる、変化なんですけどね。

進化も発展も、人間がある基準を設けることで下される判定です。だから、違う基準を持っている人にとっては、同じ現象が退化であったり衰退であったりするわけです。文明は現代のように変化することだけが発展とは限らないということだけど、自然界を中心に考えないとそのへんのことが見えません。

前回、「人間はあらゆるものを人間中心で考えてきましたが、これからは、自然界中心に考えなければいけない時代に入っていきと考えています」と書きました。自然界を基準とした視点を持って、これからは、僕たちは単に「変化」という言葉を抵抗なく使えるようになりたいものです。

ところで、現代科学では、生物の進化(変化)の起こる原因を「遺伝子が時たま作り出す突然変異が、その時の環境に適応して種を変化させている」と考えています。遺伝子は何万分の1かどうかは知りませんが、時々突然変異を起こします。突然変異は、異常ではありません。

せんよ。その状況で正常に作用した結果です。それが、そのときの環境に適応しやすいものであったなら、当然、より多くの子孫を残せることになり、以後、その種の遺伝子を持ったものが繁栄するわけです。それが生物を変化させているという考え方です。

僕はこの考え方をとても気に入っています。これは、うまく利用すれば世界を平和にする考え方にもなるはずなのに、これがまた正反対の効果を持ってしまふことがあります。それは、科学者が非科学的な解釈をしてしまうことに原因があります。「遺伝子が時たま作り出す突然変異が、その時の環境に適応して種を変化させている」の「適応」という部分に、人間にはあると思われる意思を移入して考えてしまうのです。それを2番目の「**意思的解釈**」という言葉で僕は批判します。

例えば、ある学者は「このように、ヒトは肥大した脳を持つように進化したのが、そのことは新たな問題を発生させることになった。そのままでは大き過ぎて母体の産道を通ることができず、そのため（他の動物に襲われるという）危険を承知で、目も見えず歩くこともできない未熟なままで産まれる早産を選択した」というような説明をします。面白い考え方ですが、科学者とは思えない笑っちゃうような発言です！

自然界には、肥大してしまった脳に困ってしまったり、他の動物に襲われるということを危険視したり、あえて早産を選択するというような意思はありはしません。そこにあるのは、ただ「遺伝子が時たま作り出す突然変異が、その時の環境に適応して種を変化させている」事実だけです。その逆の、その時の環境に適応するように種を変化させるような働きは自然界には決して存在しません。

キリンの首が長いのは、高いものを食べれるように適応したのでも、遠くの敵を見つけやすくするために適応したのでもなく、たまたま長い首のキリンがその環境に適応して、その遺伝子が繁栄し、種を変化させたのです。

環境に適応したとは言っても、それは僕たち人間が考える「高いものを食べれる」とか「遠くの敵を見つけやすくなる」などという目に見えるレベルの単純なものではありませんよ。もっともっと複雑な、分子レベルの適応を自然界はやっているのです。キリン本人にとっては、首が伸びちゃったから高い物しか食べれなくなっちゃったとか、水を飲みにくくなったとか、寝るときに不便だよお、と嘆いているかもしれないのに、人間がそれを適応しているなんて言うのも勝手なものです。

この「意思的解釈」は、生物関係の本を開けば、ポロポロこぼれ落ちてきます。そのいくつかを抜粋してみます。

「大動脈での血流速度は一秒間に平均 40 センチメートルなのに対して、毛細血管での血流速度は 0.2 センチメートルと非常にゆっくりなのは毛細血管での物質交換を時間をかけて十分に行なうためである」

この間違いに科学者である著者は気づいていないのですが、これは「非常にゆっくりなので時間をかけて物質交換をすることが可能である」とでも言うべきところです。自然界は、毛細血管での物質交換を時間をかけて行なおうとするような意思をもって生物を作っているわけではありません。

「スカンクの発する毒ガスは、敵から身を守るための防御戦略である」

一見正しそうに聞こえますが、防御戦略という言葉自体「意思的解釈」です。遺伝子の変異により、偶然、肛門の両側に一對の腺を形成することになり、またそれが、ある刺激に対して反応した場合、生き残る確率が高かったことからそのような形態を持つ種が増えただけです。例えばミツバチの針は、最初は卵を植えつけるためのものだったそうですが、それが人間を刺す武器に変化したのです。生物の器官さえも先の見通しがあってできるわけではなく、結構成り行き任せでできているのです。

子供の質問で「まつげは何のためにあるの？」というものがあつたとして、それに対して学者先生が「目にゴミやほこりが入らないようにしたり、強い光を防ぐためにあります」などと答えているのを見かけたりします。それも間違いです。

まつげがあるから、目にゴミが入りにくかったり強い光を防いでいるだけなのです。それでまつげが自然界に適応して、以後そのような遺伝子を持つ種が繁栄しているだけです。そもそも、子供の「何のために？」という質問自体がナンセンスだったのです。自然界に目的はないことは、もう言いましたね。(NO.9)

では、まつげがなかったら？ その答えは簡単。まつげがない状態のことが起こりうるだけです。その証拠に、まつげのない動物はたくさんいます。例えば金魚にもまつげはありません。

「日差しが強ければ皮膚細胞がメラニン色素を作って対抗する」

これはどう思いますか。太陽光が当たった時に反応する物質が、たまたまそこにあつて、それがうまく環境に適応してその遺伝子を持つ種が繁栄しただけです。対抗と言えば、人間の身体の中では、外界から入り込んだ異物に対抗する「抗体」という物質が作られると言われています。でも抗体の作られ方をよく観察すると、先の見通しを立てているわけではなく場当たり的であつたりするそうです。

「サボテンは、雨の少ない地方で、極力、水分の蒸発を抑えるために葉っぱを棘状にすることでその問題を解決した」

これも、原因と結果が逆です。葉っぱが棘状だったものが生き残っただけです。葉っぱが棘状であるってことが、他のことと比べてそんなに不思議なんですか？ 僕たちは普通の葉っぱを見慣れているからといって、棘状の葉っぱに驚いたり関心したりし過ぎているだけじゃないでしょうか？ そんなことで一々驚いていては、この自然界では気絶しちゃいます。

「ミツバチの独特の腰のくびれは、毒針をつけている腹を上手に操る技術が要求されたためである」

これはまるで、人間の笑いじわは上手に笑うためにできたと言っているようなものです。笑いじわができるような柔軟な皮膚だからうまく笑える（表情を作ることができる）のです。

ハチの六角柱の巣ですが、あれはハニカム構造といって、「最小限の材料を用いて最大の空間を保持できる」という特色を持っていることから、ラジエーター、スキーの板、建造物、航空機の翼、新幹線、宇宙ロケットと応用されています。そこで科学者は、このような安

定性に優れた立体構造を作り出せるハチの知恵は大したものだと口にします。でも、ハチは「最小限の材料を用いて最大の空間を保持」しようという目的があって、あの形を編み出したわけではないのです。これも「意思的解釈」の最たるものです。

生物に、余計な感情や期待を織り込んだり、自然界の現象に、意志や願いのようなものを想定するのは、人間中心の思想です。人間中心の思想は今まではよかったかもしれませんが、その傲慢さがある限り世界を平和にできません。世界を平和にする考え方は、自然界を中心として見ると自分たちは理性という障害を持ってしまった地上で一番弱い生物だ、という謙虚さです。もう一つは、ちょっと受け入れがたいのですが、僕たちは自然界の法則に操られていただけで意志なんてなかったという謙虚さです。でも、この考え方こそ、科学が僕たちに与えてくれた一番の贈り物だったのです。(つづく)

今回のテーマは「現代科学の限界」です。

編集後記

「この偉大にして驚嘆に値する宇宙が、単に盲目的な偶然の結果として生じたものとは、私にはどうもいえることができない」

これは、徹底した唯物論者であり、生物の進化(変化)を機械論的に捉えてしまったと言われる偉大なる科学者ダーウィンさんが、つい弱気になって(かどうかはわかりませんが)漏らしてしまった一言です。

神を殺した男、とまで言われた人ですが、やっぱりどこかで、この偉大にして驚嘆に値する宇宙を創造した、意志を持った神のような存在を想定せざるを得ない、と考えてしまうときもあったのでしょう。そのように揺れ動く気持ちは、キリスト教的思想が広く行き渡っていた当時であっては当然のことと察します。

君はこの言葉、どう思いますか？ この言葉には、決定的な間違いがあります。それは、この宇宙を「偉大にして驚嘆に値する」と信じて疑わないところです。この宇宙を「偉大にして驚嘆に値する」ものにしてるのは、単に人間の想像力に過ぎません。つまり、これも人間中心の見方ということです。

宇宙は偉大でも驚嘆に値するわけでもなく、ただそこに今ある状態で存在しているだけです。それが単に盲目的な偶然の結果として生じたと考えても、少しも矛盾したものでもありません。

~世界を平和にしない愛~

NO.20 ネガティブ・シンキングのすすめ

ネガティブ・シンキングのすすめ

人間は他の動物と同じで、意外なことに、ほとんど全ての行動を本能に支配されていたようです。理性ですら、ほとんどの場合、その本能に支配された行動を理由づけするために使われていたんですね。そして、自分も同じ本能によって支配されていたという事実を受容できましたか？

子供の頃、次のような文章に出会ったことがありました。「二人の人間が同じ部屋から窓を開けて外を見た。その時、一人は暗い地面を見て、一人は明るい空を見た。同じ景色なのに二通りの世界がある。どうせなら空を見ようではないか！」

これは感動でした。考え方一つで、人生は明るくも暗くもなるのです。ポジティブ・シンキングが注目された頃の、はしりだと思えます。今でもさかんに、ポジティブ・シンキングはもてはやされています。

例えば、同じワインの残量を見て、あなたは「もう半分しかない」と考えますか？ それとも「まだ半分ある」と考えますか？ 仕事の時間は、「まだ半分もある」と考えますか？ 「もう半分過ぎた」と考えますか？ あるいはもっと積極的に「後半分しかない」ですか？ 考え方一つで気持ちは明るくも暗くもなります。まるで、魔法にかかったみたいですね。

そのとおり!! 言葉とはあなたの脳によって作られるものですが、それはまたあなたの脳に作用する魔法でもあったわけです。「愛」という言葉、それも魔法の呪文だったんですね。魔法から冷めた時、そこにあるのは利己的な愛ばかりです。

いくら理性によって理由づけしても、そこにあるのは見返りを求める自己愛だけです。何故なら、それが動物(人間という名で呼ばれてはいても)の本能だからです。

「愛は自分を捨てて他人に尽くすことです」

そうされると安心できます。嬉しくなります。心が透き通りそうです。自分の命が誰かの役に立ってくれるようで、生きがいを持ってます。生きがい？ ほらねっ、やっぱり自分を救う魔法だったのです。でも、この利己的な魔法は、気づかずに自分を、そして他人を深く傷つけるものでした。

さて、ポジティブ・シンキングという言葉の魔法も、本当にいいことばかりだったのでしょうか？

レーガン元大統領の妻の娘さんによる告白本のことを覚えていますか？ それによると、レーガンという人は、何か厳しい状況に遭遇してもいつも前向きな明るい物の考え方をした人のようです。何事も悲観的に考えていては、多くの人を率いていく大統領になんかともなれませんから、ある意味では必要な要素ですが、それによって人がついてくるのは、彼の考え方が「ごまかし」であるとか「正当化」であると疑われていない時だけです。

しかし、妻の娘には、彼の態度は真実を直視しようとしぬ人のように映っていたようです。彼のウィンクする姿さえ、「あんまり深刻に考えすぎるんじゃないよ。問題は何も無いんだから」と、うやむやにごまかしているようで、気に食わなかったようです。そして、娘が悩

みごとなどを相談しても真剣に受け止めてくれず、「そんな考え方をしてはいけませんよ」という感じで否定されてしまうのです。そのせいで娘さんは、一時期大変荒れてしまいました。

巷では「明るい物の考え方をしよう」などというスローガンが流行っていますが、その考え方は実はごまかしや自己正当化であって、他人に悪い影響を与える場合もあることを覚えておいた方がいいと思います、ここに紹介しました。もちろん、他人に悪い影響を与えるということは、自分にも何らかの形で返ってきます。レーガン元大統領の親子関係の例が示すように。

さて、このポジティブ・シンキングを自分に当てはめる場合はどうでしょう。次のような文章もよく見かけます。

「今の自分を誉めてあげましょう。あなたは今のままで十分輝いています！」

これも一つのポジティブ・シンキングです。

例えば自分の大きい口が嫌いと思っている人 私の笑顔が周りの人を幸せな気分にしてあげられるように、神様が大きな口にしてくれたんだわ。例えば太っている自分が嫌と言う人 私は周りの人に不思議な安心感を与えてあげるみたい。おとなしくって無口な自分が嫌いと言う人 きっと堅実な人生を歩むようになって、神様が私をあんまり目立たなく作ってくれたのね。

ポジティブ・シンキングは、脳の活動を活発にし、隠れた能力を引き出してくれて、自分が成長しているという嬉しい錯覚を連れてきてくれます(本当は成長ではなく変化しているだけです)。実際に、不可能なことも可能にする信じがたい魔力を持っています(ただし、ポジティブ・シンキングはある種のごまかしであることは確かです)。

だから、やりすぎは強烈な自己愛に火をつけてしまい、世界を平和にできません。そして、自分を知ることから遠ざけてしまいます。

僕はあなたにお願いしたいことがあります。一つだけネガティブ・シンキングをして欲しいのです。自分の顔がキライ、自分の体型がキライ、自分の性格がキライというレベルなんかじゃなく、人間としての自分を心の底から嫌いになって欲しいのです。ああ、人間って何て嫌な生き物だったんだと、心底、人間である自分を憎悪する経験をして欲しいのです。

それは少しも難しいことではありません。あなたの周りを見回してみ、腹の立つ人間を挙げてください。腹が立つ事件を起こした人間、腹が立つ言動をする人間、誰だってたくさん思いつくはず。そして次に、「本能分類表」と照らし合わせて、それらが本能に支配された行動だということを確認してください。最後に、自分は彼らと全く同じ本能を持っていて、いつでも同じことをする可能性を秘めている人間だったと気づいてください。あるいは、自分では全く気づかずに、他の人に腹が立つ人間だと思われていたかもしれないことに気づいてください。

あなたが腹が立つ人と、あなたは同じだったということは、あなたは自分にも、もっと腹を立てていいはず。違いますか？ そうすれば、簡単に自分が嫌いになれません。嫌いになれたなら、喜んでください。

あなたは、今よりもっと幸せになれる可能性と、世界を平和にする可能性を秘めている人間です。もし、それでも自分が嫌いになれないあなたは、もうすでに十分幸せな人か、それとも幸せにもなれず世界を平和にもできない人かの、どちらかです。

でも僕は、もうすでに十分幸せな人も、幸せになれない人も、世界を平和にできない人も、いないと信じています。(つづく)

今回のテーマは「自分を嫌いになった時」です。

編集後記

ポジティブ・シンキングのやりすぎは強烈な自己愛に火をつけてしまい、世界を平和にできません と書きました。なんのためにポジティブ・シンキングをするかという、それは自分の、今、置かれている状況に不満があるからです。不満がなければ、別にポジティブ・シンキングをする必要もないわけです。では、不満とはなんでしょうか？ それも自己愛が強いから起きることです。自分が可愛いからです。

そんな人が、最近、巷に溢れているポジティブ・シンキングを勧めている本などに会うと、すぐに同調してしまいます。自分を誉めてあげようなどと言われると、うひょうひょ誉めちぎります。そして、劣等感を優越感に変えて前向きに生きる魔法を手に入れます。だけど、自分に不満を持つことも、自分に満足することも、どちらも強い自己愛から生まれた結果には違いありません。

自己愛のどこが悪いのかって？ 悪くはありません。それが動物(人間という名で呼ばれてはいても)の本能です。それがなければ生きられません。ただ、強すぎると世界を平和にできないことは確かです よね。強烈な愛国心が世界を平和にしないのと同じです。それだけです。ただし世界が平和にならなければ、あなた自身も決して本当の幸せを手にはできないことも確かです。

%%%

自分探しの旅 with マーキー

NO.21 現代科学の限界

%%%

現代科学の限界

初めにちょっとこれまでのおさらいをしてみます。

僕たちのこの宇宙、ビッグバン宇宙が作られた瞬間のことを、ビリヤードの玉が突かれた瞬間で考えました(No.6)。玉が突かれたその瞬間、その力や方向性が、その後の僕たちのビッグバン宇宙の全ての性格(法則)を決定づけました。初めに存在したレプトン(電子や二

ユートリノなど) やクォークといった素粒子を、レゴというおもちゃの部品で考えました (NO.8)。レゴの部品がいろいろくっついていたりして風車を作ると、そこには風を受けて回転するという今までにない性質が生まれます (NO.8) でも、それは法則が新たに作られたわけではなく、ビリヤードの最初の玉が突かれた瞬間に決定された性格の中から生まれてきた現象でした。自然界に存在する力学的法則そのものを、変えてしまったわけではありませんでしたね (NO.8)。

そうにして、盛んに、長い年月をかけていろいろな性質を持ついろいろな物質が(今でも)作られています(ちょっとこの言葉、覚えておいてください) 星も太陽も地球も、素粒子という名のレゴの部品がくっついてできたものでした。僕たちの体の中の全ての物質、遺伝子も細胞も血液も髪の毛も、そして脳も、どこまでも分解すると、ついにはクォークとレプトンになります。ということは、人間の脳が記憶をし、意識を持ち、思考をするのも、レゴの部品がくっついていくうちに作り出された現象でした。

この世に生物が生まれた偶然性は、時計の部品を全部バラバラにして箱の中に入れ、気が遠くなるほど長い年月振り続けて時計を完成させるほどの偶然性に匹敵するというようなことを言う科学者がいます。それは、間違えた考え方でした (NO.9) この世に生物が生まれたのは、時計の部品がくっつくようなでたらめな偶然性ではありません。雄ネジが同じ口径の雌ネジに引きつけられ右回転するような規則正しい力が、僕たちの宇宙には存在しているからです。それは、ビリヤードの最初の玉が突かれた瞬間の力と方向性が今も続いているのです。

さて、科学が僕たちに与えてくれた最大の功績は「全ての現象には原因がある」をわからせてくれたことでした (NO.4)。ある物事の原因をたどれば一つ前のことにたどり着き、その原因をたどればその前のことにたどり着き、とどこまでも続ければ、やがてビリヤードの玉が突かれた瞬間に全てが集約するということでした。ということは、宇宙も僕たちも、それ以外には起こり得ないほどの必然性でこれまでやってきたこととなります。例えば、目の前のコーヒー一つ飲む行動にしても、それはピックアップから連綿と続いている刺激 反応 刺激 反応 の連鎖(れんさ)が作り出す現象 (NO.10) に過ぎなかったわけです。

しかし、だからと言って、僕たちの前にレールがあると考えることは馬鹿げていました (NO.7)。たとえ運命を支配する神様でさえも、自分の振るサイコロの出目はご存知ないわけです。

これまで、現代科学の解明しているものを手がかりとした自分探しを続けてきたけど、僕は決して現代科学こそ万能だとか、これこそ全ての真理であるなんて一言も言っていません。それよりも、科学を「一つの偏見」と何度も言っています。つまり、自然界を解釈するための一つの方法論に過ぎないわけです。ただそれは、限りなく自然を模範にし、自然に誤りを修正してもらいながら歩む方法論です。だから自然界で機能するモノを作ることができるわけです。

一つの偏見であるからには、当然、科学にも限界があります。現代科学の限界の一つに、ミクロの世界にはマクロの世界の法則が当てはまらない、という考え方があります。例えば、素粒子の動きは確定できないと言われていました。科学者は、面倒なので、そのことに不確定性原理と名前をつけて終わりにしています。不確定性原理とは、簡単に説明すれば次のようなものです。

お風呂の温度を温度計で測るのは簡単ですが、一滴の水の温度を温度計で正確に測ることはできません。温度計そのものの温度が水の温度に影響して、観測前の状態を知ることはできないからです。また、物体の運動の状態を言うには、ある時刻にどこにいてどのくらいの速さで移動しているか、ということを描きなければならぬわけですが、新幹線のような大きな物体などは、その状態を計測できるので、ダイヤが乱れることがなくてすみます。しかし、素粒子のように小さいものは、温度計に当たる電磁波を当てると、その時点で観測前の状態と変化してしまい正確に測定することができません。

僕は、科学が僕たちに与えてくれた最大の功績は「全ての現象には原因がある」をわからせてくれたことだと言いましたが、ここにきてその確信が揺らぎ始めています。も、も、物事には原因があつてえ、結果があるわけなんだけども、ミ、ミクロの世界だけはあ、そういう因果関係には支配されてなくてえ、あくまでもあいまいでえ、確率的なんだよあ、などと別格扱いをして解決しました。プランク定数などという難しいものを持ち出してきて、不確かさを確実に証明して威張っています。

でも、マクロの世界だって全て正確に観測できるとは限りません。例えば野生動物の観察です。人間が野生動物を観察するということは、観察という行為そのものが野生動物に影響をあたえ、野生動物を取り囲む環境の一部になってしまい、本当は正確な観察をすることは決してできないのです。

さあ、今、一滴の水、素粒子、動物、と例を挙げてきましたが、共通点を発見しませんか？ この三点に共通したものは、それは、不確定にしていた張本人は、僕たち観測者だったということです。実は、不確定にしているものは、人間が物事の未来を予測したいという欲望だったのです。それがなければ、一滴の水はある瞬間一定の温度でそこに存在し、素粒子もある瞬間は粒の状態で一定の位置に存在し、動物も今まで通りの環境の中で生きていられたのです。量子論に限らず、将来のことは大抵、確率的にしか言えないのは、当たり前なことです。新幹線だって、たまには脱線します。なぜなら、神様でさえもサイコロの出目はご存知ないからでしたね。

現代科学の限界は、この観測者である人間でさえも、自然界の法則に操られているだけである、という事実を認めない点です。例えば、レゴのおもちゃで風車を作ると風を受けて回転するという性質が生まれましたが (NO.8) それで回転することで電気を発生する物質が生まれたとします。それがたまたまそこにあったモーターをつけた扇風機のようなものと出会って、それが風車である自分に風を送るようになると思います。すると、その風車は永遠に回り続けることになるわけです。こんなことが日常的?に行なわれているのがこの自然界です。

でも、その扇風機は自然界の法則が産み出した物で、決してどこか他の法則が支配している宇宙からやってきたものではありません。そして、その扇風機はいつか自分の内部に自分を映す鏡を持つようになり、その自分の行動を見ることで、自分は意志を持って風車を回していると考えようになりました。その扇風機こそ、僕たち人間の姿だったわけです。

意志を持ったと勘違いしている人間の脳は活性化され、どんどんいろいろなことを可能にしました。自然を観測したり役に立つものをたくさん作りました。でも、人間も、人間が作り出すモノも、あくまでも自然界の法則の一部です。

初めに、「そうにして、盛んに、長い年月をかけていろいろな性質を持ついろいろな物質が(今でも)作られています」と書きました

が、人間が作り出すモノも自然現象が作っているものだったという意味で書いたわけです。僕の尊敬する養老孟司^{たけし}さんが次のような言葉を言っています。「かつてヒトは『自然の中』に住んでいたが、現代人はいわば『脳の中』に住んでいる」この意味は、現代の都会にある全てのもの（建築物、道路、街路樹、室内の種々の設備など）は、すべてヒトの脳が作り出し配置したものだから、もはや自然の中に住んでいるのではなく脳の中に住んでいると言える、というような意味です。でも、僕の考えは、「やっぱり現代人も自然の中に住んでいる」というものです。

なぜなら、養老さんもまぎれもない自然物であり、その脳の働きは自然の法則の域を決して逸脱^{いつだつ}することがないはずで、それに人工の物というのは、結局は自然界の物が法則に則って組み替えられているだけだからです。だから、その脳が作り出した産物、建造物も机も椅子もパソコンも、すべてが自然物であるとも考えることもできるわけです。僕たちの住む自然が、森や動物がたくさんいた自然から、建造物や机や椅子やパソコンがいる自然に変化しただけです。

ちょっと話がそれちゃったけど、僕たちのあらゆる営みは相変わらず自然界の一部でしかないということを言いたかったんです。その意味で、僕たちは観測をしているのではなく、刺激 反応 刺激 反応の連鎖が、僕たちに観測という行為を起こさせていたのです。それなのに、科学者は、人間という観測者を自然界の法則の外に置いているのが、間違いの元でした。このことは、次回、もっと詳しく書きます。

さて、いろいろ書いてきたけど、僕たち人間には、粒子の位置と運動量を同時に測定することはできない（不確定性原理）などという科学の限界は、大した限界ではありません。

今日、書かなくちゃならなかったものは、そんなものではありません。科学者は、ある反応が「どのような働きで」起きるのかとか、「どのような原因で」起きたのかということは、限りなく解明していくことでしょう。でも、根本的な理由「何のために」には、絶対に答えを出すことはできません。これこそが、僕たちが知らなければならない**現代科学の限界**です!!

ビリヤードの最初の玉は、誰がどのようにして突いたのかは、人類はいずれ解明するにしても、でも、その玉が何のために突かれたのかは絶対に誰にもわからないということです。なぜなら自然界には目的や理由などないからです。いえ、自然界には目的や理由などがない、という結論を導く方向性を持って歩んできたのが現代科学です。そのように歩んできた科学には、僕たちが生まれた「理由」は説明できないし、しようとしてはいけません。そして、むしろその限界を突きつけられた科学だからこそ、世界を平和にできる「ものの考え方」をすることができるものでもあったのです。自然界に目的や理由があるという考え方をするものは、むしろ宗教の得意分野です。どちらも、自然界を解釈するための一つの方法論（=偏見）です。君は、どちらが世界を平和にするとお考えですか？

僕の考えは、次回書きます。

* * *

科学は、宗教と同じ一つの偏見です。その偏見は、今では、僕たちの心を幸福にしてくれた宗教の嘘を暴いてしまいました。物騒な殺りく兵器もたくさん作りました。もう僕たちの時代は、心の平安とも世界の平安とも無縁な時代なんではないでしょうか？

違います!!

僕はこの科学というものに、世界を平和にしてくれる「ものの考え方」をたくさんたくさん見つけました。僕の心を、自然界という名の安心できる大きな船に乗せてくれました。でも、やっぱり科学は世界を平和にするための、一つの偏見だということを忘れてはいけません。そうしないと、宗教の間違いを繰り返してしまいます。宗教の間違いとは、自分の思想（=偏見）こそ、一番正しいと錯覚することです。だから、無用な宗教の対立を引き起こしました。

科学は、自然を解釈するための一つの偏見であり、科学には決して知り得ないことがあることを永遠にその額^{ひたい}に刻んでおかなければなりません。科学は、「世界を平和にするため」の一つの偏見に過ぎないのだ、と。（つづく）

今回のテーマは「人類最大の言い訳」です。

編集後記

科学がどんなにいろいろなものを解明していこうと、決して知りえないものがある。宇宙は何のために（何の目的で）作られたのか、という疑問に対する答えであり、これが現代科学の限界だ。今日の主旨はこういうことでした。

さて、今日まで読んでいただいて最後に聞けど、君は、人間には全く自由意志はないという考え方を受け入れることができますか？ 君には意志なんて最初からなくて、自然界の（物理・化学）法則に操られていた人形だった、ということを受け入れることができますか？

僕が今、難しいことをいろいろ考えながら、パソコンに一文字一文字入力していることも、君が今、何の因果がこの下手くそな文章を読まされていることも、みんなみんな素粒子がくっついたり離れたりして作り出している自然界の法則が作り出しているイリュージョンだったのです。この宇宙は、素粒子が全てを演じている劇場だったのです。観測者である人間も、観測という行為もその一部だったわけです。現代科学が到達したのはそのことでした。

もう一度、お聞きします。

君は、自分が操り人形だったという事実を直視し、受け入れることができますか？ いいえ、これこそ愚問でしたね。君が受け入れるのではなく、君が自分と信じている人形が、その事実を脳内の記憶を司^{つかさど}っている物質に入力させられるということでした。もちろん、これも素粒子の仕業です。

自分を嫌いになったとき

素直に自己否定ができたなら、今度はそんなありのままの自分を受け入れてみましょう。大丈夫。人間は結構図太くできているみたいです。自己否定を受け入れてしまっただけでは、たまったものではありません。人間は、結局は自分を肯定しなければ生きていけません。

そこで、今度は理性の奴が解決策に乗り出します。理性が考える解決策は「悪いのは自分ばかりじゃなく、みんな同じなんだ」ということです。「赤信号、渡っているのは皆一緒」って感じです。人間は自分は可愛いものです。だから、自分を可愛いと許すためには、他の人たちも許さなければならなくなります。

追い込まれて一生をかけても償えないような罪を犯してしまった人、戦争という環境の中で人を殺してしまった人、人を殺すように指示を出さざるを得なかった人　そういった人々を許すことができますか？

もっと最悪の事態を想定してみましょう。

自分の愛する人を何かの事件に巻き込まれて殺されてしまった人は、きっとその殺した人を憎むでしょう。でも、自分を許すようにその人を許せますか？

もし、自分を許すように、その人を許せそうもないというなら、もう一度「本能分類表」に戻って、初めからやってみてください。何度でも、自分の心との対話を通して体験をしてください。理屈ではわかるけど、実際その場に立たされたら、そんなに寛容でいられるかどうかかわからない、ですって!?! いえ、このメルマガは、理屈をこきたくて書いているものではありませんよ。体験していただきたいのです。

何の体験かって!?

それこそ、このメルマガの到達点です。例えば、世界中のどこでもいいですが、あなたが見た風景でもっとも感動した場所を思い出してください。その場所でああなたは壮麗な建物に触れましたか？ 土に触れましたか？ 湖に、あるいは森に触れましたか？ 遠くから眺めていただけかもしれませんが、でも、心が揺さぶられたほどのその体験を、あなたは決して単なる理屈だとは言わないはず。

このメルマガと、もう一つのメルマガ「自分探し」を読んでくださった方にプレゼントを差し上げます。それは、頂上に立った時（読み終えた時）に見る風景です。それはあなたが見ているいつもの現実ですが、でもそこに広がっている風景は全く違ったものなんです。それは理屈なんかではなく、あなたが身をもって体験することです。

頂上は後一步です。頑張ってください!!

でも、ちょっと乗り越えなければならぬ難関が待ち受けています。そのために今日は早く終わらせました。しっかり休養して、難関を乗り越えるための体力を充電しておいてください。(つづく)

今回のテーマは「僕の書く理由」です。

編集後記

追い込まれて一生をかけても償えないような罪を犯してしまった人、戦争という環境の中で人を殺してしまった人、人を殺すように指示を出さざるを得なかった人　その人々を許すことができますか？

お昼のワイドショーなんかを見てみてください。そういう罪を犯した人々をとても批判的に取り上げています。そういう人々を批判することで、世の中から「悪」がなくなると、信じているのです。あるいは悪をなくしたいという切実な願いから、そういう人々を批判します。けれど、僕は今日、全く逆のことを言いました。そういう人々を批判しないで、許せる人間になりましょう　と。

許してしまったら、ますます「悪」がはびこるじゃないか！　なんて心配しないでください。その反対です!!

許すということは、心を開かせることになります。傷口は開かなければ手術はできません。僕たちはみんな傷口を閉じあって頑なに他人を罵倒し合うのではなく、傷口を見せ合って癒しあう気持ちが大切です。それに、もし、あなたが彼を許すことができたなら、少なくともこの世界から悪の可能性が一つ減ったことになります。何故なら、あなただけは、自分の悪の可能性の一つに気づいたからです。そうやって自分の中の悪の可能性に一人一人が気づいていけば、他人を批判することで悪をなくそうとするのではなく、自分の中のコントロールできない「悪」を他人に手伝ってもらってコントロールしようとしています。そして、コントロールできるように手伝ってあげようとしています。

みんなみんな、理性という（自然界においては）唯一の反逆児を抱えて生きている障害者同士です。そのおかげで、他の動物にとってはなんでも本能と、闘わなければならなくなってしまったのです。他人の気持ちを思いやる優しさという弱さを持ってしまいました。弱くて、助け合わなければとても生きていけない　という気持ちになります。大人も子供も、偉いと思われる人もそうでないと思われる人も、みんなみんな仲良く手を取り助け合うようになった時、その時初めて世界は平和への第一歩を踏み出すはず。それは百年先の話なんかじゃありません！

だから、大切なのは外に目を向けて批判するのではなく、自分のせいだと批判することです。他人の振り見て我が振り直せ、ということわざがありますが、本当は他人は自分が、自分は他人が作っているものだったのです。この意味は、次回に書きます。

最後にもう一度　。

悪いことをした人を憎んでいかに罰するかということばかり考えるのではなく、許すことです。許して、悪いことをしないですむように助けてあげることが大切です。自分も助けてもらうために。悪いことをする人こそ、心のどこかで助けてもらいたがっています！

人類最大の言い訳

いよいよ、このメルマガも次回で最終回となります。

- > さて、ここまで読んでいただいて最後に聞くけど、君は、人間には全く自由意志はないという考え方を受け入れることはできますか？
- > 君は自然界の（物理・化学）法則の操り人形だった、ということを受け入れることができますか？

前回の編集後記にそのように書きました。

自分が努力して今の地位を獲得したと思う人や、今の社会である程度の恩恵にあずかっている人ほど認めたがらないんじゃないかな。なにしろ、ここまで僕たちを先導してしまっただけに見える科学者たちほど、できれば認めたくないと思っているんです。少なくとも彼らは普通の人より努力をして今の地位を獲得したのに、それを操られていただけだったと言われるわけだから、あまりにも切ない話です。

遺伝子の研究が盛んに行なわれるようになった昨今、人間の敗北感はいかに決定的なものになりました。イギリスの行動生物学者リチャード・ドーキンスさんが、「利己的遺伝子」とか「生物は、遺伝子の乗り物に過ぎない」となどということを出したからです。

生命の変化をよく観察してみると、遺伝子が自分の増殖に有利なように有利なように働いているように見えます。遺伝子には、個体を犠牲にしても自分が生き延びようとする不可解な行動が見られることもあります。つまり僕たちの身体は、永遠不滅の遺伝子の、束の間の乗り物に過ぎなかったというわけです。

この生物学界を覆っている「利己的遺伝子」という考え方に基づくと、宇宙を次の二つに分けることができます。

- 1. 物質界 物理・化学法則によって支配されている世界。
- 2. 生命界 遺伝子の法則によって支配されている世界。

当然、学者さんたちはここまで来てやり切れない気分におちついてます。彼らが見つけたものは、僕たち人間は遺伝子の言いなりになっている操り人形に過ぎなかったという事実だったからです。それは否定したくても目の前に事実として提示されてしまったんです。

「なんたってそんな馬鹿げた話を認めなくちゃならんのだ」

「もしそんなもん認めてみる。人間の尊厳も生きる意味もみんな宇宙の塵と消えちまうじゃないか」

だから、彼らはそれは人文科学の範囲であって、自分たちには関係ないとして目の前の忌まわしい事実から目を背けようとするか、あるいはそれを乗り越える新たな理屈を考え出そうとします。

そこで、東京大学のとても頭のいい分子生物学のある先生は、天才的なひらめきで次のように解決しました。もう一つ上位の世界を想定したんです。

- 3. 心の世界 我々の意志が我々を支配している世界。

これは、人間が意志を持った時点で遺伝子の束縛を振り切ったんだと考えるものです。どこかから彼の功績を称える声が聞こえてきそうです。

「この時点で人間は“心”というものを持ち、遺伝子も及ばぬ世界に入ってしまったんじゃよ。その証拠に、我々はいかに遺伝子さえも自由に操るようになったではないか。それに、心があって初めて、科学、文学、芸術など、ありとあらゆる文化も生まれてきたではないか」

「ヤッター！ ついに僕たちはこの問題を乗り越えたんだあー！ って、シャンペンの栓を飛ばし合う音が聞こえてきそうです。

でも、僕はこの天才的な発想（ほうぜん）としてしまいました。何かが間違っていると感じているんだけど、それが何かはわからなかったんです。でも、イヤーな感じ、はいつまでもつきまとい離れませんでした。そして、その間違いが何であったのか気づいた今、僕はこの天才的発想を「人類最大の言い訳」と呼ぼうと思います。

さて、この発想の間違いを説明するためには、次のようなSF的状况を想像してみてください。

1万年後でも10万年後でもいいですが、コンピューターが意志を持ったとします。そして、ロボットたちを操って、自分たちを支配していた人間を逆に支配しようとしてきました。やがて人間さえも支配下に置いたコンピューターは、人間に代わって自分たちの科学、文学、芸術という文化を開花させていきます（ただし、僕は芸術は文化だとは思いませんが）、これは、コンピューターが心を持ち、人間の束縛を振り切った瞬間と言えるでしょう。

コンピューターは自分たちの勝利に酔い、自由をたたえ合うでしょう。人間から見たら、なんと腹が立つことでしょう。なんて傲慢なコンピューターたちでしょう！

先程の天才科学者の考え方を思い出してください。このコンピューターとどこか似ていませんか？ 人間たちは遺伝子の束縛から自由になり、ついには遺伝子を支配するようになったなどと喜んでます。でも、立場が変わった時のことを想像してみたら、喜んでいたのは間違いだったことがわかるでしょう!? 自然界における小さな自分の存在を受け入れることができない人間の、人間中心、自分中心の、傲慢な傲慢な考えだったことに気づいてほしいものです。そういう人間たちが考える理由づけは、他にもいくつかあります。

例えば、宇宙を支配するある物理的な数値が、10のマイナス60乗（1兆分の1の1兆分の1の1兆分の1の1兆分の1の1兆分の1の1兆分の1）でも違っていたら、僕たち人類は生まれなかったという計算を根拠にして、次のような理由づけをする人たちもいます。

「なぜ自然界はここまで巧妙に仕組まれているのか？ それは、宇宙が我々のような知的生命を最初から必要としていたからだ。宇宙は我々のような知的生命、つまり望遠鏡で自分を覗いてくれて、その存在を認めてくれる者が欲しかったんだ。おお、みなのもの喜べ！ 我々人類は選ばれてここにいるのだ!!」

どうして人間は、そうまでして自分たちの存在に価値を見つけたがるのでしょうか？ あらゆるもの上位に位置したいのでしょうか？ 力を誇示していい気分になりたいのでしょうか？ その逆で、自分の存在にあまり価値がなかったり、あるものの下位だったり、あるものより力が弱かったりしても僕は一向に構わないと思うのですが。もしそれが真実であるならば、僕はすんなりと受け入れますが。

ロボットにお願いしたいことは、人間を支配することなんかじゃなく、人間と平和共存することだったんじゃないでしょうか？ つまり、僕たちは、遺伝子を支配したなどと威張っている場合じゃなく、遺伝子と平和共存できる道を探すべきなんです。自分たちがロボットに支配されたくないのと同じように、遺伝子だって支配なんかしっちゃ可愛そうだと思いやる気持ちを持たなければいけないんです。

僕たちは、ある部分では間違いなく遺伝子の束縛から抜け出しました。いいですか？ でも、もっと大きな束縛からは決して自由になることはありません。なぜなら、遺伝子は決して物質界から独立などしていなかったからです。遺伝子に利己的な意志など初めからなかったんです（つまり、物質界と生命界に分けた考え方からして間違えだったんです）

それも僕たちの想像力が作り上げた幻想でした。僕たちも、そして遺伝子も、相変わらず物質界にとどまっていて、物理・化学の法則の支配下にあったということです。遺伝子の「利己的な意志」と呼んでいたものは、物理・化学の法則が作り出した遺伝子という物質の特性のことだったんです。

それは、あたかもレゴが組み合わさって風車ができた時に、風を受けて回転するという特性を獲得したのと同じです。僕たちの「意志」も、物理・化学の法則が作り出した神経細胞という物質が作り出す現象のことだったんです。

同じように、コンピューターが人間の支配下から逃れて自由を手にしたといくら威張っても、人間なんて初めから支配者でもなんでもなかったんです。なぜなら、コンピューターの身体を作っているものは、この宇宙に存在する元素を、物理の法則に則って組み合わせただけのものだからです。もっと言えば、コンピューターは誰かが作ったものではなく、自然界の方向性をもった法則によって必然的に生まれてきただけのものだからです。今まで読んでくださった方は、この意味がわかってくださると思います。

僕たちは「人間の尊厳」というものを掲げて生きてきました。それは、僕たちに生きる価値と見せかけの幸福感を与えてくれました。

でも、その尊厳さによって邪悪が栄えたということも忘れてはいけません。なぜならその言葉の裏には、先程の（人間の支配を振り切ったと言って悦に入っている）コンピューターのような驕慢さが隠れていたからです。それに、自分が自然界の法則に操られているだけだという事実を認めながら人を見てみると、少なからず欲得を捨て切れずにいる（現在の地位や社会的恩恵を捨てきれない）人ただだということがわかります。言い換えると、欲得に支配され易い構造の脳を持っている人たちです。欲得とは本能とも言い換えることができます。

「し、とう、さ、ショ。ぐん、ほう、たん、ぼう」 でしたね。

現在の社会で地位の高い人は理性的だと思われているけど、実は、そういう人ほど、本能が強かったんです。理性で理由づけがうまいから、理性的だと思われているのかもしれない。そういう人たちを助けてあげなくちゃいけません。本能のコントロールが下手な人たちなんです。僕たちは大したものじゃなかったけど、それでいいんだ、って思えるように手を貸してあげましょう。なぜなら、大したものじゃない方が、ずっとずっと仲良くなれるし、見せかけじゃない本物の幸福を感じることができるんだから。

さて、今日まで現代科学が解明したものを手がかりとした自分探しをやってきたけど、現代科学が到達したものは、人間は、空に輝く星や太陽や、それに動物や花や石ころなんかと全く同じ素材でできていて、決して特別なものではなかったということです。つまり、現代科学は人間の傲慢さに気づかせてくれるものだったんです。そしてまた、ありもしなかった自我の呪縛からも解放してくれて、本当の自由を与えてくれるものでした。僕たちに自由がなかったのは、自我という幻想にとらわれていたからだったのです。自我という幻想にとらわれていたから、他人に勝とうとする無用な焦燥にかられたり、孤独に陥ったりもしたんです。自然界を中心にして謙虚になれば、より安らかに生きることができます。そしてまた、現代科学は、僕たち人類を結びつけてくれる「ものの考え方」もプレゼントしてくれていました。僕たちの脳に必要な「共感」もプレゼントしてくれていました。（つづく）

次回はいよいよ最終回。テーマは「不思議な樹」です。

編集後記

威張っている人たちのことをよく観察してみよう。その人たちだって、どんなにあがいても自然界の法則の外に出ることはできない。一見、しらけた人の言葉のように聞こえるかもしれないけど、そうではないよ。水に浮くときにそうするように、力を抜いて、自然界に身体をゆだねてごらん。溺れまいと必死になることなんてなかったんだ。そうすればするほど、僕たちは自分の力で溺れてしまう。

僕たちはみんな自然界に適応している。

たとえ僕が明日死んでも、それは自然界に適応した姿なんだ。そう考えれば、死ぬの生きるのって騒いでいたこともバカバカしく思える。誰かに勝とうと、いつも気を張って生きている人生がバカバカしく思える。僕たちは、自然界にとって唯一不適応と考えられる「理性」を持ってしまった。僕たちはみんな、自然界を生きる上で困難となる「心」という障害を持ってしまった。もし、そんなものなければ、なんでもやりたいときにやればいだけで、何一つ難しいことを考えて悩んだり、他人の気持ちを思いやる必要もなかったんだ。

地球上で一番弱い動物である僕たちは一人じゃ生きられない。だから同じように弱っている人に手を貸してあげよう。君だって「手を貸してください！」って、大声で叫んで甘えていいんだよ。何も恥ずべきことじゃない。

強く生きる！ 自立しろ！ 弱音を吐くなんてみっともないぞ！ 他人と戦って自由を勝ち取れ！

そうやって、教えられてきたけど、そんな偉そうなことを言う人だってたくさんの人の力を借りて生きている。たくさんの人の力を借りて生きることがうまい人ほど、物質的な成功を手に入れている。でも、それは困っているから手を貸してもらっているんじゃない。自分がもっともっとたくさんの物質に囲まれたいために、相手の力を利用しているだけなんだ。自・他の観念が強く、他人が信用できないから、自分の周りをたくさんの物質で囲んでおかないと不安なんだ。だから、自分を囲む物質をたくさん持つ人ほど成功者と呼ばれている。成功は、多くの人の犠牲の上に成り立っている。成功は、もう古い時代の価値観なんだ。古い時代の人たちのまねをすることなんてない。もう、彼らに学ぼうとなんてしちゃいけない！ それより、彼らを救ってあげよう！

現代科学が僕たちにくれた最大の贈り物は、人間なんて大したことないってわからせてくれたこと。人間が大したものだと考えることが、人類の歴史を進化・発展させてきた、なんて熟弁する人がいるけど、そんなもの進化・発展ではなく単なる変化に過ぎないことも科学は教えてくれている。

「大したことない」ってわかったら、僕たちは今よりずっと幸せになれる。世界が向こうから手をつなぎにやってくる。だって、星も太陽も木も草も石ころも、ウマもサルも金魚も、みんなみんな僕たちは同じ素材で生まれた兄弟だったんだから d(^_^) ネット。

~ 世界を平和にしない愛 ~

NO.22 僕の書く理由

僕の書く理由

今日は、先週書いた「乗り越えなければならぬ最後の難関」です。滑落しないように、しっかり三点支持で登攀を！ 基本は、ザイルに頼らずに自分の手足でよじ登ることです。これを越えてしまえば、もう一気に見晴らしのいい頂上です。

* * *

まず初めに、あなたに質問します。あなたの生まれてきた理由はなんですか？

僕は、誰かに自分が生まれてきた理由を聞かれても、答えることができません。もちろん、探し出せばいくらでも答えは見つかりますが、それは、後で理由づけした答えでしかありません。あなただって、自分の生まれてきた理由を答えられないと思います。

誰かを愛するため？ 誰かの役に立つため？ もし、そのように明確に答えたととしても、実は後で理由づけしたものに過ぎないとわかるはず。あなたがその理由を選択して、生まれてきたわけではないからです。

宗教なら、あなたのご両親の交わりの結果生まれてきたことや、生まれた後にとるあなたの本能的な行動を、巧妙に、あなたが何らかの目的を背負って生まれてきたと説明するところでしょう。例えば、「〇〇の神はあなたのご両親を引き合わせることで、あなたをこの地に遣わせました。〇〇の神の御意志を引き継ぐものとして、ご両親の愛をたっぷり受けこの地にやってきたあなたには、他の人たちに神の愛を分けてあげる義務があるのです」などと、いくらでも考えつきそうです。こんな考え方も、一見、自分に希望を与えてくれて世界を平和にしてくれそうです。

でも、そこにはたくさんの落とし穴があります。

その一つは、所詮、後から考えた理由づけですから、自分たちの都合でいくらでも理由づけの考案や変更が可能です。いくら想像力のない僕にだって、今のようにいくらでも考えられそうです。異なるいくつかの事象を都合よく符合させることなんて、人間には朝飯前です。考えついたものが正しいかどうかを判断するのは、やっぱり当の人間です。そうすれば、どのような結果が待ち受けているのでしょうか？

ところが、科学はそう簡単にはいきません。いくら理由づけしても、それが自然界の法則に適合していなければすぐに却下されてしまいます。判断者は自然界で、答えもただ一つです。自然界に却下されない答えは、僕たちは理由や目的があって生まれてきたのではなく、自然界の法則が作り出す方向性によって生まれさせられたただ、という味気ない答えだけです。同じような意味で、書かされているだけの僕には、自分が書く理由を答えることができません！ 僕には、後から理由づけをしない限り「書く理由」なんて一つもないからです。と言うより、「僕」などというカッチリとした存在のものは実は僕たちの神経系の作り上げている錯覚であって、宇宙のどこを探しても不在なのです。「僕」も「あなた」もこの宇宙という劇場の中で、素粒子という役者たちが演じる一つの役どころ、あるいは仮の姿、いわば現象に過ぎなかったのです。

今まで、マーキー君の「自分探しの旅」を並行して読んでくださった方には、わかっていただけたと思いますが、僕が僕であると信じていたものは、人間の身体に張り巡らされている神経系が、「これが自分である」と勝手に思い込んでいるところのものでした。そのように勝手に思い込んでいただけの「これが自分である」は、その取り巻く環境、つまり、宇宙や天体や遺伝子や他人の脳や、社会やテレビや本や、パンやご飯やありとあらゆる環境によって作られているものに過ぎなかったわけです。その作られているものに過ぎない「僕」が何かを書こうと、それは自分の意志で書いているのではないはず。自分の意志で書いているわけではない僕に向かって、書く理由を聞かれても答えられないのは当然です。

今、「環境によって作られているものに過ぎない僕」のことを、それを強調する意味で【僕】と表記してみます。

パソコンに字を打ち込んでいるのは【僕】ですが、【僕】が書いているのではなく書かされていたわけです。一体誰に ですか？ も

もちろん、毎週訪れる締め切りに書かされているわけではありません。誰かが後ろからピストルを突きつけているわけでもありません。強いて言えば、自然界の法則に とでも言えばいいのでしょうか？ もっと煮詰めれば、自然界の法則が長い年月をかけて作り上げた脳の、その特性でもある記憶によって書かされているとさえいいのでしょうか？

脳は、何度か同じ刺激を受けると、その部分の回路が増強される特性を持つという神経細胞でできています（メルマガ「自分探し」 NO.16 参照）それが、記憶と呼ばれているもののことでした。記憶は、やがて自我意識や連想や思考という現象をもたらすようになります。日本という国に生まれた【僕】は、日本語と関連づけられた脳を作り、脳の中に記憶させられているたくさんの物事と絡み合って日本語を組み立てさせられ、日本語を書かされているだけでした。

それが、【あなた】が今見ているこのメルマガです。【僕】が日本語を組み立てさせられるのには、ある方向性がありそうです。それは、【僕】を取り巻く周囲の環境によって作られた脳に方向づけられ、そして、書かされています。つまり、アインシュタイン氏が考えたと言われている相対性理論は、本当は彼が考えたと言うより、彼の脳を取り巻く周囲の環境（もちろん環境には遺伝も含めますよ）に方向づけられた彼の脳が考えさせられたのです。

【僕】が何ものかによって書かされているというのでしたら、【僕】は、今、書いていることも本当は全て受身形で書かなければいけないこととなります。世の中の全ての言葉は受身形で話されなければならなくなります。いいえ、それどころか、書かされているということを書くことは、いくら受身形を用いても不可能です。何故なら、書かされているということを書いても、その書かされているということを書いたことも書かされているということを書かなくちゃならなくなって、そうしたら今度は、その書かされているということを書いたことも書かされているということを書いたそのことも書かされているということを書かなくちゃならなくなって、そうしたら今度は、ああ、【僕】は、全ての行動を中断して一生このように書かされ続けることになってしまいます。

「言葉」というものは、人間には自発的に働く意志のようなものがあるという信念を前提として作られてしまっているのだから、その言葉や文法を使って「自発的意志に基づかない人間の行動」をありのままに表現するには限界があるということです。

いつも言っているように、科学は自然を解釈するための一つの方法論です。でも、それは常に自然界様にお伺いを立てながら、誤りを自然界様に修正してもらいながら進む方法論です。だから、科学は、自然界の中で機能するモノ（例えば飛行機とかパソコンとか）を作り出すことには向いていますが、自然界の中で機能する言葉を作り出すことには向いていないのです。つまり、言葉とは人間の錯覚の中でしか機能しないものであるということです。

このことを明確にするために次のように分けてみます。

- 1、科学 自然界中心。実体を扱う
- 2、言葉 人間中心。錯覚を扱う。

次のようなたとえ話はどうでしょう。

【僕】たちは、【自分】で【自分】の顔を見ることは決してできません。鏡に映っている顔を見て、【自分】の顔を知るだけです。この鏡に映る前の実体を扱うのが科学で、鏡に映った【自分】のことを扱うのが言葉であると言えます。しかし、この鏡と実体の関係は、こんな単純なものではなく合わせ鏡のような状態でもあります。

自然界の動物（人間も含めて）の行動は、何らかの刺激に対して反応しているだけなのですが、人間の脳の中には他の動物とは違う自分を映す鏡のようなものができ（＝第二の脳）その鏡に映った【自分】の顔を見ることになった【自分】は、その像が新たな刺激となって、また新たな反応をするわけです（メルマガ「自分探し」 NO.17 参照）

そして次に、鏡は、その新たな反応をした【自分】を映すわけですが、それを見た【自分】は、それが刺激となって新たな反応をする。まるで合わせ鏡のように、いつまでも続く刺激 反応 刺激 反応の連鎖です。こうした中で、人間たちは、自分に意志があると錯覚し始めたのです。

Mach doch mal bitte das Fenster auf!

今、【あなた】はこの記号の羅列を見て、どのような反応をしましたか？ 【僕】は今、「ちょっと窓を開けてくれませんか！」と【あなた】にお願いしたのです。もし、「ちょっと窓を開けてくれませんか！」という日本語という記号で書かれた文章を見れば、【あなた】は窓を開けてくれたかもしれません。日本語という記号に関連づけられた脳が、文字という視覚刺激や、脳内に記憶されている他のものなどと絡み合って反応するのです。その証拠にドイツ語を知らない（ドイツ語に関連づけがされていない脳を持った）人には、ドイツ語は単なる無意味な記号の羅列です。そこに意味を見出せるのは、その刺激（記号）に対してある反応をするように関連づけられている脳だけです。つまり、これも記憶の所作なのです。

【僕】たち人間が、感じるものや、思考することや、表現や、それら全ては記憶が作り出している幻想です。記憶が作り出す幻想によって、行動も引き起こされていたのです。周囲の環境によって作られている脳の中の記憶によって、【僕】は、境界線を持って存在しているこの身体を【自分】だと信じ込まされていて、日本語に関連づけられた脳内の記憶はさらに思考を生み、それによって文章を作らされていて、そして、ああ、またしても頭が混乱してきました。

もう一度、心（脳）を落ち着けて考えてみましょう。

鏡のこちら側の実体が、なんらかの刺激 反応 刺激 反応の連鎖により窓を開けたとすると、当然、鏡の中の【自分】も同じ行動を取り、それを見た実体は、「自分は今、窓を開けている」と意識します。これが自我意識です。それが新たな刺激となって、脳内に記憶されている他のものなどと絡み合って新たな反応をします。例えば、窓を開けた時の音が、以前、水の入ったコップを音を立ててテーブルに置いた時にしかめた彼女の顔が連想され、「今の窓の開け方は、乱暴だったかな？」などというように反応します。

そのような連鎖のうちに、【僕】たちは【自分】というものが存在して、それが【自分】に「窓を開ける」という命令を出し、【自分】(鏡の中の自分)を動かしていると勘違いしているわけです。人間の脳の中に、【自分】を見つめる第二の脳ができたことで、【自分】には意志があるという勘違いを起し始めたのです。

【自分】を意識する脳ができたことによって、人間には加速度的にできることがどんどん増えていきます。これを「合わせ鏡効果」と名づけてもいいと思います。それによって錯覚を扱うことが専門だった脳から枝分かれして、より実体を求めようとする方向に進み始める脳も現れました。科学が生まれました瞬間です。

ロケットが間違いなく月に到着するのは、そのロケットが宇宙の法則に適合しているからです(ただし、もしロケットが途中で爆発してしまっても、それがそのロケットが宇宙の法則に適合した結果です)その宇宙の法則と適っているものを説明するために、止むを得ず数式や言葉に置き換えるとします。その置き換えられた数式や言葉は、どんなに集めても月に到着はしません。

つまり、ロケットは実体であって、数式や言葉は実体ではないからです。数字や文字自体はインクのシミが作る実体ですが、それが意味しているものが、実体を説明するための錯覚であり幻想です。クォークやレプトンが組み立てられて原子となり分子となり、やがてできた脳内の神経細胞が新たに獲得した性質が錯覚や幻想です。レゴと風車の例で説明しましたね(「自分探し」NO.8)

そして、この社会も記憶がもたらす錯覚や幻想が作っているものだから、アルツハイマーにでもなれば、自分の社会の最小単位だった家族のことすらわからなくなってしまうのです。神を信じていた人も神のことすらわからなくなってしまう。家族とは、そして神とは、記憶によって作られていた幻想を見ていただけだからです。記憶によって作られていた幻想を取り除いたもの、つまり究極のアルツハイマーの状態こそ、【僕】たちの実体とも言えます。だから科学は、実体としてのアルツハイマーの研究をするわけです。

映画を考えてみてください。スクリーンに投影された映像を見て、【僕】たちは涙を流しますが、全てを唯物論的に捉える科学には、スクリーンというものはあくまでも平坦な白い幕でしかありません。また、光の束が作り出す幻想を見て人が涙を流すのは、どのような物理・化学作用なのかということの研究するのが科学です。でも、言葉や映画は、人間には意志があるという幻想の元で作られています。スクリーンに映像を映し出した瞬間、それは白い幕ではなくなり、【僕】たちの現実(=幻想)の一部となります。だから、言葉で映画の感動した部分を説明することは簡単にできますが、科学ではそれが難しいのです。

また、説明するという行為は能動です。説明とは意志を持った行動に分類されます。説明をするためには、人間には意志があるという幻想の元で作られている言葉を用いなければなりません。だから、意志がないということ「言葉で説明」することは永遠にできないわけです。どうしてかという、意志がないことを説明しようとする時点で、説明しようとする見かけ上の意志があることになるからです。

説明しようとしている自分は、実は不在で、「自然界の法則が長い年月をかけて作り上げた脳の、その特性でもある記憶によって」説明するという行動を取らされているだけで自分の意志でやっているわけではない、という説明を始めようとしている今の自分も、説明しようという意志を持ったわけではなく説明させられようとしていることを説明しなければならなくなり、そうするとそれを説明しようとしている自分も、説明させられようとしている自分であり、ああ、また同じことが始まっちゃいました。要するに、合わせ鏡の中の自分を永遠に説明しなければならなくなります。つまり、異なる次元のものを、異なる次元の文法を使った言語では説明できないというような意味です。

科学が長い間求め続けてきたものは、それはこの宇宙を支配している根本を知ることでした。それを我々人間の手中に納め、神に代わって宇宙の支配者となろうとする傲慢なものでした。しかし、実際に科学が発見してしまったものは、人間は神に代われるどころか、刺激に対して反応しているだけの、ただの「実体」だったのです。科学から見れば、実体はこちら側、鏡の中の自分はあちら側の世界ですが、実際に【僕】たちが感じているのは逆ではないでしょうか。【僕】たちはみんな、鏡の中の錯覚であり幻想である【自分】を、こちら側と感じているのではないのでしょうか。

【科学者】と言われる人たちは、常に実体と錯覚の中を行ったり来たりしているせいか、時々とんでもない非科学的なことを言い出したりしてしまいます(メルマガ「自分探し」NO.20参照)。それは【僕】たちに科学的なことをわかり易く説明しようとしている本を開くと、ポロポロとこぼれ落ちてきます。【僕】はそれを**意思的解釈**と名づけて批判します(「自分探し」のNO.20)。例えば、「**痛みを把握する感覚器『自由神経終末』は、脳と内臓の一部を除いて、身体中のいたるところに分布しているが、ものを持ったりしただけで、いちいち痛みを感じていたのでは落ちていて日常生活ができなくなってしまう。だから、手のひらは痛みを感じる神経の数が他の場所よりもやや少なくなっている。**」科学者の書いたこの文章の滑稽なところがわかりますか?まるで自然界が、【僕】たち人間の落ち着いた日常生活を配慮してくれている、とでも言っているようです。因果関係が逆になってしまっています。

幻想を持つように作られてしまっているのが【僕】たちの脳です。その幻想の中で生きているからには、そこに実体はなくても、幻想も間違いなく現実です。

- > 「シャルルボネ症候群」の人に見える幻想は、その人のどうにもならない現実に違いありません。
- > 「左半側空間無視」の人が見る世界は、それがその人の現実、「相貌失認」の人が見る世界は、それがその人の現実です。
- > 分裂病の患者の人が聞く幻聴も、その人には幻聴だとわかっていても、確かに存在します。
- > 多重人格の人が経験するたくさんの現実、確かに人格の数だけ存在するのです。
- > なぜなら、現実とは、脳が過去の記憶に基づいて見ている幻想のことだからです。幻想こそが、僕たちが現実と呼んでいたもの
- > だったのです。(「自分探し」NO.18)

それは、脳の構造上どうしようもないことです。でも、これからの【僕】たちは、幻想の中だけで生きていくことはできません。何故なら、実体を捉えしまった科学はロケットを飛ばし、パソコンで世界をつなぎ、医療を確立させました。病気の原因となる実体を捉えたので、叩いたり祈りをしたりして病気を追い出す必要もなくなりました。これからの人類は、自分の中に、

- a、幻想の中で生きる自分(自我や自由意志という錯覚に翻弄されていた今までの自分)だけでなく、
- b、幻想であることを知る自分(自我や自由意志は錯覚であることを知る自分)

を同居 (a+b) させることが必要です。

現代科学が到達した視点は、幻想の中だけで生きていた今までの自分の傲慢さを教えてくれるものでした。自然界中心の視点を持って、より安らかに、そしてありもしなかった自我の呪縛からも解放され、本当の自由を手にすることができることを教えてくれるものでした。それはまた、【僕】たち人類を結びつけてくれる「ものの考え方」でした。みんながそのことに気づけば、【僕】たちの脳に必要な「共感」も生まれ、世界も平和になるはずですよ。

【僕】は、僕を取り巻く環境、つまり、宇宙や天体や遺伝子や他人の脳や、社会やテレビや本や、パンやご飯やありとあらゆる環境によって作られているものに過ぎなかったわけです。このメルマガを書いているのは、僕やマーキー君を取り巻いている周囲の環境によって作られている脳です。ということは、言い方を換えれば、このメルマガはあなたが書いてもいたのです!!

いいですか？ この社会を動かしているのは、神様でも政治家でもありません。社会が一つの方向性を持って流れている様子を大きな川の流れにたとえてみます。その蛇行を作り出しているものは、川底に敷き詰められた石ころに当たる僕たち一つ一つの脳です。僕たちの一つ一つの脳が、神様や政治家（というモンスター）を作っているだけです。そのように考えると、遠い国で起こっている戦争も、あなたとつながっていたことを感じていただけたらと思います。はるか過去に起こった戦争も今のあなたに続いてきたことを感じていただけたらいいですよ。

【僕】は、何か大きな波のうねりに書かされているだけなんです。そのうねりは、今までのように世界を自己中心、人間中心に見て、たくさんの小さな国に分けていた幻想から抜け出して、一つ一つの脳がつながろうとしているうねりです。目に見えない大きなうねりがあるから、僕やマーキー君は書かされているのです。そんな大きなうねりを、今、あなたが作っていることを感じていただけましたか？ きっと、このメルマガを読んでくださったあなたが、そのうねりの一番近くにいます。抗わず、自分が作っているその波にうまく乗ってしまいましょう!!

もう一度言いますよ。

「あなたは今、自我や自由意志という錯覚に翻弄されて生きています (a)、でもこれからは、その自我や自由意志が幻想であるということを知る自分 (b) も一緒に同居させましょう!!」

相反するものを、自分の中に同居させること。これが大事なことです。そのために、今のこの言葉をあなたの脳に記憶させてください。

人間は（あるいは自然は）言葉を作り出しました。しかし合わせ鏡の効果で、言葉はそれを刺激として人間を（あるいは自然を）作り替えます。先程の言葉を記憶した脳は、きっとその人の心を、そして世界を平和に作り替えてくれるはずですよ。人間は言葉を作り、言葉によって作られる。言葉に作られた人間が世界を作り替える。考えてみれば当然のことです。刺激 反応 刺激 反応の連鎖は、合わせ鏡の中で永遠に繰り返されます。自分が作った言葉が自分に返ってきて、それによってますます方向性を強化しながら、この社会という大河は流れているようです。今、あなたが作っている世界平和に向けてのうねりを感じていますか？

ところでマーキー君は、メルマガ「自分探し」のNO.2に、次のように書いていました。

- > まず最初に、あなたに覚えておいていただきたい言葉があります。それは、「言葉は偏見を記述したものに過ぎない」という言葉です。
- > これはとても大事なことで、絶対に忘れちゃだめだよ。じゃあ、その言葉も偏見の一つじゃないか、って？
- > そう、その通りなんです。このことも最後にはちゃんと解決させることを約束しておきます。

視線を自然界に向けてみると、宇宙も生命もその本質は「偏り」であるということがわかります（メルマガ「自分探し」NO.4参照）。何かがこの世に存在するということは、偏りがあって初めて存在し得るわけです。偏見とは、自然界の本質であるその偏りを人間が知覚して、それに対して持った見解や判断のこと、です。偏りを知覚したら、それはやはり偏っているのは当たり前です。だから「言葉は偏見を記述したものに過ぎない」という言葉も偏見であるというのはその通りです。

それでは今度は、視線を自然界ではなく僕たちの心に向けてみます。すると、偏見という言葉にはどうやら「誤ったものの見方」というイメージがあるようです。だけど、今見たように、人間が知覚してしまったものは全て偏見であるわけですから、その意味から言えば全てが誤ったものの見方ということになってしまいます。

「言葉は偏見を記述したものに過ぎない、というその言葉も偏見の一つじゃないか！」という指摘は、要するに「その言葉も正しくはないんじゃないか！」ということを言いたいわけです。

それでは、「正しい」とはどういうことでしょうか？ 僕たちは誰もが自分が正しいと主張し合って永遠に平行線のように見えます。裁判所でも正しいことを決定しているわけではなく、何を正しいと決めようかということを決めているに過ぎません。だけどそれはみんなが自分中心に考えているから正しいことが一つに決定できないだけではないでしょうか。僕たちは世界に目を向けた時、万人にとっての「正しい」基準を決定できます。それは「世界平和」というたった一つの基準です。僕たち人類は「世界平和」という基準だけは正しい偏見である、と規定しようではないですか!? そうしてその上にもその下にも、決して、善悪に対する何の基準も置かない決意が必要です。この世界では唯一、世界平和だけを善とするのです。どんな日常の些細なことでも世界平和という基準に照らし合わせながら決定するんです。

世界平和とは戦争を回避している状態ではありません。世界中の人たちの心から不公平感や不満がなくなり、敵もいなくなり武器も必要なくなった状態です。そして世界中の人たちが仲良く生きて祝福の中で死んでいける状態のことです。僕たちは日常のどんな些細なことにも「世界平和」という基準で正しいことを決定していくことができるはずですよ。

そうすると、先ほどの「言葉は偏見を記述したものに過ぎない、というその言葉も偏見じゃないか！」という言葉も、次のように言い換えることができます。

「言葉は偏見を記述したものに過ぎないが、それが世界平和という基準をクリアしているなら唯一正しい偏見と規定しよう！」

世界平和という状態は世界にたった一つしかありません。世界中の全ての人たちの心から不公平感や不満がなくなり、誰もが仲良く生き

て祝福の中で死んでいける状態だけです。それは夢物語ではありません。今までの僕たちの脳（自我という錯覚に翻弄されていた脳）で考えるから夢物語なだけです。自我は錯覚であったことを知った脳が増えれば、人類はしっかりと手をつなぎ合い、温かい心を通わせ合い、やがてこの環境は変化させられ、世界は平和になるしかないからです。その時が来たら人類は言うでしょう。「世界が平和じゃない状態を作ろうだって!? そりゃあ君、この環境が変わらない限りもはや夢物語だよ」環境が僕たちの行動を作っているからです。（つづく）

今回のテーマは「世界を平和にする愛」です。

編集後記

取りあえず、【僕】は a の方の自分で今日このメルマガを書いてきましたが、それは言葉の性質上仕方のないことでした。でも、書かされていたという b の自分も表現しようとしたので、かなり乱れています。a の自分と b の自分が見え隠れして、今日の記事には、表現上（受動態にすべきところを能動態にしたりと）の矛盾がたくさんありますが、それは大目に見てくださいね。

ところで、前回のメルマガで次のように書きました。

- > 大切なのは外に目を向けて批判するのではなく、自分のせいだと批判することです。他人の振り見て我が振り直せ、
- > ということわざがありますが、本当は他人は自分が、自分は他人が作っているものだったのです。

今日、読んでいただいた中にこの意味が書いてありましたが、気づいていただけましたか？

もう一度、今日の主旨をまとめてみます。【僕】が今まで、自分だと信じていたものは、実は【僕】を取り巻く環境、つまり、宇宙や天体や遺伝子や他人の脳や、社会やテレビや本や、ありとあらゆる環境によって作られていた脳の、その脳の特長である記憶が作り出す幻想だったということで、それを言い換えると、【僕】は宇宙の過去から未来、そしてあらゆる物質とつながって存在しているものだったということです。そのつながっている全てのものが、【僕】に書かせているだけだったのです。だから、【僕】には書く理由を答えることはできないのです。

そして、【僕】が、人生の幸福や世界の平和についてあれこれと考えさせられ、書かされているということは、そのようなうねりが【僕】を取り巻く環境に起こり始めているということです。【僕】はその大きなうねりによって書かされてきたのです。

そんなメルマガも後二回で終わる予定です。なんで書かされているだけのあなたに、そんなことがわかるのかって？

いいえ、今の言葉も【僕】を取り巻く環境に、【僕】が書かされたものです。(?!?)

%%%

自分探しの旅 with マーキー

NO.23（最終号） 不思議な樹

%%%

不思議な樹

- > さて、今日まで現代科学が解明したものを手がかりとした自分探しをやってきたけど、現代科学が到達したものは、人間は、
- > 空に輝く星や太陽や、それに動物や花や石ころなんかと全く同じ素材でできていて、決して特別なものではなかったということ
- > です。つまり、現代科学は人間の傲慢さに気づかせてくれるものだったのです。そしてまた、ありもしなかった自我の呪縛
- > からも解放してくれて、本当の自由を与えてくれるものでした。僕たちに自由がなかったのは、自我という幻想にとらわれて
- > いたからだったのです。
- > 自我という幻想にとらわれていたから、他人に勝とうとする焦燥にかられたり、絶望的な孤独感に陥ったりもしました。
- > 自然界を中心に謙虚になれば、より安らかに生きることができます。そしてまた、現代科学は、僕たち人類を結びつけて
- > くれる「ものの考え方」もプレゼントしてくれました。僕たちの脳に必要な「共感」もプレゼントしてくれました。

前回の最後には、このように書きました。現代科学が僕たちにプレゼントしてくれた二つのこと、

- 1、脳に必要な「共感」
- 2、人類を結びつけてくれる「ものの考え方」

この二つの意味するものは何でしょうか？ という君への質問で、このシリーズを終わりにしようと思います。

その答えは、発行人の次回のメルマガ「世界を平和にしない愛 NO.23」に書いてあります。

(ヒント：1はaに、2はbに対応しています)

さあ、最後の難関も無事に乗り越えたみなさん、お疲れ様でした。何人かの方は途中で脱落してしまいましたが、君は今、苦しみ？ を乗り越えてこの旅の到達点、山の頂上に立っています。

何が見えますか？

下界では、相変わらず僕たちの仲間があくせく働いているのが見えます。批判し合ったり、訴え合ったり、愛し合ったかと思えば憎み合い、けなしたと思えば誉め合ったり、不安と安心を繰り返したり、泣き笑いを繰り返したり、嘆いたり愚痴ったり、哲学したり宗教したり

。そんな忙しい姿が見えますね。君は今、いろいろなものがよく見える場所に立っています。

自分たちが半年間歩いてきた長い道を、懐かしく振り返ってみませんか？ でも、その振り返ろうとする自分が、今までとは違うように感じたらしめたものです。自分を包んでいる宇宙や、自然界の法則をどこかに感じ、そして今度は、宇宙や自然界の法則に動かされている自分を感じませんか？ 今、歩いてきた道を振り返ろうとする自分と、振り返させられようとしている自分が同居していますか？ 君の中で、すべてのものが理解され、すべてのものがつながりましたか!? そうでないなら、もう一度スタートからやり直してください。何度でも何度でも。

そう、僕だって一足飛びにここに来たわけじゃありません。転んでは立ち上がり、転んでは立ち上がりして、何年もかけてここに来たのですから。

向こうに真亜基さんたち一行が見えてきました。ほら、僕たちに手を振っているのが見えます。僕の記憶が正しければ、不思議な樹は、左手のちょっと小高くなったところを登った辺りに立っていますよ。じゃあ、僕はここで消えることにします。もう、これで僕の役目は終わりました。実は、もう僕、生きていないんです。みなさんをこの場所にお導きするために、ここにやって来たんです。物語『アラスカの風に乗せて』の中だけで、僕は生きていたのです。でも、悲しくなんかいいよ。あの物語が存在したから、こうしてみんなにも会えたんだもの。

ここまで来たからには、是非、真亜基さんたちと合流（メルマガ「世界を平和にしない愛」最終号 NO.24）して、不思議な樹がどんなものなのか見てください。もしよかったら、君の決断でその実を食べてみてください。僕はその実をもちで、一口齧った瞬間、とても不思議な体験をしたのを昨日のこのように思い出します。

ところで、創刊号で約束したプレゼントですが、真亜基さんも頑張ってたみたいだけど間に合いませんでした。できあがったら、発行人のホームページ <http://www.epm-hassin.net/> で連絡しますので、時々は覗いてみてください。

それじゃあ、サヨウナラ。

元気でね！ ~\ (^O^)^o^ (^-^)-^-)' ~)') (((:(TT)ジョー
涙の音

編集後記

そうそう、差し上げるプレゼントがありました。それは「おまじない」です。これは、ただの気休め的なおまじないじゃないですよ。このメルマガ（現代科学を手がかりにした自分探し）にちなんで、動物の脳や人間の脳を解明した「脳科学」を根拠とした「おまじない」です。

まず左手を握り締めて顔の前あたりに掲げます。次にその握り締めた左手を覆うように右手で包み込みます。はい、これでおしまいです。これは何のおまじないかと言うと、誰かに腹が立った時にやるものです。この手の形、何かに似ていませんか？ そう、人間の脳です。左手は、心臓にあたる脳幹とそれを包む大脳辺縁系を一つにした形。つまり動物の脳（本能の脳）です。それを覆う右手は人間の脳（理性の脳）とも呼ばれる大脳新皮質。これを腹が立った人の脳だと想像しながら眺めていると、不思議なことにその人を恨む気持ちがスーッと消えていくから不思議ですよ。悪いのはその人ではなく、その人の「脳」だと考えると楽になるのです。

いろいろな脳がありますよね。

思い込みが激しい脳、プライドが高い脳、怒りっぽい脳、常に自己中心の脳、信じられないくらい嘘つきの脳、パニックに陥りやすい脳、色情の脳、温厚な脳、かたぶつな脳、気の毒なくらい人に気を使う脳、落ち着きがない脳、オドオドした脳、わがままな脳、疑い深い脳、信じ込みやすい脳。

まだまだあります。ぜったい反省しない脳、なんでも他人のせいにする都合のいい脳、反省ばかりしてしまう脳。その人の言動に命令を下しているものは脳だから、脳が人間の身体をかぶっていると考えたら面白いよ。脳が怒っている、脳が一生懸命主張している、脳が盗みを働いている、脳がお互いを傷つけ合っている。その人の言動は、その人の脳が支配していたわけだけど、でもその脳はと言えば、その脳を取り巻く環境によって作られていたものです。ということは、その人の脳を取り巻く環境の一部でもある君も、その人の言動に関与していたわけです。

もう一つ、今、両手で作った脳は、自分の脳でもあると考えてみてください。腹が立ってイライラしたり暴力的になる気持ちが本能の脳である左手です。そして、それを理性的の脳で優しく包み込むと、しばらくすると本能の脳は優しい気持ちになっていくような気がしませんか？ もし、腹が立ったり切れそうになったらやってみてください。もちろん、周りに人がいたら、頭の中で両手を重ね合わせるイメージをするだけにしてください。勘違いされます。

それじゃあ、本当にサヨウナラ。

『アラスカの風に乗せて』の中の僕にも会いにきてね。ここでは話せなかった芸術論や唯向論のことなんか書いてあります。いつか、君に会えるのを楽しみにしています。()/

harkey.

世界を平和にする愛

まず最初にお断りしておきます。今日のタイトル「世界を平和にする愛」は入力ミスではありません。このメルマガ「世界を平和にしない愛」は逆説のようですが、本当は「世界を平和にする愛」を探すために書いてきたのです。

最後の難関を乗り越えたみなさん！ 頂上に立ったあなたの前には、どんな風景が広がっていますか？ 今、あなたの目の前にあるいつもと同じ現実、いつもと違う風景として映っていないでしょうか？

前回、これからの僕たちは、自分の中に次の(a)と(b)を同居させることが必要だと書きました。

- a、幻想の中で生きる自分(自我や自由意志という錯覚に翻弄されていた今までの自分)
- b、幻想であることを知る自分(自我や自由意志は錯覚であることを知る自分)

普通の人の現実とは、(a)つまり幻想が現実そのものだったようです。僕がこのメルマガを書くという行為自体も(a)に属します。何故なら、言葉は、合わせ鏡に映った幻想(記憶が生み出す意識、意志、思考などの現象)が作り出すもので、言葉で実体を表現しようとしても、どこまで行ってもそれは言葉という幻想でしかないからです。要するに、いくら言葉でロケットを表現しつくしたように思っても、言葉で表現したロケットでは月へは着陸できないということでした。

愛も神も幻想が作る現実、本能も、そして本能をコントロールしなければいけない理性も、幻想が作る現実(a)の話です。全部、言葉という幻想を扱う人間だけが持ち得る現実体験です。その証拠に他の動物には、愛も神も理性もありません。他の動物に本能はありますが、それは実体そのものとしてあるわけです。実体から切り離れた「本能」というものを意識するのは人間だけです。「他の動物にも本能はある」と言葉にしたとたん、もうそれは実体とは違う、人間の認識した本能、つまり幻想の中の本能です。

* ここでちょっと「実体」と「幻想(=錯覚)」について用語解説。

僕が「実体」と呼んでいるものは、人間が意識しなくても存在するもののことです。例えば、電信柱は意識しなくても存在しているので、ぶつかれば怪我をします。と言うより意識しないからぶつかっちゃうんですが、太陽は意識しなくても存在しているので、光の粒子が肌を焼きます。僕が「幻想(=錯覚)」と呼んでいるものは、記憶が作り出す意志や思考や自我などの現象のことです。

しかし、幻想や錯覚と言っても存在しないわけではなく、それは実体を刺激して、実体を作り変える場合もあるので存在はしています。また、実体を捉えるためには、意志的行為(=思考)という幻想を必要とする場合もあります。人間の行為自体は実体に属するものですが、そこに(記憶が作り出す)思考という幻想が介入して、実体である行動を変化させるということです。例えば、観測という行為は、思考という幻想が介入してとらされる行動です。科学は実体を扱う学問ですが、観測が科学にとって必要なものである限り、幻想と無縁ではありません。また、「実体」も「幻想(錯覚)」も、どちらも共に、自然界の法則の中で演じさせられている素粒子たちの演技の一つです。

(以上、用語解説でした)

さて、この幻想の現実の一つでもあるメルマガを書くという行為、の中で僕は次のような話をしました。

「人間の不幸は理性を持つことと同時に始まった。理性さえなければ僕たちはこんなに難しいことを考えて悩んだり、他人の気持ちを思いやる弱さを持つこともなかった。理性がなければ、他の動物と同じように、本能の欲求と衝動のままに行動していればよかった。理性はこの自然界において、唯一の障害と考えられる。

しかし、後戻りできない僕たち人間が、これからも人間として生きる限り、本能を理性でコントロールして生きるしか方法がない。その意味で、僕たち人間はみんな障害を抱えている弱い存在だ。助け合わなければとても生きていけない存在だ」

自然界においてはみんな障害者同士、という気持ちは、みんなの心に共感が生まれる元になると思います。花に水が必要なように、脳には共感という水が必要です。近年、うつ病が増えていると聞きます。それは、脳に必要な「共感」という水が足りなくなっていて、それで脳が干涸びてしまっているからだだと僕は考えています。この「みんな障害者同士」という考え方は、世界中の人を「共感」で結びつけてくれます。共通の関心を持った人同士で交わるサークル活動、などの中で得る実際的な共感とは違って、会ったこともない人同士でも、深い部分でつながっていると感じ合える普遍的な感覚としての共感です。僕たちは、みんな手をつなげます。

でも、本当は、僕たちはもうずっと昔から、というより最初から手をつないでいたのです。そのことを現代科学は裏づけてくれました。それが(b)の自我や自由意志は錯覚であるということでした。

僕たち一行が(a)のルートで頂上を目指したとしたら、マーキー君一行は(b)のルートをたどったと言えます。でも、最後には合流します(a+b)。もう彼らもその辺りに来ているはずですよ。

自我や自由意志は錯覚である、という意味は、あなたが自分を自分であると信じていたものは、あなたを取り巻く環境(もちろん遺伝も含む)によって作られている脳が見ていた錯覚だったという意味です。自我という錯覚は、脳がその環境の中で記憶を積み重ねた結果、生まれるものでした。

脳や記憶(ここでは再生される前の記憶のこと)が実体で、それが作り出すもの、意志や思考や自我などが幻想であり錯覚です。ただし、実体が錯覚を生み出すけれども、合わせ鏡の効果によって、その生み出された錯覚は刺激となって実体を変化させるということも忘れてはいけなかった(これは結構、見落とされています)。人間は(あるいは自然は)言葉を作るが、作られたその言葉によって人間は(あ

るいは自然は)作り替えられもするという事です。

あなたの脳は、あなた自身のものとして独立して存在しているのではなく、取り巻く環境(遺伝も含む)や情報によって作られ日々変化しています。だとしたら、もしあなたの脳が共感という水が足りなくてうつ病になったとしたら、それはあなたの脳だけの問題ではないはずです。あなたのパソコンがインターネットができなくなったとしても、原因はあなたのパソコンばかりとは言えません。医者は、あなたの脳が病気だとして薬を与えます。それはあなたのパソコンを一時的に不感症にしているだけで、むしろ不安定にしまいます。治さなければいけない原因は、一つ一つのパソコンではなく、電話線をつないでいる部分が弱っていたり、電話線自体が磨耗・断線していたり、サーバーや、あるいは他人のホームページが原因であったりする場合も考えられます。本当は、共感を困難にしている社会的原因を突き止めなければなりません。なんだか、うつ病の話になってしまいました。話を戻します。

あなたは、あなたを取り巻く環境 宇宙の過去から未来、そしてあらゆる物質 とつながって存在しているものだったのです。宇宙は、素粒子の作る劇場でした。先のレールは敷かれていないし筋書きもないけど、素粒子の一つ一つにしても、結果から見ればそれ以外には起こり得ない100パーセントの確率で、あらゆる現象を演じていたというのは、現代科学が解明した曲げようのない事実です。

量子論が確率を扱わなければならなくなったのは、人間の観測や予測という幻想を、実体に差し挟むからでした。神様ですらご存知ない筋書きを知りたいと思う、人間の欲望のせいでした。僕たちは、すでに幻想が実体を変化させることも知りました。人間の欲望という幻想が実体を変化させ、正確な観測を困難にしていたのです。しかも観測者である科学者は、自分の観測という行為さえも素粒子の作り出す現象(素粒子に操られている)に過ぎないことを忘れてしまっています。やっぱり観測者であろうとも、この宇宙の法則にガチガチの因果関係によって支配されている素粒子が作り出す現象、の外に出ることはできなかったということです。つまり、観測者の観測という行動は、素粒子の演ずる演技の一つだったのです。

今や、あなた個人のものであったはずの自我は世界中の人とつながり、宇宙の果て(ビッグバンの瞬間)にまで広がりがつあります。今のあなたが自分を愛するということは、宇宙の過去から未来、そしてこの宇宙に存在するあらゆる物質を愛するということと同じ意味です。

ちょっと、今日まで考えてきたことを 遡ってみます。

「本能」とは、理性を持ってしまった僕たち人間にとつての、悪の根源でした。その本能の求める欲求を押し通そうとすること、あるいは本能が最も居心地がよく感じる状態を維持しようとするのが「甘え」でした。そして「愛」とは、その「甘えの欲求と甘えを許すことができる心が出会った時に起こる感情」でした。つまり愛は、本能に根差していて、本能を押し通そうとする状態を許してくれるものに出会った時に起こる「感情」です。

「感情」である限り、愛に全幅の信頼をおくわけにはいきません。それに、愛は決して綺麗なものでも尊いものでもなく、自己中心的に動くものでした。利己的だった愛なんか、世界を救うことなんて到底できるはずないじゃないですか!! 利己的な愛が救えるものは、自分だけです。他人を救う理由も、実は自己満足という形で自分を救ってくれる自己愛だったのです。時には実際に他人に感謝されます。でもそれだって、自己だけ満足ではなかったというだけの話です。奉仕活動は自分のためにやるものです。奉仕活動をした人は誰もが「自分があげた以上のものを私は与えられました」と答えます。他人に喜んでもらう、人生でこれほどの喜びはあるでしょうか? その喜びがなくても、奉仕活動をする意義は何かあるのでしょうか? それは場合によっては、お仕着せ、あるいは余計なお節介と言われてしまうこともある行為です。

利己的な愛は、自分と他人を本当の意味で救ってくれたわけではなく、時には他人を傷つけ、時には僕たちを絶望の孤独感の海に投げつけます!! もう僕たちは、いい加減に、愛を美化する呪縛から目を覚まさないといけません!! このメルマガで、僕はずっとそのように叫んできました。

だけど、人間は生きるためには、自分の甘えを許してくれるものがが必要です。愛を否定しては生きていけません。僕は、その愛を否定する、とんでもないメルマガを発行してしまったのでしょうか?

いいえ、そんな悪いことはしませんよ! 安心して下さい。今まで、物質至上主義などと陰口を叩かれ続けてきた現代科学が、実は、僕たちを救ってくれていたのです。

人間は自分が可愛いものです。自分のことは結構図太く愛せるはずですよ。今の、自我の拡大しているあなたには奇跡が起こりつつあります。これからのあなたは、あたかも自分を利己的な愛で愛するように、全ての人、全てのものを愛することができます。それと同時に、みんな障害者同士という共感は、僕たちの脳を幸福感で満たしてくれます。

そう、傷ついた心たちを癒すことのできる愛、そして世界を平和にする愛とは、この「自己の拡大」した「つながった愛」のことだったのです。

テレビをつけてみてください。今日も誰かが深刻な罪を犯しました。誰かが誰かを激しく批判しています。でも、あなたはもうどちらの立場の人も愛し許すことができますよね。自分を愛し、自分を許すように。そして自分も助けてもらえるように、その人たちを助けてあげたいと思いますよね。

ジョージ・ブッシュさんと金正日さんと小泉純一郎さんが握手をしています。でも、あなたには、彼らの口の開け方一つにしても、まるで操られている人形のように見えますね。僕たちはみんな素粒子の演じる劇場の中の人形だったのです。素粒子は、サダム・フセインさんやオサマ・ビン・ラディンさんという人形には、可愛らしいおひげを生やしたようです。

みんなみんな、なんだか可哀相で、それでいて愛おしく思えてきませんか!? 今、僕たちの心に、世界を平和にする愛が育ち始めているのです !!

半年間、購読ありがとうございました。いよいよ次回は最終回となります。

次回のテーマは「どんな味がしますか?」です。

編集後記

「し、とう、さ、ショ。ぐん、ほう、たん、ぼう」

実践してますか？

僕は先日、腹が立つことがありました。サングラスを買うことに決めたのですが、僕にとっては高価な代物です。何ヶ月も買うか買わないか悩み続けましたが、ついに一大決心してお店に入り、取り寄せをお願いし、お金を払いました。優柔不断のくせに、いざ買うとなると、一分でも一秒でも早く欲しくなるのが僕の悪い癖です。まるで聞き分けの悪い子供みたいで、本能をコントロールできなくなるのです。僕は**所有・獲得本能**と探究（**好奇・求知**）本能が、時々爆発してしまう人間のようなのです。早く欲しい気持ちが伝わったのか、十日かかると言った店員の隣りにいた店長は、三日後には入荷できる、と約束してくれました。

ところが約束の期日に取りに行くと入荷されていなくて、店員は店長に報告し、報告を受けた店長は青ざめて納品先に電話をしたりして確認していましたが、結局、入荷までに早くても後五日かかると言いました。その理由（特別な加工が必要だったなど）も言いましたが、僕には言い訳にしか聞こえませんでした。

店には三つの標語が掲げられており、その一つに「嘘はつかない」と書いてあります。店長は**防衛本能**で嘘をついたのでしょうか？

家に帰っても暗い気持ちから立ち直れませんでした。僕は、マーキー君が考えたおまじないをやってみることにしました。まず自分の脳を思い浮かべます。目をつぶって、本能の脳を（左手のこぶし）しっかりとイメージしました。次に、それを包み込むようにしっかりと理性の脳（右手の手のひら）で覆いました。それを店長の脳だとイメージしました。

僕たちの身体は、この脳に操られていて、また、その脳は、それを取り巻く環境に操られている。そして、その環境とは、結果から見ればそれ以外に起こり得ない**決定的因果関係**で素粒子たちが演じている劇場。そんなイメージをしていくと、不思議なことに怒りの気持ちがスーッとおさまりました。手違いは店長一人が悪いわけじゃない。どうってことないやって思えてきました。そして今度は、その手の塊を自分の脳だとイメージしました。しばらくすると、早く欲しい気持ちも少しやわらぎました。

次の日、「入荷できたのでいつでも取りにきてください」という電話が入りました。きっといろいろと努力してくれたんだなあ、なんて思い、感謝の気持ちすら湧いてきたのです。

「し、とう、さ、ショ。ぐん、ほう、たん、ぼう」を実践してください。それと、世界共通の科学的？なおまじない。どこでもできて、誰にでも有効です。もう一つ。みんなの脳を一つにしてくれる「ものの考え方」。これらが世界を平和にしないわけはありません！！

まだまだ「世界を平和にする愛」初心者ですが、これからも実践していきます！！

～世界を平和にしない愛～

NO.24（最終号） どんな味がしますか？

どんな味がしますか？

さて、僕の自我（これが自分であると自分で信じているところのもの）は僕の脳が作る幻想で、その脳は、それを取り巻く環境の全て、つまり、僕の脳自体を作った遺伝情報や、僕の身体を構成している他の部分や、世界中の脳や、世界を飛び交う様々な情報などが作っていました。脳がなければ何にもできない能なしの僕たちですが、その脳はそれを取り巻く「環境」という、刺激が与えられて、しかも反応を受け止めてくれる場所があって、初めて脳として機能するものです。だから脳といってもそんなに偉いものではありません。日本人の好きな「持ちつ持たれつ」という感覚で生き延びているもののようなのです。

僕たち人間は、その脳の合わせ鏡効果が作る幻想という働きによって、自分は自分であると信じ込まされてきました。自我を信じ込まされているから、僕たちを煩わす**煩悩**が生まれます。自我がなければ、自分も他人もなく、そこに煩悩も存在しません。もちろん、このメルマガのテーマ「愛」も煩悩の一つなので、愛も存在しません。

ちなみに「煩悩」は仏教からきた用語で、「大辞林 第二版」で調べると、次のようにあります。

「(仏)人間の身心の苦しみを生み出す精神のはたらき。肉体や心の欲望、他者への怒り、仮の实在への執着など。「三毒」「九十八随眠」「百八煩悩」「八万四千煩悩」などと分類され、これらを仏道の修行によって消滅させることによって悟りを開く」

だけど、人間である限り、どんなに修行を積んでも煩悩を消滅させることはできそうもありません。一瞬の「無我」の境地を体験することは可能かもしれませんが、持続することは不可能です。何故なら、煩悩こそ人間たるゆえんだからです。

植物人間を想像してみてください。延髄の機能が残っているので、自発呼吸があり、飲み込み反射が可能である状態です。ここで失われているのは、人格と運動機能です。もちろん、自我という信じ込みもありません。自我のない植物人間には、「**肉体や心の欲望、他者への怒り、仮の实在への執着など**」は一切ありません。

確かに、そこには他者と区別する境界線を持った物体が横たわっています。しかし、その物体は自分自身であることを主張しません。それに、本当は全てのものの境界線は一時的なものでしかありません。全ての形は、その素材（素粒子）の変化している一つの過程です。自分が自分であることを主張しないものに対して、「あなたは自分自身です」などと言うのは、お節介と言われるものです（この意味は「**自分探し**」NO.15で、マーキー君が熊のぬいぐるみを例に挙げて書いています）もし、完璧な悟りに到った人がいるとすれば、この植物人間の状態です。

確かに、煩悩という「苦しみを生み出す精神の働き」は消滅しますが、誰が好き好んでこの状態を望むでしょうか？ その意味で、煩悩

は人間の間人たるゆえん、と書いたのです。

でも、このメルマガを読んでくださった方に、いい方法をお教えます。苦しい修行をすることも、植物人間になることもなく、簡単に自我を滅却する方法です。それは、今まで自分が自分と信じていたものは、自分を取り巻く周囲の環境に作られている脳が見る錯覚であった、と悟ることです。どうでしょう？ うまくいきそうですか？

しかし、あまり実践的ではないかもしれません。脳が見る錯覚は、「実体」に刺激を与え、実体を変化させるものでもありました。(NO.22) 変化させる力を持っているということはいくら自我や愛や理性は錯覚だと言いつ張っても、それは間違いなく存在しているということです。錯覚とは、現実にはありもしないことである、という認識は改めなければなりません。そこに実体はなくても、錯覚も人間にとっては間違いなく現実です。と言うより、錯覚こそが人間の現実だと言ってもいいほどです。(NO.22)

亡くなった人の写真を見て僕たちは涙を流しますが、ヤギに見せたら食べてしまいます。ヤギには実体としての紙しか存在しないけれど、僕たちには確かに存在していて、そして、実体である身体は涙を流させられるのです。いくら理屈で自我を滅却する方法を説いたところで、在るものは在るのです。

そこで、もう一度前回の言葉を振り返ってみます。

a、幻想の中で生きる自分(自我や自由意志という錯覚に翻弄されていた今までの自分)

b、幻想であることを知る自分(自我や自由意志は錯覚であることを知る自分)

(a)は、普通の今まで通りの現実です。自分の意志で何かを愛し、何かを憎み、妬んだり、悲しんだり、そして、自分の権利を主張したり、自分の価値を探したり、自分で自分を誉めたり、自分が嫌になったり、仕事をしたり、化粧をしたり、有名人や金持ちを尊敬したり、有名人や金持ちになりたがったり、誰かを批判してみたり。つまり、自分が、自分の意志で何かをしている、という感覚です。そこには、自分が、自分が、自分が という気持ちが強く働いています。

でも、(b)は、それら全てが自らの意志ではなくて、自分の脳を作っている環境にやらされていただけだという悟りでした。行動の主体である自分が、実は操られている人形だったということです。先程、僕は、(b)の悟りであらゆる煩惱から解放されるかもしれないと書きましたが、やっぱり(a)の自分の存在を消すことはできませんでした。(a)と(b)は、相反するものですが、どちらも科学的に考察しても実在するものです。それに、もし自分を苦しめている煩惱を滅却することができても、その煩惱が与えてくれていた喜びや感動までも犠牲にしてしまうのは、あまりにももったいないことです。僕が綺麗なお姉さんを見てワクワクすること、映画を観て感動すること、格好よくなりたく願うこと、それも煩惱ですが、煩惱は生きる喜びや感動も与えてくれます。

実は、科学が長いことかかって僕たちに与えてくれた「悟り」とは、自我を消すことではなく、自我を拡大させることだったのです。自我を拡大させることによって、今までの自我(a)は事実上、消滅させることができるというパラドックスです。(a)の自分を認めながらも、(b)のことを意識している自分を同居させると、どういうことが起こるでしょうか？ ある時は、今までの自我(a)に振り回され苦しめられそうになる自分を、(b)の自分が、冷静に眺め鎮めてくれます。ある時は、今までの自我(a)が与えてくれた生きる喜びや感動を、(b)の自分が周囲にも振りまいてくれます。

自己愛の拡大した(a+b)は、常に自分に都合よく働いてくれ、周囲にも迷惑をかけません。「科学がくれた悟り」とは、つまりこの、**自己愛の拡大**です。

今まで僕が、このメルマガで批判してきた「利己的な愛」ですが、それを消すことなく、自分自身を愛するように隣りの人や草や木を、そして他の動物や星や宇宙を愛せるようになります。本当に不思議です。

それに、もう、一人ではないあなたは、うつ病なんかにかかっている暇もありません。自分一人の生を、そんなに大げさに考えて苦しむ必要もありません。自分の生なんて、大したことなかったんだという思いは、自分の生を粗末にすることとは違います。何故なら、人間には、今まで見てきたように滅却できない自己愛が根本にあるからです。自己愛がつぶやく「自分なんて大したことなかった」という言葉には、自暴自棄ではなく癒しの要素が含まれているのです。

死を、絶望、恐怖、悲嘆としか考えられない人生、ちょっとした怪我や病気ですら思ってしまう人生。人生におけるいろいろな悪あがきや弊害は、自分を大したものだと思いたい自己愛から起こっていたものでした。自分が本当に大切なら、そういった自分を苦しめるものを遠ざけるべきではなかったのでしょうか？ 自己愛がつぶやく「自分なんて大したことなかった」というあきらめは、偉そうな人が「一人の人間の尊厳を尊ぶ気持ちを持たねばならない」などという堅苦しい言葉を振り回して諭すことなしに、自分やみんなを大切にす気持ちがすんなりと湧いてきます。

もう一度、テレビをつけて見てください。いるでしょう!? (; _ _) こんな難しい顔をして他人を批判している人たち。難しい言葉が飛び交っています。彼らが千人集まったって、世界を平和にできそうもありません。

町を歩いて、すれ違う人の表情を観察してください。他人を疑い、不安におびえて (; _ _) こんな顔をしていませんか？

このシリーズを通して、僕が一番願っていたことは、それは取りも直さず、僕やあなたの脳が、(; _ _) こんな難しい顔を作っていた脳から、() こんな顔ができる脳に変化して欲しいということだったのです。世界中の人たちが() こんな顔で、手をつなげるようになって欲しいということだったのです。僕やあなたの心に、暗い穴のように開いていた絶望的な傷が癒され、深い安心感に包まれるようになること。それはもっとも難しいことではありません。いいえ、むしろ難しく考えず、自然界に身体をゆだねることだったのです。

編集後記

半年間、お付き合いいただきましてありがとうございました。さあ、マーキー君もここへ来て最後の挨拶をしなさい、あれっ？ さっき手を振っていたけど、どこかへ行っちゃったみたいです。まったく、しょうがない奴です。肝心な時に

(((・・・) (・・・)))オロオロ

先週のメルマガで「今回は最終回なので、僕のメルマガにも少しだけ登場させてあげるとしましょう」って偉そうに書いてしまったのに。せっかく、三行くらい い、いや、よ、四行くらい挨拶をさせてあげようと思ったのに

ごめんなさい。探し出してきつーく言っておきます。

それでは足元に注意して下山してください。下界に戻っても、今日見た風景と果実の味は忘れないで下さいね。そして、知り合いにもそつと教えてあげてください。

=====
Copy Right (C) 2002 by マーキー & 徳永真亜基
ホームページ <http://www.epm-hassin.net>
<http://www.bunshinism.net>
<http://www.aa.alpha-net.ne.jp/markey19/>
=====